宮城県文化財調査報告書第210集

太　田　窯　跡

―― 三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅶ ――

平　成　19　年　3　月

宮　城　県　教　育　委　員　会
国土交通省東北地方整備局

宮城県文化財調査報告書第210集

太　田　窯　跡

―― 三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅶ ――

序　　文

宮城県北東部を縦貫する三陸縦貫自動車道は、現在河北インターチェンジまでの区間が開通し、さらに北に向かって工事が進められています。

この三陸縦貫自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化財が埋蔵されている遺跡があります。埋蔵文化財は、わたしたちの郷土の歴史と文化を根底から支える歴史遺産であると同時に、将来における文化向上の礎の一部をなすものです。宮城県教育委員会では、これらの遺跡を保護するために関係機関と協議を積み重ね、路線の一部変更も含め万全を期してまいりました。

本報告書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との保存協議に基づき、三陸縦貫自動車道の建設に先立って実施した石巻市（旧桃生郡桃生町）太田窯跡に関する調査報告書です。遺跡の調査を通して、この地域の歴史を解明していく上でも貴重な成果を得ることができました。

今後、この報告書を多くの方々に活用していただけば幸いに存じます。

最後に、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対して、厚く御礼申し上げる次第です。

平成19年３月

宮城県教育委員会
教育長　佐々木　義　昭

例　　言

1．本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との協議に基づき実施した、三陸縦貫自動車道建設に伴う太田窯跡の発掘調査報告書である。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．本書の第１図は国土交通省国土地理院発行の「飯野川」「涌谷」「登米」「西野」（1/25,000）の地形図を複製して使用した。

4．測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。なお、方位は座標北を表している。

5．本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＥ：井戸跡　ＳＫ：土壙

ＳＸ：焼土遺構・土器集中地点・遺物包含層など

6．本書で使用した遺構番号は、Ⅰ区については調査年の2003年の末尾を取り300番台の数字を、Ⅱ区については同様に2005年の末尾を取り500番台の数字を用いた。また、番号は遺構の種別に関わらず、調査時の際に付した通し番号を用いている。

7．土色の記載にあたっては、『新版　標準土色帖　1994年度版』（小山・竹原：1994）を使用した。

8．本書は調査担当者との協議の後に、執筆・編集を菊地逸夫が行った。

9．本書の調査成果については、現地説明会資料等でその一部を公開しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。

10．発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺　跡　名：太田窯跡（おおたかまあと）（宮城県遺跡地名表登載番号70027）

遺 跡 記 号：ＳＴ

所　在　地：宮城県石巻市桃生町太田字拾貫および薬田

調 査 主 体：宮城県教育委員会

調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 期 間：確 認 調 査　　平成14年10月15日～25日

Ⅰ区事前調査　平成15年４月30日～５月７日　６月17日～８月１日

Ⅱ区事前調査　平成17年５月９日～６月13日　10月12日～11月30日

調 査 面 積：Ⅰ区　約1,200㎡

Ⅱ区　約2,700㎡

調　査　員：確 認 調 査　　須田良平　吉野　武

Ⅰ区事前調査　須田良平　西村　力　田中政幸

Ⅱ区事前調査　相原淳一　菊地逸夫　保原恒雄　豊村幸宏　田中政幸

目　　次

Ⅰ　はじめに…… 1

Ⅱ　遺跡の概要…… 1
　1．遺跡の位置と地理的環境 …… 1
　2．周辺の遺跡 …… 3

Ⅲ　調査の方法と経過…… 3

Ⅳ　発見された遺構と遺物…… 6
　Ⅰ区
　　1．Ⅰ区の基本層序…… 6
　　2．検出された遺構…… 6
　　①竪穴住居跡…… 6
　　②掘立柱建物跡…… 14
　Ⅱ区
　　1．Ⅱ区の基本層序…… 18
　　2．検出された遺構…… 18
　　①竪穴住居跡…… 20
　　②掘立柱建物跡…… 33
　　③調査区南西隅検出遺構…… 34
　　④調査区北東隅検出遺構…… 44

Ⅴ　考　　察…… 47
　1．Ⅰ区…… 47
　　(1) 遺物について…… 47
　　(2) 遺構について…… 49
　2．Ⅱ区…… 49
　　(1) 遺物について…… 49
　　(2) 遺構の年代…… 53

Ⅵ　ま と め…… 54

Ⅰ　はじめに

仙台市から岩手県宮古市に至る自動車専用道路が、三陸縦貫自動車道として立案・計画され、そのうち「矢本石巻道路」については平成８年度から工事に着手する事業計画が決定された。この「矢本石巻道路」は、石巻河南インターチェンジを起点に旧北上川を渡り、桃生インターチェンジ（仮称）に至るものである。事業報告では、幅23.5mの４車線を整備するにあたり、地形の起伏に沿って大規模な切土や盛土を行うものであった。こうした経緯を受けて、宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所は遺跡保存のための協議を行ってきた。その結果、遺跡への影響を避けるために一部区間においてはルートの変更を行う一方で、分布調査を行い、新たな遺跡の有無を確認するとともに、周知の遺跡については確認調査を行い、これらの結果に基づいて再協議を重ね、遺跡の保存と道路整備事業との調整を図ってきた。

こうした中で、宮城県教育委員会は平成12年度から予定路線内の遺跡の発掘調査に順次着手した。平成12年度は桃生郡河北町（現石巻市）沢田山西遺跡・新田東遺跡の確認調査を実施し、平成13年度には両遺跡の事前調査を行った。平成14年度には、沢田山西遺跡・桃生郡桃生町（現石巻市）角山遺跡の事前調査を行い、これと並行して桃生城跡・万歳山Ｃ遺跡・太田窯跡・細谷Ｂ遺跡などの確認調査を進めた。平成15・16年度には本報告書に掲載した太田窯跡の北側地区（Ⅰ区）と桃生城跡・万歳山Ｃ遺跡・沢田山西遺跡・細谷Ｂ遺跡・角山遺跡・八幡遺跡の事前調査を行い、平成17年度には太田窯跡の南側地区（Ⅱ区）・角山遺跡・山居遺跡の事前調査を実施し、石巻市分の調査をすべて終了している。

Ⅱ　遺跡の概要

１．遺跡の位置と地理的環境（第１図）

太田窯跡は宮城県石巻市桃生町太田字薬田および字拾貫弐番に所在する。石巻市は宮城県の北東部に位置し、地形的には北上川下流域の石巻平野に属する沖積地と北上山地の南端にあたる丘陵地帯からなっている。この地域の丘陵は中生代三畳紀から新生代第三紀に形成された泥岩や粘板岩からなる基盤層群からなり、火山性堆積層は発達せず、表土は基盤岩の上に薄い腐植土や基盤風化土、崖錘性の基盤崩落土を乗せるのみである。

このうち、太田窯跡は北上川と旧北上川によって囲まれた三個の独立丘陵群の南側の丘陵にある。この丘陵は東西3.5km、南北4.0kmの広さで、小さな沢により樹枝状に解析され奥深くまで谷状の地形が続き、その周囲には沖積地が広がっている。本遺跡はこの丘陵の北西部に位置し、北西および南西から延びる沢によって画された台地状の高まりの西側斜面から南斜面にあり、南北350m、東西250mの広がりをもっている。遺跡の現況は畑地・水田・宅地として利用されているが、遺跡の周辺は平坦地が少なく広い耕作地を確保することが難しいため、古くから水田開発等に伴う造成工事が行われ、旧地形の損なわれている部分も多い。

№1	遺跡名	立地	種別	時代	№2	遺跡名	立地	種別	時代	№3	遺跡名	立地	種別	時代
1	**太田窯跡**	丘陵	窯跡・集落	奈良・平安・中世	16	沢山城跡	丘陵	城館	中世	31	太田館跡	丘陵麓	城館	中世
2	角山遺跡	丘陵	集落・水田	縄文・弥生・古墳後・奈良・平安・中近世	17	壇ノ森館跡	丘陵	城館	中世	32	万歳山B遺跡	丘陵	散布地	奈良・平安
3	桃生城跡	丘陵	城柵	奈良・平安	18	黄竜淵館跡	丘陵	城館	中世	33	万歳山A遺跡	丘陵	散布地	縄文
4	細谷B遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中・奈良・平安	19	陣ヶ峰館跡	丘陵	城館	中世	34	問答山遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
5	山居遺跡	丘陵	包含層・集落	縄文中～晩・奈良・平安・近世	20	樫崎貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文早・中	35	赤間館遺跡	丘陵斜面	城館	中世
6	新田東遺跡	丘陵	包含層・集落	縄文早～晩・弥生後・古墳・奈良・平安・近世	21	樫崎館跡	丘陵麓	城館	中世	36	神取山城跡	丘陵	城館・窯跡	中世・近世
7	日高見神社遺跡	丘陵	散布地	縄文・古墳後	22	山田館跡	丘陵	城館・散布地	古代・中世	37	神取御殿山窯跡	丘陵斜面	窯跡	近世
8	万歳山C遺跡	丘陵	集落	縄文中・後・古代	23	山田囲古墳	丘陵斜面	古墳	古墳後	38	高屋敷遺跡	丘陵麓	散布地	古代
9	袖沢古墳群	丘陵	古墳	古墳	24	中津山城跡	丘陵	城館	中世・近世	39	飯野館跡	丘陵麓	城館	中世
10	深山貝塚	丘陵	貝塚	縄文中～晩	25	白鳥古墳	丘陵	円墳	古墳	40	外吉野遺跡	丘陵麓	散布地	古代
11	倉埣遺跡	自然堤防	散布地	縄文晩・古代	26	安部館跡	丘陵麓	城館	中世	41	茶臼山館跡	丘陵	城館	中世
12	茶臼山附近遺跡	丘陵斜面	散布地	古代	27	八幡遺跡	丘陵	集落・水田	縄文・平安	42	柳津館山館跡	丘陵	集落・城館	平安・中世
13	如来山館跡	自然堤防	城館	中世	28	十貫壱番遺跡	丘陵斜面	散布地	奈良・平安・近世	43	館ヶ森館跡	丘陵	城館	中世
14	永井館跡	丘陵	城館	中世	29	宗全山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代	44	合戦谷古墳	丘陵斜面	古墳	古墳後
15	十所貝塚	丘陵斜面	貝塚・散布地	縄文早・中・古代	30	細谷遺跡	丘陵	散布地	縄文晩期・古代	45	山崎館跡	丘陵	城館	中世

第１図　太田窯跡と周辺の遺跡

なお、本遺跡は分布調査の段階で、断面観察により焼面と須恵器の散布が確認されたことから窯跡として登録されているが、今回の調査範囲の中では窯跡本体は検出されなかった。

２．周辺の遺跡（第１図）

太田窯跡の所在する北上川と旧北上川によって囲まれた独立丘陵群の周辺には多くの遺跡が分布している。最も古い時代の遺跡は、縄文海進期にあたる縄文時代早期後葉の樫崎貝塚（20）・十所貝塚（15）・長根浦貝塚で、樫崎貝塚では縄文時代早期から中期の貝層が確認され土器・石器・骨角器の他に屈葬人骨が発見されている。このほか、縄文時代の貝塚や遺跡として、深山貝塚（10）や中期から晩期の包含層が検出された山居遺跡（5）がある。

弥生時代の遺跡としては、桃生城跡（3）や新田東遺跡（6）、角山遺跡（2）があるが、いずれも土器片が採集された程度である。

古墳時代の遺跡としては、袖沢古墳群（9）、新田東遺跡、角山遺跡などがあり、袖沢古墳群では埴輪を伴う円墳が、新田東遺跡では前期の竪穴住居跡が、角山遺跡では後期の集落跡が調査されている。

古代では、『続日本紀』によれば天平宝字三年（759）に完成したとされる桃生城跡や細谷Ｂ遺跡（4）、山居遺跡、新田東遺跡、角山遺跡がある。また、桃生郡内筆頭の延喜式内社日高見神社の現在の社殿もこれらと同一丘陵上に位置し、境内付近（7）には古代の遺物が散布することで知られている。
さらに、角山遺跡や八幡遺跡（27）では10世紀前葉に降下した灰白色火山灰によって覆われた水田跡が検出されている。

中世では、安倍館跡（26）、太田館跡（31）、永井館跡（14）、壇ノ森館跡（17）、黄竜淵館跡（18）などの多くの城館跡が知られているが、多くは『風土記』関係にその所伝を残すのみで、考古学的な調査は行われておらず、詳細は不明である。

Ⅲ　調査の方法と経過（第２図）

太田窯跡は平成14年に確認調査を行い、遺跡全体の遺構の分布状況を把握した。

それによれば、遺構は遺跡中央の西から入り込む深い谷地形を挟んで200m以上離れた南北二ヶ所に分布し谷地の部分には存在しないことが明らかとなった。事前調査については、こうした結果と用地の買収状況を考慮して北側地区（Ⅰ区）は平成15年に、南側地区（Ⅱ区）は平成17年に行った。

調査は重機により耕作土を除去し、基盤となる岩盤や堆積層の上面でケズリ作業により遺構の検出を行った。検出された遺構は断面図を作成しながら掘り下げ、完掘後には写真撮影と20分１の縮尺で平面図を作成した。

測量の基準となる点は、Ⅰ区では用地境界杭のR512（基準点１）とR513（基準点２）で、この２点を結んだ直線を南北の基線に設定して、この線とこれと直交する東西軸をもとにグリッドを設定した。グリッドの座標値は下記の通りで、座標北は真北に対して7.5°西に偏している。

基準点１　X＝－161,024.833　Y＝38,387.612

第２図　調査区の位置（Ⅰ区とⅡ区）

W-15
EW-0
N-20
SI304
SI305
N-10
N-10
SI302
SD308
基準点1
SN-0
SN-0
SB307a
SB307b
SB310
SB309
SB312
SB313
S-10
SB314
基準点2
SI303
W-15
EW-0
0
5
10m

第３図　遺構配置図（Ⅰ区）

基準点２　X＝－161,005.359　Y＝38,381.777

Ⅱ区では、検出された遺構毎に日本測地系を基準とした杭を設定してそれをもとに個々に実測図を作成し、調査区の全体図についてはその基準杭をもとに平板測量を行った。なお、調査区の南西部の遺物集中地点に関してはX=－161,196.000とY=38,409.000をグリットの原点とし、東方向に３ｍ間隔でそれぞれアルファベットのＡＢＣ・・を、同様に南方向に３ｍ間隔でアラビア数字の1・2・3・・を附して層位毎に遺物を取り上げた。

なお、検出された遺構については、遺構毎に略号（例言参照）を附しⅠ区については300番台の、Ⅱ区については500番台の数字を順に用いた。

以下、それぞれの地区毎に記載を進める。

Ⅳ　発見された遺構と遺物

Ⅰ区（第３図）

１．Ⅰ区の基本層序

Ⅰ区は北に張り出す小丘陵の西斜面にあたり、調査区の周辺は古くから水田や畑が造成されていた。これらの田畑は斜面に段状に作られており、広範囲に渡って切り土が施され、そのため周辺地形の源況は大きく損なわれていた。

調査区内の層序は黒褐色の耕作土が１層あるのみで、この直下からは基盤となる風化した泥岩層があらわれる。また、住居跡などの窪地となっている部分には灰白色火山灰の堆積も認められた。

なお、遺構はすべて基盤上で検出されている。

２．検出された遺構

検出された遺構には竪穴住居跡５軒、掘立柱建物跡８棟、溝３条があるが、いずれも後世の造成や耕作により削平され残存状況は良くない。以下遺構ごとに説明を加える。

①竪穴住居跡

SI302竪穴住居跡（第４図）

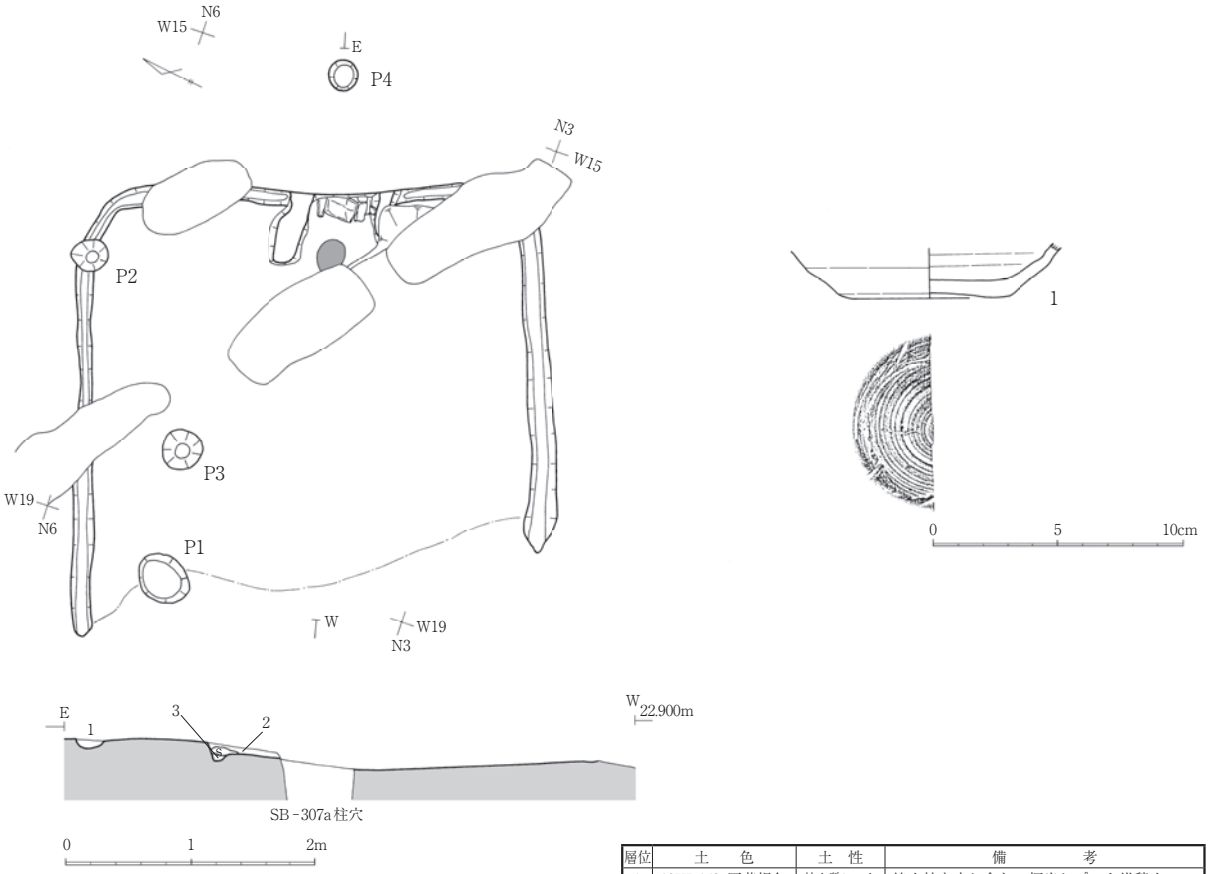
［位置・重複］N5－W18付近に位置する。住居の西側は削平を受けており、検出されたのは西壁を除く部分である。SB307掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。

［平面形・規模］残存する部分から方形を基調とすると考えられる。規模は南北3.9m、東西は残存部が3.7mである。

［壁］地山の岩盤をそのまま壁としている。周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。残存状況は良くなく、最も高い東壁でも周溝底面から15cmである。

［柱穴］床面と北東隅の壁から合計３個のピットが検出された。いずれのピットからも柱痕跡は検出されていないが、位置的にP1は主柱穴の可能性もある。

［床面］掘り窪めた地山の岩盤をそのまま床としている。床面はほぼ平坦である。



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	焼土粒を少し含む。煙出しピット堆積土。
2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土や炭化物を含む。
3	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	周溝堆積土。

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	須恵器　坏		6.4		内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り

第４図　SI302住居跡と出土遺物

［カマド］東壁のほぼ中央にあり、周溝に粘板岩の蓋をしてから構築されている。燃焼部と煙出しピットが検出された。煙道部と右側壁の大部分は削平や他の遺構との重複により失われている。

燃焼部は幅60cm、奥行き60cmあり、床面の中心の部分は径約20cmにわたり赤変している。側壁は粘土を積み上げて構築している。煙道は検出されなかったが、奥壁から１ｍほど東に離れた地点から径約30cm、深さ10cmの円形のピットが検出されており、煙出しピットと考えられる。

［周溝］残存するする部分では全周する。幅15～25cm、深さ５～10cmで断面形はＵ字形を呈する。

［堆積土］わずかに残存する。粘土質のシルトで自然流入土である。

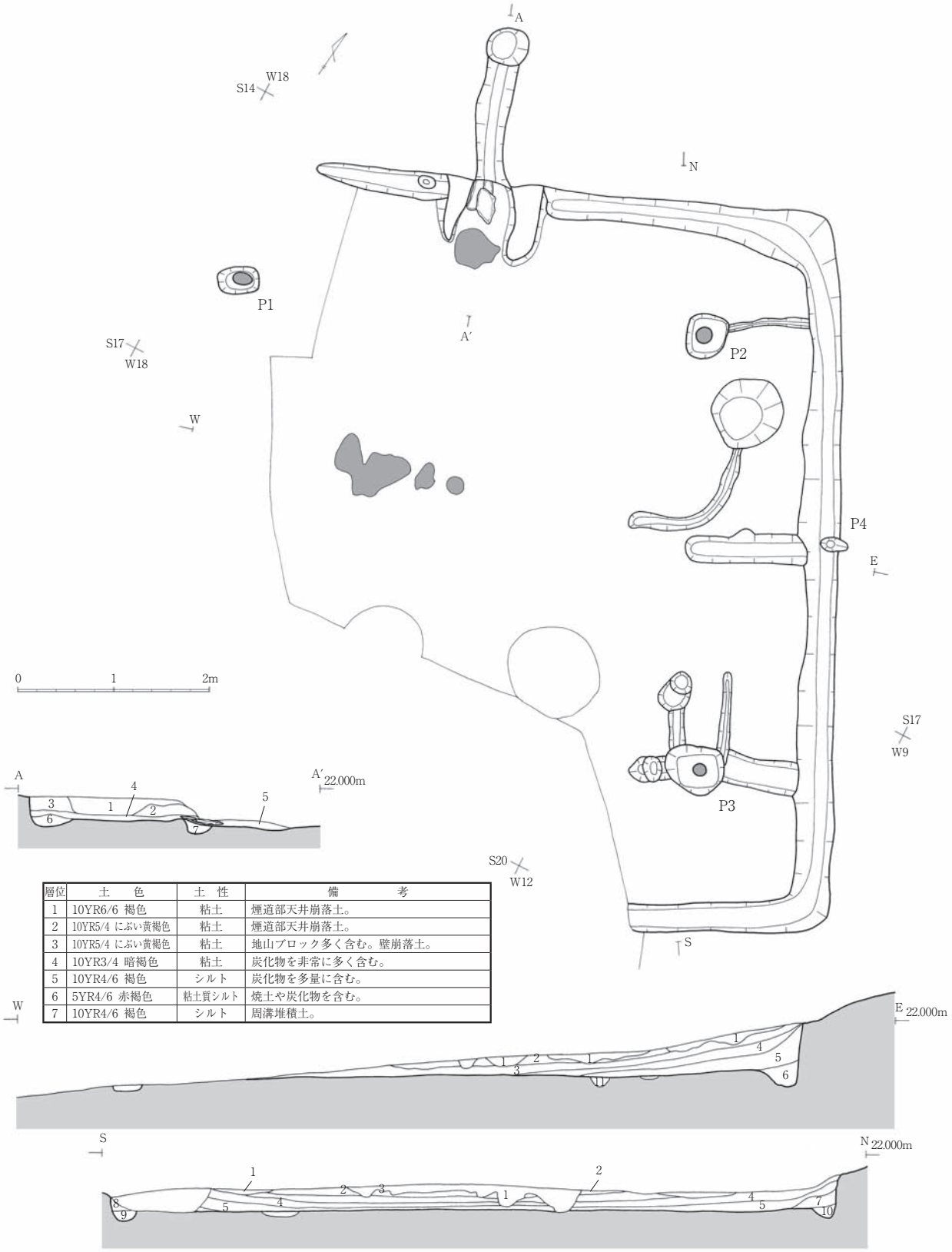
［出土遺物］床面や堆積土中から土師器坏・甕、須恵器坏が出土しているが、いずれも磨滅したものや小片であり、図示できるものは須恵器坏１点である。

SI303竪穴住居跡（第５～７図）

ほぼ同位置で建て替えが行われており、古い段階の住居（SI303a竪穴住居跡）の東壁を約２ｍ外側に拡張して新しい住居（SI303ｂ竪穴住居跡）を構築している。

SI303b竪穴住居跡（第５図）

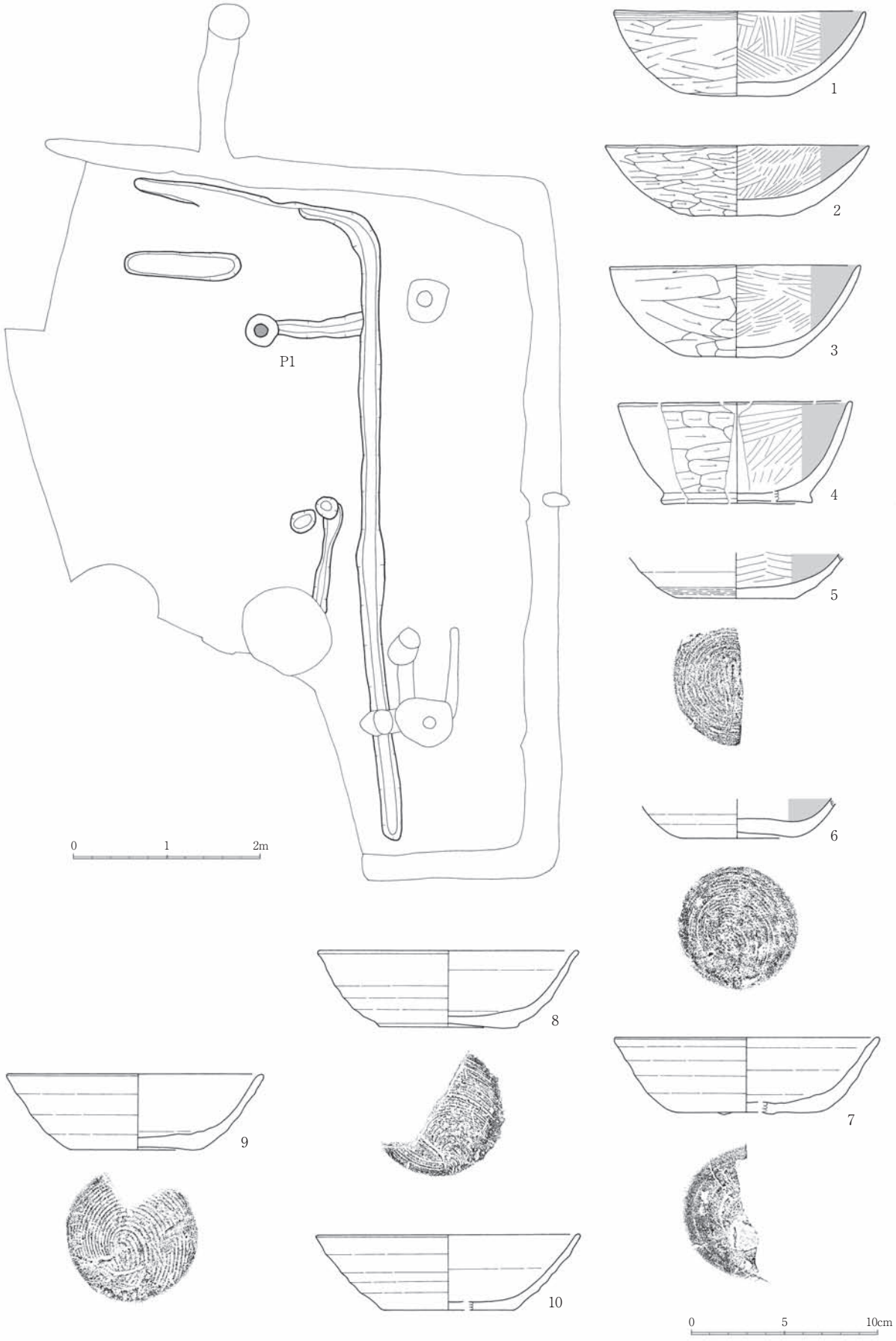
［位置・重複］S18－W15付近に位置する。住居の西半は削平を受けており、検出されたのは東壁と南・北壁の一部である。



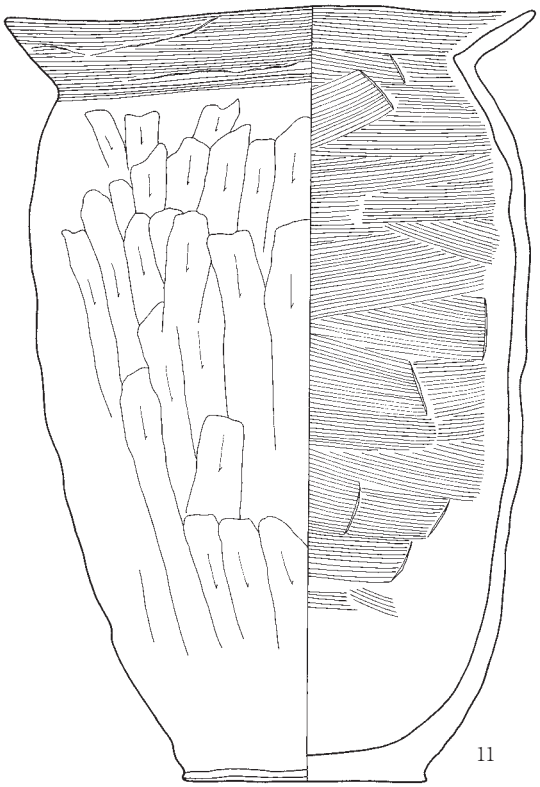
層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR6/6 褐色	粘土	煙道部天井崩落土。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	煙道部天井崩落土。
3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	地山ブロック多く含む。壁崩落土。
4	10YR3/4 暗褐色	粘土	炭化物を非常に多く含む。
5	10YR4/6 褐色	シルト	炭化物を多量に含む。
6	5YR4/6 赤褐色	粘土質シルト	焼土や炭化物を含む。
7	10YR4/6 褐色	シルト	周溝堆積土。

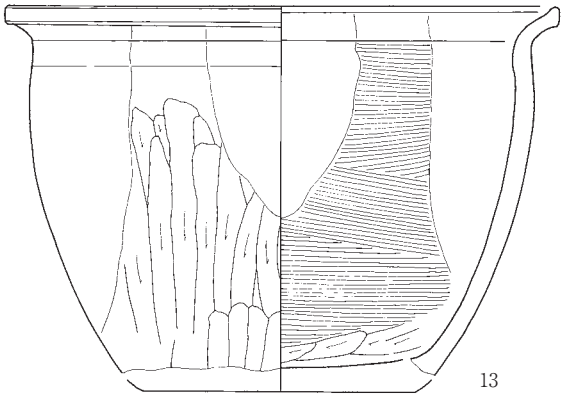
層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	旧表土。
2	2.5YR7/3 浅黄色	シルト	灰白色火山灰。
3	10YR4/6 褐色	シルト	地山礫を含む。
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック・炭化物含む。
5	10YR4/6 褐色	シルト	地山ブロック・炭化物含む。
6	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	地山礫・炭化物含む。東側周溝堆積土。
7	10YR5/8 黄褐色	シルト	地山礫を含む。
8	10YR4/4 褐色	シルト	地山ブロック・炭化物を含む。
9	10YR4/6 褐色	シルト	南側周溝堆積土。
10	10YR4/6 褐色	シルト	北側周溝堆積土。
11		シルト	SI－303a周溝堆積土。

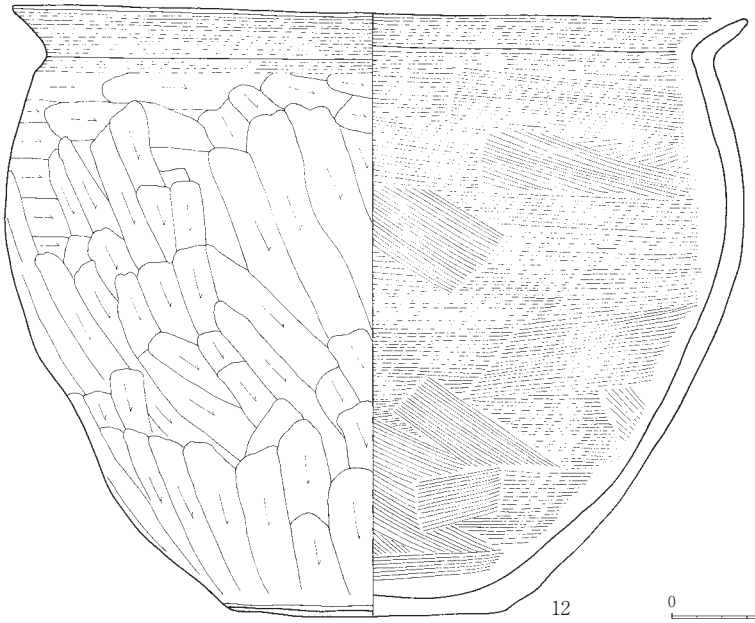
第５図　SI303b住居跡



第６図　SI303a住居跡と出土遺物







番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	掘埋	土師器　坏	13.6	6.1	4.5	外：ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理　底：ヘラケズリ
2	カマド	土師器　坏	14.2	5.9	3.8	外：ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理　底：ヘラケズリ
3	床	土師器　坏	13.5	6.1	4.9	外：ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理　底：ヘラケズリ
4	1	土師器　坏	12.5	8.1	5.4	外：ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理　底：ヘラケズリ
5	2	土師器　坏		6.4		外：ロクロ＋回ヘラケズリ　内：ミガキ＋黒　底：回ヘラケズリ
6	2	土師器　坏		6.1		外：ロクロ　内：ミガキ＋黒　底：回転糸切り
7	1	須恵器　坏	14.2	7.4	4.1	内外面：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り
8	2	須恵器　坏	14.1	7.3	4.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り
9	床	須恵器　坏	13.9	7.1	4.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り
10	2	須恵器　坏	14.2	7.1	4.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り
11	床	土師器　甕	21.5	9.7	30.8	口内外：ヨコナデ　体外：ヘラケズリ　体内：ヘラナデ
12	床	土師器　鉢	29.5	11.1	24.5	口内外：ヨコナデ　体外：ヘラケズリ　体内：ヘラナデ
13	床	須恵器　鉢	22.4	推11	推15.5	外：ロクロ＋ヘラケズリ　内体：ヘラナデ

第７図　SI303住居跡出土遺物

［平面形・規模］残存する部分から方形を基調とすると考えられる。規模は南北7.5m、東西は残存部が5.4mと非常に大形である。

［壁］地山の岩盤をそのまま壁としている。周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。削平されていない部分の残存状況は良く、壁高は最も高い北東隅では周溝底面から約70cmである。

［柱穴］床面や東壁から合計８個のピットが検出されており、この中でP1・2・3は柱痕跡や柱抜取痕を持つこと、位置関係から主柱穴と考えられる。主柱穴の掘方は一辺約40cmの方形を基調としたもので、深さは約40cmである。P2・3では直径約15cmの柱痕跡が認められている。柱間寸法は東西がP1・2間で4.8m、南北がP2・3間で4.4mである。

また、P4は東壁のほぼ中央にあり、柱の抜き取り痕が検出されている。このピットは床面で検出された小溝と接する部分に掘られており、位置的に両者は関連して機能したものと考えられる。

［床面］大部分は掘り窪めた地山の岩盤をそのまま床としているが、部分的には張り床を施している。残存する部分の床面はほぼ平坦である。

［カマド］北壁に付設されており、周溝に粘板岩の蓋をしてから構築されている。左側壁は撹乱のため、残存状況は悪い。燃焼部は幅60cm、奥行き80cmあり、焚き口付近の底面は径約50cmにわたり赤変している。側壁は粘土を積み上げて構築している。煙道は長さ130cmあり、底面は先端部にむかって緩やかに上る。煙出しピットは円形で、径約40cm、深さ30cmあり、煙道の底面よりも深く掘り込まれている。

［周溝］残存する部分では壁直下を全周する。幅20～40cm、深さ10～15cmである。立ち上がりは壁側がほぼ垂直であるのに対し、内側は緩やかである。

［堆積土］11層に細別された。いずれも自然流入土で、全体的に地山の礫片を多く含む。２層は10世紀初頭に降下したといわれる「灰白色火山灰」で、住居が大部分埋まった段階で堆積している。

［出土遺物］床面やカマド燃焼部、堆積土中から土師器坏・甕・鉢、須恵器坏・鉢が出土しているが、この中で図示できるものは土師器坏６点（1～6）・甕１点（11）・鉢１点（12）、須恵器坏4点（7～10）・鉢１点（13）である。

SI303a竪穴住居跡（第６図）

［位置・重複］S18－W15付近に位置する。SI303ｂ竪穴住居跡の床面を精査している段階で検出された。北壁から東壁にかけての周溝の一部と柱穴が検出されのみで、住居の南西側のほとんどは削平を受けている。

［平面形・規模］残存する部分から方形を基調とすると考えられる。規模は残存する部分で南北6.9m、東西2.7mである。

［柱穴］床面から合計３個のピットが検出されており、この中でP1は柱痕跡を持つことや位置関係から主柱穴と考えられる。柱穴の掘方は径約35cmの円形で、深さは約40cmで、中心から直径約15cmの柱痕跡が認められている。

［周溝］北壁から東壁にかけて検出された。幅20～25cm、深さ約10cmである。断面形はＵ字形を呈している。

［出土遺物］SI303aの遺物でSI303b竪穴住居跡の遺物と明らかに分離できものは周溝から出土したもののみであるが、その中で図示できるものはない。

SI304竪穴住居跡（第８図）

［位置・重複］N18－W15付近に位置する。床面の西半は削平の為に失われており、検出されたのは東半部である。

［平面形・規模］残存する部分から方形を基調とすると考えられる。規模は南北4.7m、東西は残存部が3.7mある。

［壁］風化した地山の岩盤を壁としている。周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁で周溝底面から約30cmである。

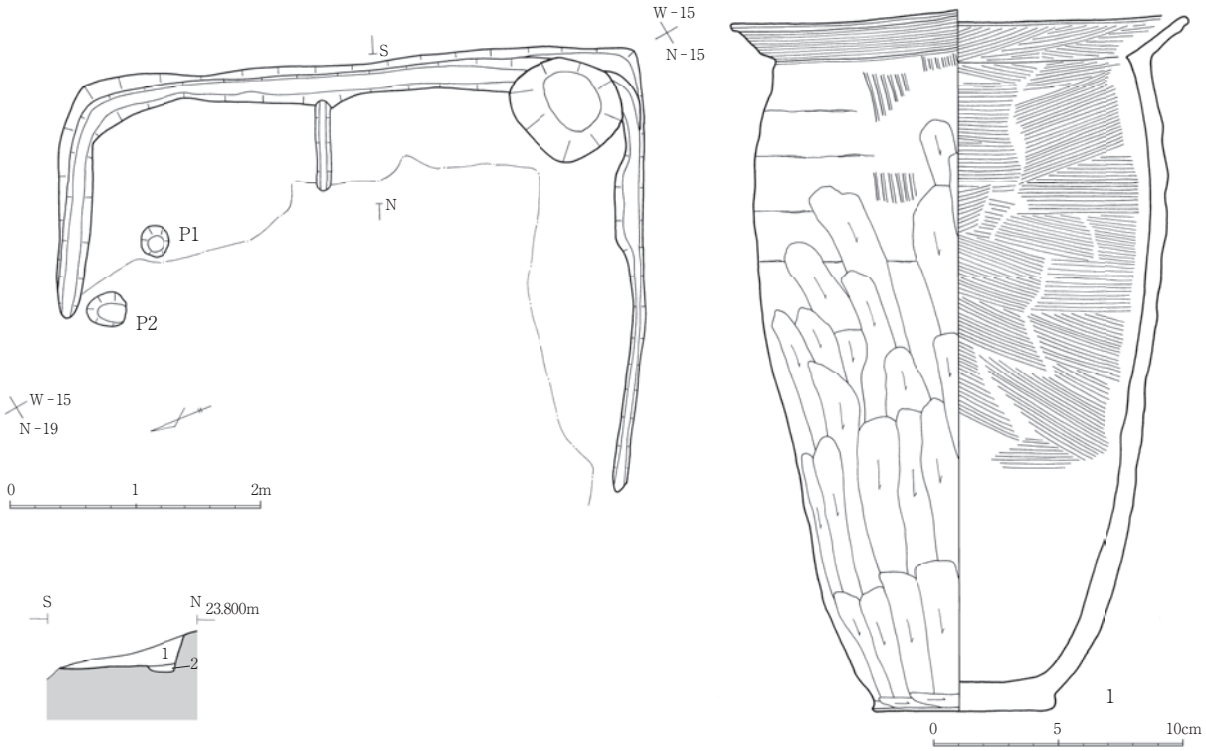
［柱穴］床面から２個のピットが検出されている。いずれのピットからも柱痕跡は検出されていないが、位置的にP1は主柱穴の可能性もある。

［床面］掘り窪めた地山の岩盤をそのまま床としている。残存する部分はほぼ平坦である。

［周溝］残存する部分では全週する。幅10～30cm、深さ約10cmで断面形はＵ字形を呈する。

［堆積土］壁際にわずかに残存する。地山の岩片を多く含む自然流入土である。

［床面の施設］北東隅から浅い落ち込みと、東壁と直交する小溝が検出された。



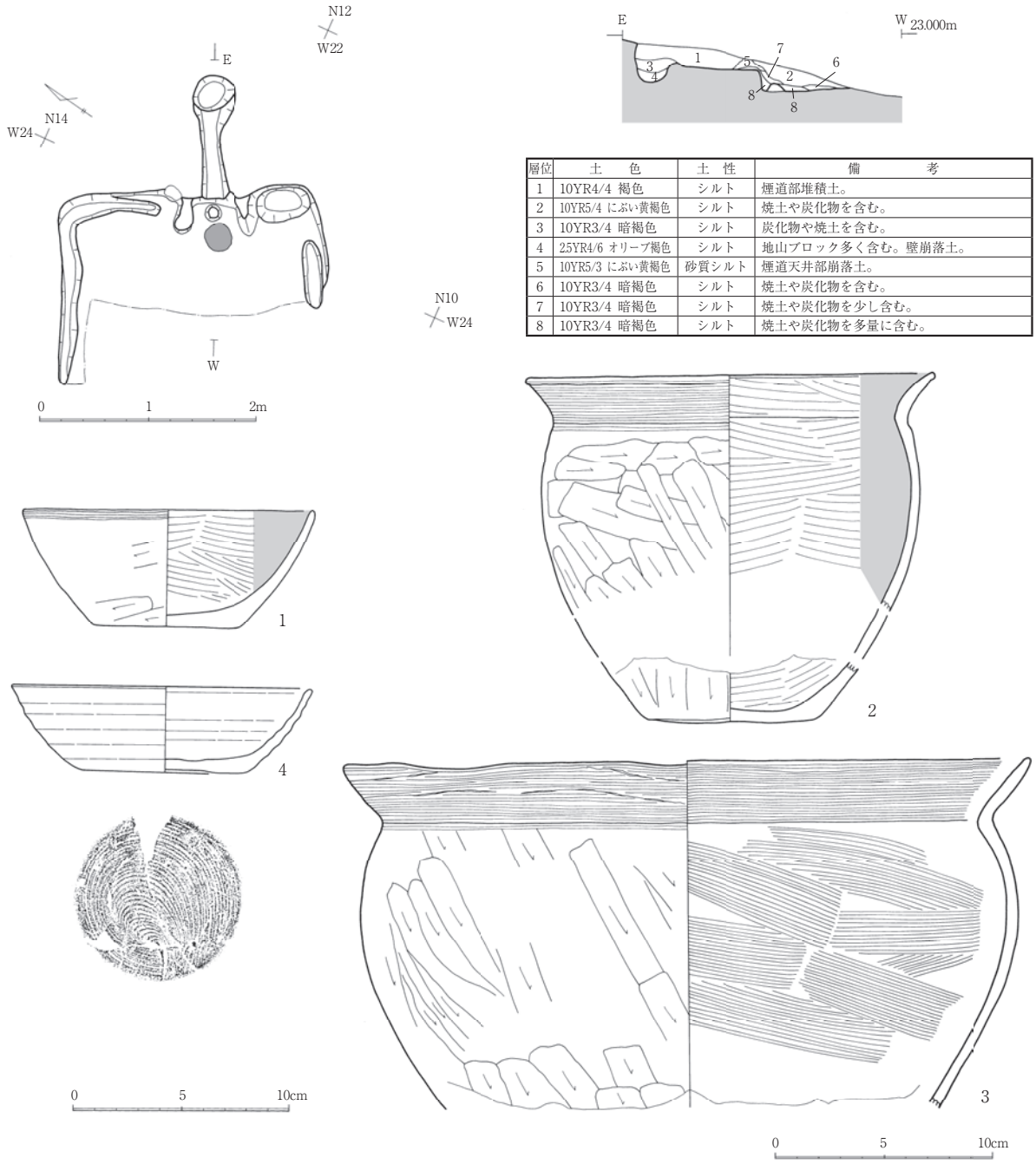
層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/4 褐色	シルト	地山ブロックと炭化物を少量含む。
2	10YR5/6 黄褐色	シルト	地山ブロックを多く含む　周溝堆積土。

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	土師器　甕	18.3	7.8	27.9	口外：ヨコナデ　体外：ヘラケズリ　口体内：ヘラナデ

第８図　SI304住居跡と出土遺物

落ち込みは一辺約80cmの隅の丸い方形を呈し、深さは約10cmある。底面中央の径20cmの範囲が焼けている。小溝は約80cmにわたって検出されたが先端は削平されている。位置的に排水もしくは間仕切の施設であったと考えられる。

［出土遺物］床面から土師器坏・甕、須恵器坏が出土しているが、図示できたものは土師器甕１点である。



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/4 褐色	シルト	煙道部堆積土。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	焼土や炭化物を含む。
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物や焼土を含む。
4	2.5YR4/6 オリーブ褐色	シルト	地山ブロック多く含む。壁崩落土。
5	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	煙道天井部崩落土。
6	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土や炭化物を含む。
7	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土や炭化物を少し含む。
8	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土や炭化物を多量に含む。

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	床	土師器　坏	13.6	5.4	6.5	外ヘラケズリ　内：ヘラミガキ＋黒色処理
2	床	土師器　甕	19.0	8.0	(16.0)	口外：ヨコナデ　体外：ヘラケズリ　体内：ヘラミガキ
3	カマド	土師器　鉢	31.8			口内外：ヨコナデ　体外：ヘラケズリ　体内：ヘラナデ
4	カマド	須恵器　坏	14.0	7.4	4.0	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り

第９図　SI305住居跡と出土遺物

SI305竪穴住居跡（第９図）

［位置・重複］N14－W24付近に位置する。住居の西半は削平を受けており、検出されたのは東半部である。SB307掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。

［平面形・規模］残存する部分から方形を基調とすると考えられる。規模は南北2.5m、東西は残存部が1.7mである。

［壁］地山を壁としている。床面もしくは周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁で周溝底面から約30cmである。

［柱穴］住居内の床面からはピットは検出されておらず、柱穴は不明である。

［床面］地山面を、そのまま床としている。床面はほぼ平坦である。

［カマド］東壁のほぼ中央に付設されている。燃焼部と煙道部が残存している。燃焼部は幅45cm、奥行き50cmあり、底面の中心は径約30cmにわたり赤変している。この部分と奥壁の間からは焼けた粘土の高まりが検出されており、位置的に支脚と考えられる。煙道は奥壁から80cmほど東に延び、底面はほぼ平坦である。煙道の先端には径約30cm、深さ40cmの煙出しピットが取り付く。

［周溝］カマドと南東隅を除く部分から検出されている。幅約20cm、深さ約５cmで、堆積土は炭化物を若干含む黄褐色のシルトである。

［堆積土］８層に細分された。基本的には地山の岩片を多く含む自然流入土である。4・5層はカマドの天井部や壁の崩落土である。

［床面の施設］南東隅から50cm×30cm、深さ５cmの楕円形を呈した浅い皿状の落ち込みが検出されており、位置的に貯蔵穴の可能性がある。

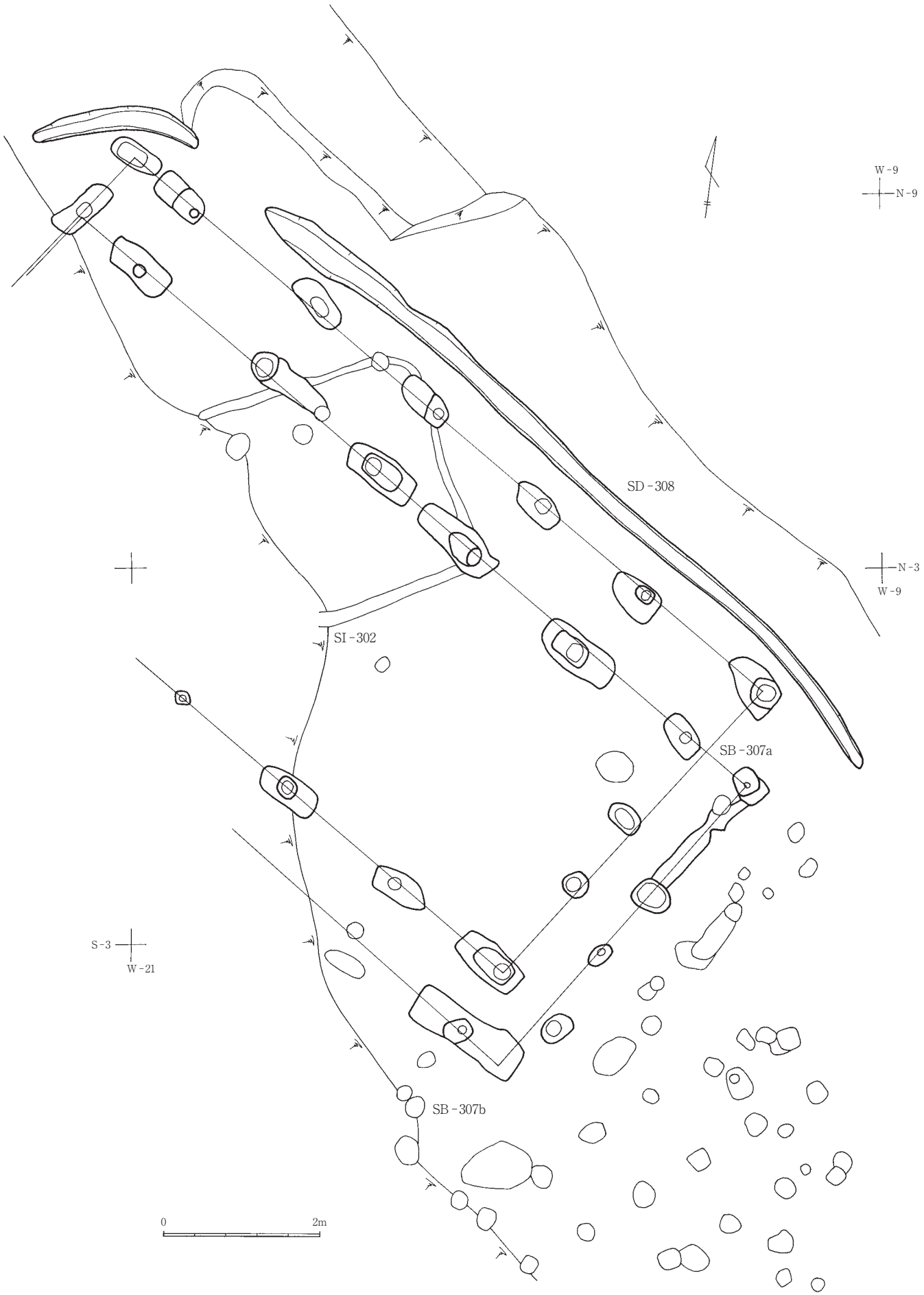
［出土遺物］図示できるものとしては、カマドの燃焼部の床面から土師器坏１点（1）・甕１点（2）・鉢１点（3）、須恵器坏１点（4）がある。

②掘立柱建物跡

SB307掘立柱建物跡（第10図）

調査区のほぼ中央で検出された。東西に一間分（1.2m）離れた位置からほぼ同規模の建物が二棟検出されており、建て替えが行われたものと考えられる。ここでは東側の建物をSB307a掘立柱建物跡と西側の建物をSB307b掘立柱建物跡として扱うが新旧関係は不明である。また、SI302・SI305竪穴住居跡と重複しこれよりも新しい。

SB307a掘立柱建物跡は3間×6間の南北棟である。桁行は東側柱列が総長13.65mで、柱間寸法は南から2.45m、2.20m、2.30m、2.60m、2.60m、1.50mである。梁行は南側柱列が総長6.15mで、柱間寸法は東から3.00m、1.35m、1.80mである。建物の方向は東側柱列でN－57°－Wである。柱穴は長方形を基調としており規模は60×120cm程度である。柱穴の底面は平坦に掘られているものは少なく、中には底面で柱の部分のみ一段落ち込むものも見られた。それによれば柱は円形で直径は約20cmである。また、東側柱列から80cmほど東側からは柱列を取り囲むようにL字形に巡るSD308が検出されており、この建物の雨落ち溝と考えられる。



第10図　SB307a.b掘立柱建物跡

第11図　SB309～314掘立柱建物跡

SB307b掘立柱建物跡はSB307a掘立柱建物跡の1.2m西側から検出された建物で４間×７間の南北棟である。桁行は東側柱列が総長14.40mで、柱間寸法は南から1.25m、2.25m、2.30m、2.20m、2.40m、2.60m、1.40mである。梁行は南側柱列が総長6.00mで、柱間寸法は東から2.30m、1.25m、1.45m、1.00mである。建物の方向は東側柱列でＮ－56°－Ｗである。柱穴は長方形を基調としており規模は60×130cm程度である。柱穴の中には底面で柱の部分が一段落ち込むものも見られ、それによれば柱は円形で直径は約20cmである。

SB309掘立柱建物跡（第11図）

調査区の南側S10－W12付近に位置する。SB310・SB311・SB312掘立柱建物跡と位置的に重複するが新旧関係は不明である。２間×２間の総柱の建物で、若干南北に長い。北側柱列は総長4.36mで、柱間寸法は西から2.16m、2.20mである。西側柱列は総長4.72mで、柱間寸法は北から2.28m、2.44mである。建物の方向は東側柱列でＮ－45°－Ｗである。柱穴は円形もしくは隅の丸い方形を呈し、規模は一辺30～40cmである。

SB310掘立柱建物跡（第11図）

調査区の南側S10－W12付近にあり、SB309の一間分東側に位置している。SB309・SB311・SB312掘立柱建物跡と位置的に重複するが新旧関係は不明である。２間×２間の総柱の建物で若干南北に長い。北側柱列は総長4.52mで、柱間寸法は西から2.20m 、2.32mである。西側柱列は総長4.80mで、柱間寸法は北から2.32m、2.48mである。建物の方向は東側柱列でＮ－43°－Ｗである。柱穴は円形もしくは隅の丸い方形を呈し、規模は一辺30～40cmである。

SB311掘立柱建物跡（第11図）

調査区の南側S9－W15付近にあり、建物の西側は削平されている。SB309・SB310・SB312掘立柱建物跡と位置的に重複するが新旧関係は不明である。１間×２間以上の東西棟である。桁行は南側柱列が総長4.40m以上で、柱間寸法は東から2.20m、2.20mである。梁行は東側柱で2.32mである。建物の方向は南側柱列でＥ－43°－Ｎである。柱穴は円形もしくは隅の丸い方形を呈し、規模は一辺30cm程度である。

SB312掘立柱建物跡（第11図）

調査区の南側S5－W12付近にあり、SB311の一間半東側に位置している。SB309・SB310・SB311掘立柱建物跡と位置的に重複するが新旧関係は不明である。１間×３間の東西棟である。桁行は北側柱列が総長6.80mで、柱間寸法は東から2.52m、2.20m、2.08mである。梁行は東側柱で2.32mである。建物の方向は南側柱列でＥ－40°－Ｎである。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、規模は一辺30～40cmである。

SB313掘立柱建物跡（第11図）

調査区の南端S12－W8付近にある。SB314掘立柱建物跡と位置的に重複するが新旧関係は不明である。２間×２間の建物で北側柱列のみ３間である。北側柱列は総長4.08mで、柱間寸法は東から1.20m、1.08m、1.76mである。西側柱列は総長が4.32mで、柱間寸法は北から2.40m、1.92mである。建物の方向は西側柱列でN－45°－Wである。柱穴は楕円形もしくは隅の丸い方形を呈し、規模は一辺40～60cmである。

SB314掘立柱建物跡（第11図）

調査区の南端S15－W8付近にある。SB313掘立柱建物跡と位置的に重複するが新旧関係は不明である。２間×３間の南北棟である。桁行は西側柱列が総長5.68mで、柱間寸法は北から2.40m、1.20m、2.08mである。梁行は北側柱列が総長2.20mで、柱間寸法は東から1.00m、1.20mである。建物の方向は西側柱列でN－39°－Wである。柱穴は不整の楕円形を呈し、規模は長軸が30～40cmである。

Ⅱ区（第12図）

１．Ⅱ区の基本層序

Ⅱ区は丘陵の南斜面から裾に広がる沖積地にあたり、調査区の周辺は古くから宅地や水田や畑として利用され旧地形は大きく損なわれていた。

調査区内の層序は北半の斜面部分と南半の沖積地部分とでは大きく異なり、北半では黒褐色の耕作土の直下で基盤となる風化した泥岩層に達するのに対して、南半では耕作土や後世の盛土下に４枚の堆積層が観察された。以下それぞれの層位について簡単に述べる。

Ⅰ層　耕作土直下で検出された暗褐色のシルト層でⅠ区の南半全域に分布する。南西部の沢地の付近では約30cmの厚さがあり、土器や炭化物・焼土を多く含んでいる。

Ⅱ層　灰白色火山灰層でⅠ区の南端部に分布し、傾斜に沿って厚みを増している。

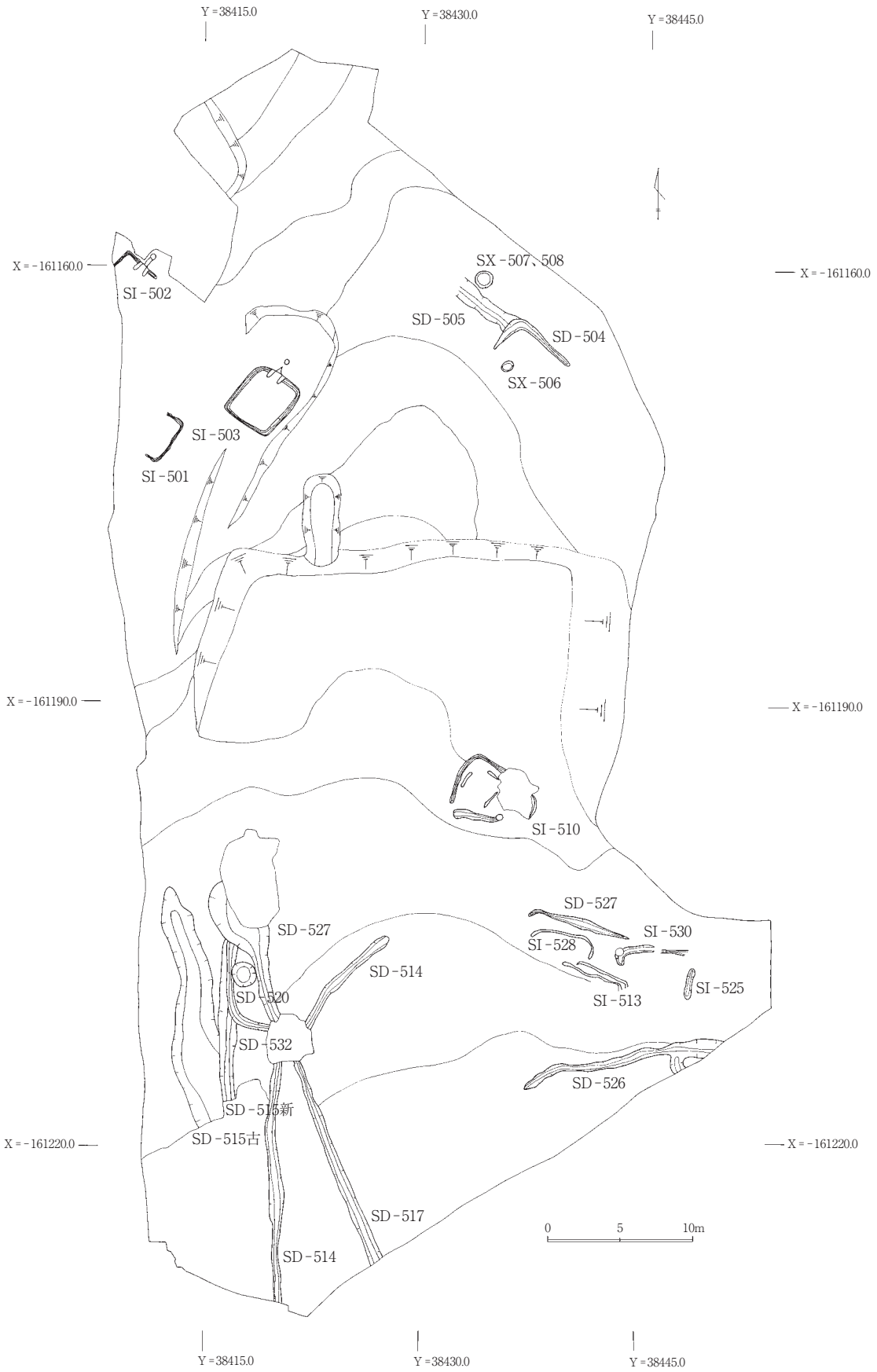
Ⅲ層　黒褐色のシルト層でⅠ区の南半全域に分布する。20～40cmの厚さがあり、土器や炭化物・焼土を多く含んでいる。

Ⅳ層　黒褐色のシルト層でⅠ区の南半全域に分布する。30～40cmの厚さがあり、基盤の岩片や小礫を多く含む。土器や炭化物も若干含まれる。

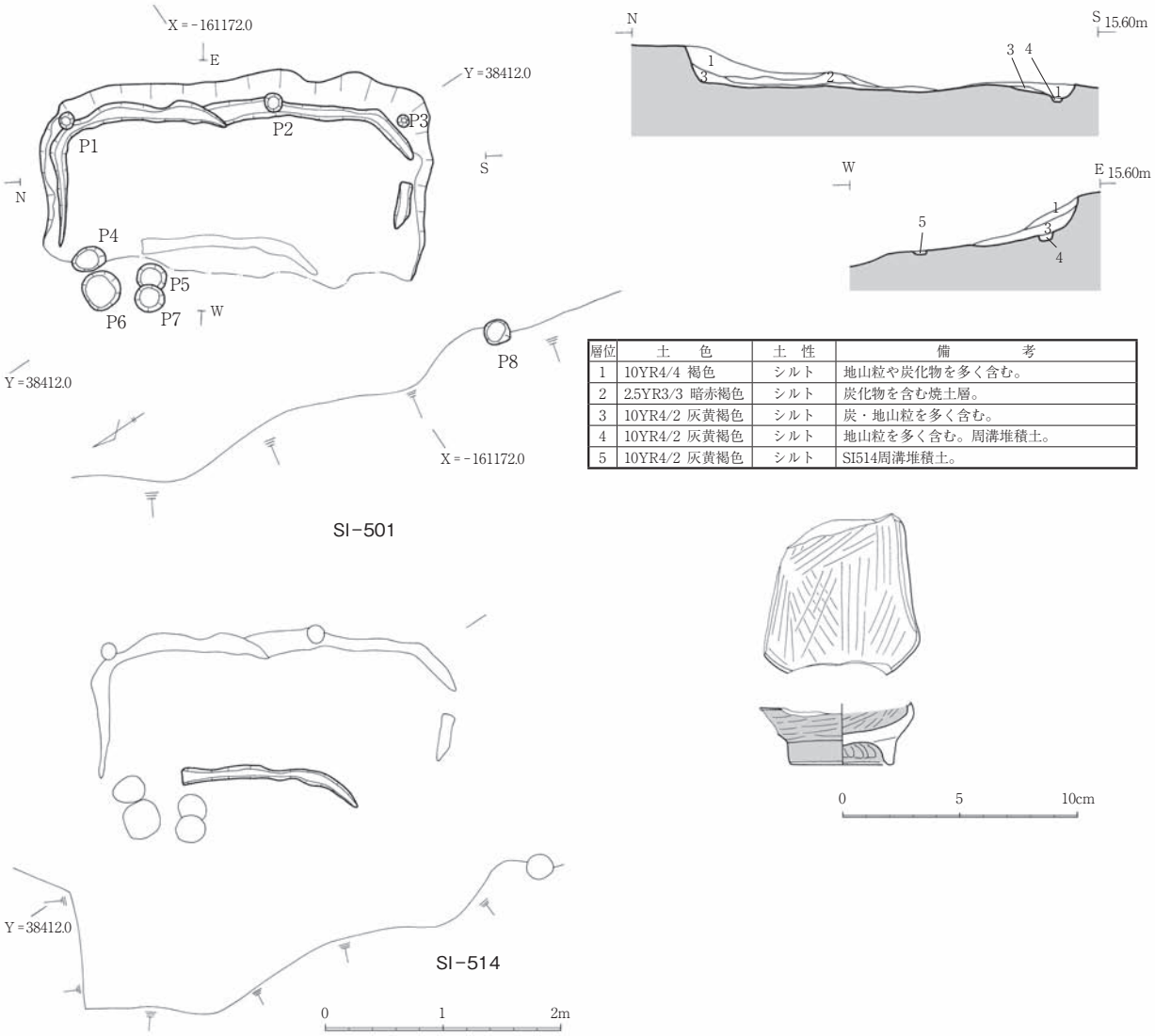
なお、遺構の検出は、北半の斜面部分では基盤上で、南半ではⅠ層の上面で行い、Ⅰ層遺構の精査後にはさらにⅢ層・Ⅳ層の上面でそれぞれ確認作業を行った。

２．検出された遺構

Ⅱ区で検出された遺構には竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡1棟、遺物集中地点、溝跡、井戸跡、ピット群、焼け面を伴う土壙（焼土遺構）などがある。以下順に記述を加える。



第12図　遺構配置図（Ⅱ区）



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/4 褐色	シルト	地山粒や炭化物を多く含む。
2	2.5YR3/3 暗赤褐色	シルト	炭化物を含む焼土層。
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	炭・地山粒を多く含む。
4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	地山粒を多く含む。周溝堆積土。
5	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	SI514周溝堆積土。

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	土師器　耳皿		4.5		内外面：ヘラミガキ＋黒色処理　501－1

第13図　SI501･514住居跡と出土遺物

①竪穴住居跡

SI501竪穴住居跡（第13図）

［位置・重複］調査区の北西部に位置する。住居の西半は削平を受けており、検出されたのは東壁と北・南壁の一部である。SI514竪穴住居跡と重複しこれよりも新しい。

［平面形・規模］残存する部分から方形を基調とすると考えられる。規模は南北3.4m、東西は残存部が1.8mである。

［壁］地山を壁としている。床面もしくは周溝底面から比較的緩やかに立ち上がる。壁高は最も高い北壁で周溝底面から約40cmである。

［床面］地山面を、そのまま床としており、ほぼ平坦である。

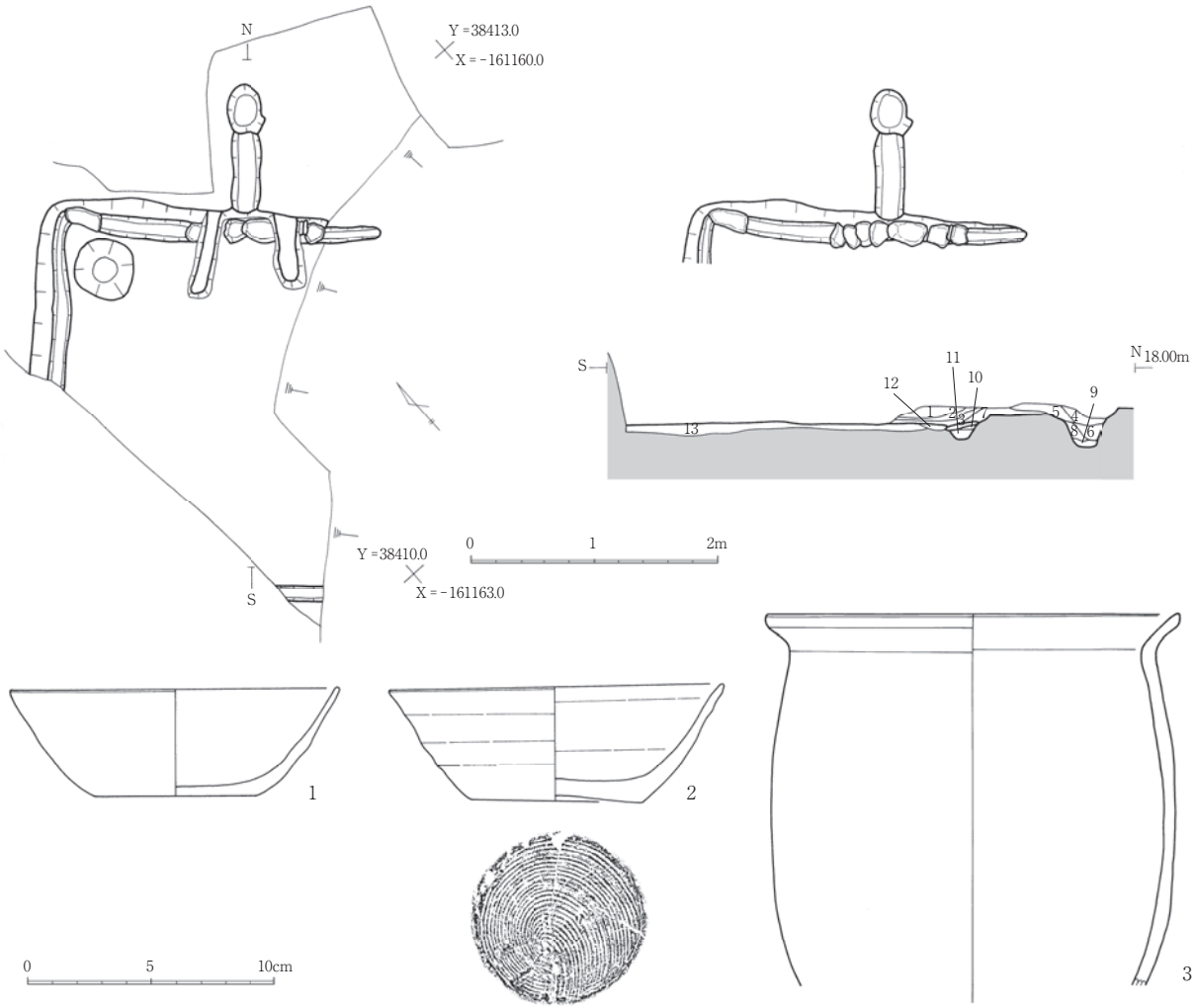
［柱穴］住居内の床面や東壁から合計７個のピットが検出されているが、P1～3以外は重複するSI514とどちらに伴うかは不明である。また、ピットからは柱痕跡は検出されていないがP1～3は位置的に壁柱穴と考えられる。

［カマド］北壁から約80cm離れた地点で径30cm、深さ20cmの円形のピット（P8）が検出されており、位置的に煙出しピットの可能性がある。その他の部分は検出されなかった。

［周溝］残存する部分では全周する。幅７～20cm、深さ約５cmで、断面形はＵ字形を呈している。堆積土はグライ化の進んだ灰黄褐色のシルトである。

［堆積土］４層に細分された。いずれも自然流入土である。全体的に地山の岩片を多く含み、床面近くの層はグライ化している。

［出土遺物］図示できたものは堆積土中から出土した土師器耳皿のみであるが、その他に土師器坏・鉢・甕、須恵器坏・甕の小片がある。堆積土中から出土した土師器坏には回転糸切りによる底部切り



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR6/4 にぶい黄褐色	シルト	地山粒や炭化物を多く含む。
2	10YR4/4 褐色	シルト	地山粒を多く含む。カマド崩落土。
3	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	地山粒を多く含む。カマド崩落土。
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	地山粒を多く含む。
5	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	煙道部崩落土。
6	10YR5/6 にぶい黄褐色	シルト	煙出しピット崩落土。
7	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	煙道部堆積土。
8	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	地山粒・炭化物を多く含む。
9	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物を非常に多く含む。
10	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	地山粒を多く含む。周溝堆積土。
11	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	周溝堆積土。
12	10YR6/6 明黄褐色	シルト	カマド構築時の掘方埋土。
13			掘方埋土。

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	土師器　坏	14.4	6.6	4.3	調整不明　内：黒色処理　底：回転糸切り　502－2
2	1	須恵器　坏	13.7	7.0	4.7	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　502－1
3	1	土師器　甕	16.9			調整不明　502－3

第14図　SI502住居跡と出土遺物

離し後に手持ちヘラケズリの再調整を加えたもの（１点）と無調整のもの（１点）がある。土師器甕は体部・底部の破片がある。長胴形を呈するもので制作にはロクロを使用していない。外面にはヘラケズリやヘラナデの調整痕がみられる。

SI514竪穴住居跡（第13図）

［位置・重複］調査区北西部に位置する。SI501の床面で検出されており、これよりも古い。

［平面形・規模］北側の周溝の一部が検出されたのみで、住居の大部分は削平により失われている。残存部から隅の丸い方形を基調としたと考えられるが、全体形は不明である。確認された部分の長さは南北1.6mである。

［周溝］幅10～15cm、深さ約５cmで、断面形は皿状を呈している。

SI502竪穴住居跡（第14図）

［位置・重複］調査区の西側丘陵の頂部にあたる北西隅に位置する。南東部は削平を受け、住居西部は調査区外へと延びており、検出されたのは住居の北西隅付近と南壁の一部である。

［平面形・規模］平面形は方形を基調とするものと考えられる。規模は南北約3.1m、東西は残存する部分で2.7mである。

［壁］地山を壁としている。床面もしくは周溝底面から比較的緩やかに立ち上がる。壁高は残存状況のよい北西隅付近で周溝底面から約40cmである。

［床面］北東隅周辺では地山面を、それ以外の部分では張り床が施されている。ほぼ平坦である。

［柱穴］住居内からピットは検出されておらず、柱穴は不明である。

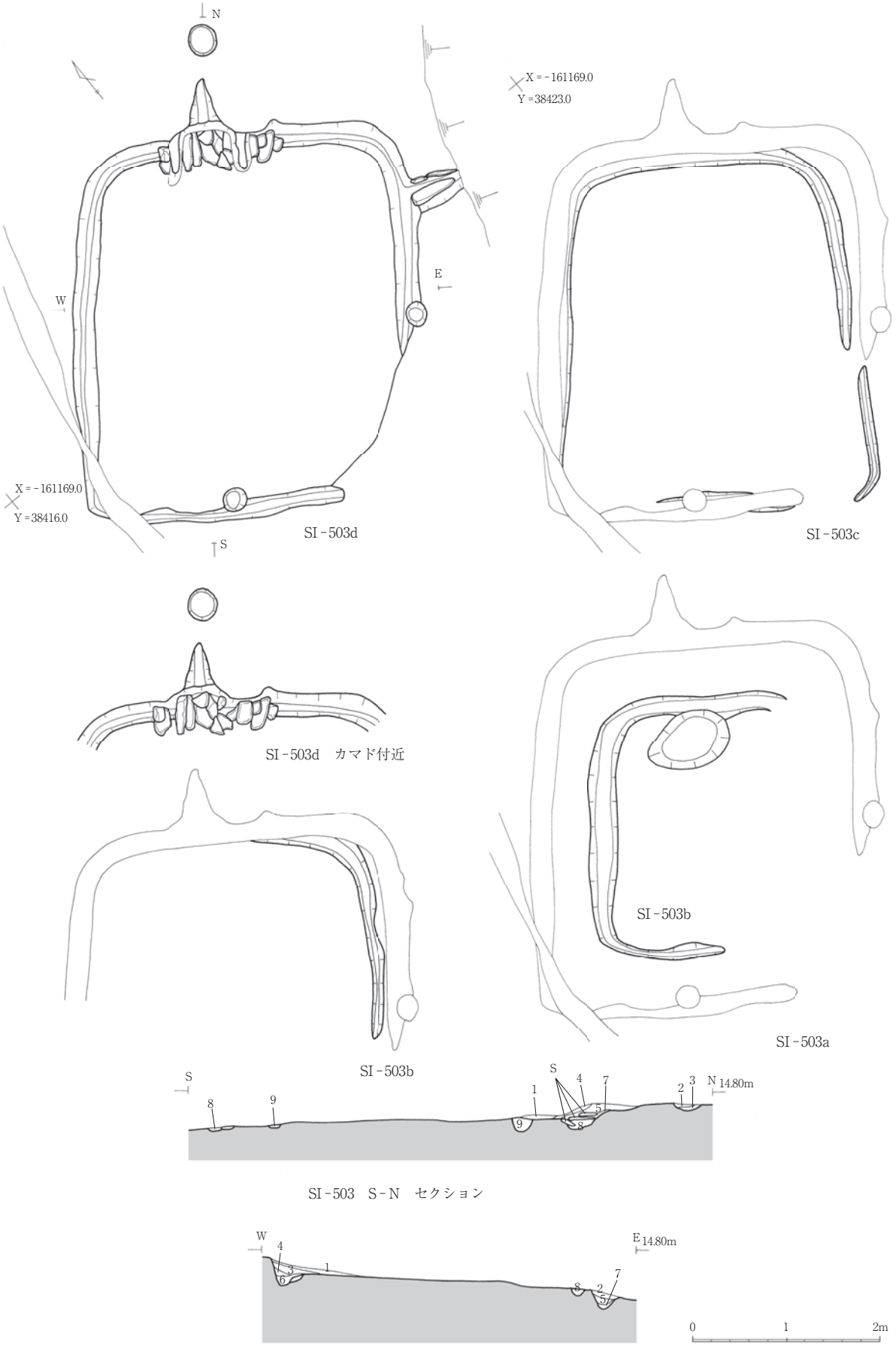
［カマド］北壁に付設され、燃焼部と煙道が残存する。周溝を粘板岩で覆いその上に構築している。燃焼部は幅55cm、奥行き65cmの大きさで、底面の中央に粘板岩の角礫を立て支脚としている。支脚から焚き口の付近は、20×30cmの範囲で赤変している。煙道部は奥壁から105cmほど北側に延び、底面は先端に向かって緩やかに下がる。煙道の先端には長径40cm、短径30cmの楕円形で、深さ30cmの煙出しピットが取り付く。ピットは煙道底面よりも20cmほど深く掘られている。

［周溝］検出された部分では全周する。カマド附近と北側隅は板状の粘板岩で覆われており、開渠として機能したと考えられる。幅約20cm、深さ８cmで、断面形はＵ字形を呈する。堆積土は砂を含む灰黄褐色粘土質シルトである。

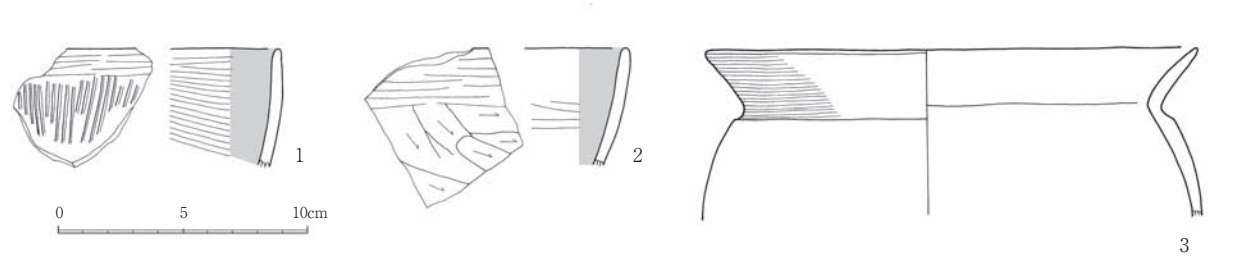
［その他の施設］北東隅で１辺45cmの隅丸方形の落ち込みが検出されており、位置的に貯蔵穴と考えられる。深さは15cmで、断面形は皿状を呈している。

［堆積土］13枚に細分され、いずれも自然流入土である。褐色からにぶい黄褐色を呈するシルトで、全体的に地山の岩片を多く含んでいる。周溝堆積土はグライ化が進んでいる。

［出土遺物］床面および堆積土中から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壷が出土している。図示できたものは土師器坏（1）・甕（3）、須恵器坏（2）である。これらの他に床面直上から出土した土師器坏には底部全面に回転ヘラケズリの調整が加えられているものもある。



第15図　SI503住居跡



番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	土師器　坏				外：ハケメ　口：ミガキ　内：ミガキ＋黒色処理　503－2
2	1	土師器　坏				外：ヘラケズリ　口：ミガキ　内：ミガキ＋黒色処理　503－3
3	1	土師器　甕	19.6			外：調整不明　口：ヨコナデ　503－1

層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	地山粒や炭化物を多く含む。
2	10YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト	地山粒を多く含む。
3	10YR4/4 褐色	シルト	機能時の堆積土。
4	10YR4/4 褐色	シルト	燃焼部崩落土。
5	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	地山粒や炭化物を多く含む。
6	2.5YR5/2 灰青黄色	粘土質シルト	炭を多く含む。
7	10YR4/6 褐色	シルト	カマド構築時の掘方埋土。
8	10YR6/6 明黄褐色	シルト	SI-503d周溝堆積土。
9	10YR5/6 黄褐色	シルト	SI-503c周溝堆積土。

層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	地山粒や炭化物を多く含む。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	地山粒を若干含む。
3	10YR5/6 にぶい黄褐色	シルト	地山粒を多く含む。壁崩落土。
4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	地山粒を多く含む。壁崩落土。
5	10YR4/4 褐色	シルト	周溝堆積土。
6	2.5YR5/2 灰青黄色	粘土質シルト	周溝堆積土。
7	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	周溝堆積土。
8	10YR5/6 黄褐色	シルト	SI －503c周溝堆積土。

第16図　SI503住居跡出土遺物

SI503竪穴住居跡（第15・16図）

調査区北側の中央西よりに位置する。住居南東隅は削平され消失している。他の遺構との重複はないが、床面を掘り下げた段階で４時期（a旧→d新）の変遷が認められた。

SI503d竪穴住居跡

［平面形・規模］平面形は隅の丸い長方形を呈し、規模は南北が4.1m、東西が3.6mである。

［壁］地山を壁としており、周溝底面から垂直に立ち上がる。壁高は保存状況の良い西壁で周溝底面から約20cmである。

［床］住居の北半は地山をそのまま床としているが、南半は掘り方を埋め戻して床としている。床はほぼ平坦であるが、わずかに東側に向かって傾斜している。

［カマド］北壁の西よりに付設され、燃焼部と煙道部からなる。周溝を粘板岩で覆いその上に構築している。燃焼部は幅60cm、奥行き70cmで、焚き口の部分は40×60cmの範囲で赤変している。側壁は粘土を積み上げて構築している。煙道は先端部が削平されているが煙出しピットの位置から推定すると70cmあり、底面は先端部にむかって緩やかに上る。煙出しピットは円形で、径約30cm、深さ10cmある。

［周溝］壁直下で検出され、東壁の北東隅よりの部分から外延溝として住居外へと延びる。カマド付近のみ板状の粘板岩が蓋状に並べられていた。断面形はU字状で幅20～30cm、深さは15cmである。外延溝の部分は、長さ60cm、幅35cm、深さは20cmあり、溝の側面に板状の粘板岩を立てて構築している。周溝内からは壁材痕跡などは検出されておらず、住居の排水の施設と考えられる。

［柱穴］東壁・南壁のほぼ中央から２個のピットを検出した。いずれからも柱痕跡は検出されなかったが、位置的に壁柱穴の可能性がある。

［堆積土］残存状況は良くないが、13枚に細分された。いずれも自然堆積土である。褐色から黄褐色のシルトで、全体的に地山の岩片を多く含み粘性が強い。

［出土遺物］管玉・瓦・土師器坏・甕・鉢、須恵器坏が床面および堆積土中から出土しており、図示できたものは管玉・土師器坏・甕である。図示したもの以外では土師器坏・甕・鉢があり、いずれもロクロ非使用のものである。これらの中で堆積土中から出土した土師器坏には平底を呈し、外面にヘラケズリが施されているものがある。同じく土師器鉢は外面がヘラケズリ、内面がヘラミガキ黒色処理されている。

SI503c竪穴住居跡

SI503d竪穴住居跡とほぼ同位置で重複し、住居北西隅付近の外側の上端は失われている。検出されたのは周溝部分のみである。平面形は南側が若干開いた隅の丸い台形を呈し、規模は南北が3.9m、東西が北壁で2.9m、南壁で3.4mである。周溝は削平のため一部途切れる部分があるが、全周していたものと考えられる。幅10～20cm、深さは深い部分で約10cmである。黄褐色のシルトで埋められている。

SI503b竪穴住居跡

検出されたのは北東隅付近の周溝のみで、他の部分は重複もしくは削平により失われている。平面形は隅の丸い方形を基調とすると考えられるが、全体的な規模は不明である。

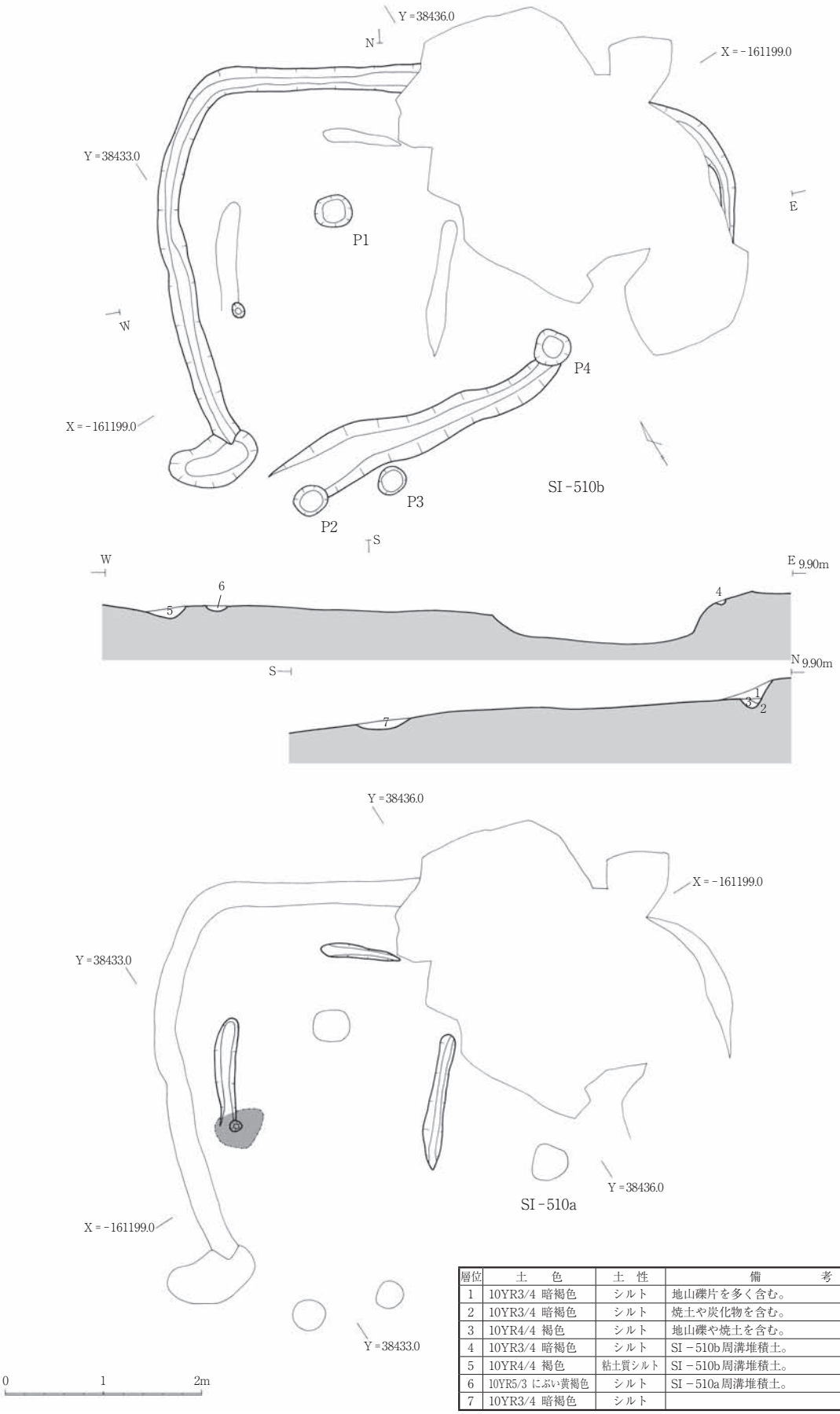
周溝は残存する部分では幅約20cm、深さは深い部分で約10cmである。

SI503a竪穴住居跡

SI503住居跡の最も内側で検出された。残存するのは周溝のみで、東辺から南東隅付近にかけては削平のため失われている。平面形は隅の丸い方形を呈し、規模は南北が2.8m、東西が2.0mである。周溝は残存する部分では幅約10～35cm、深さは深い部分で約10cmである。北辺の中央付近からは長軸90cm、短軸60cmの楕円形の浅い落ち込みが検出されている。位置的にカマド燃焼部の痕跡の可能性がある。

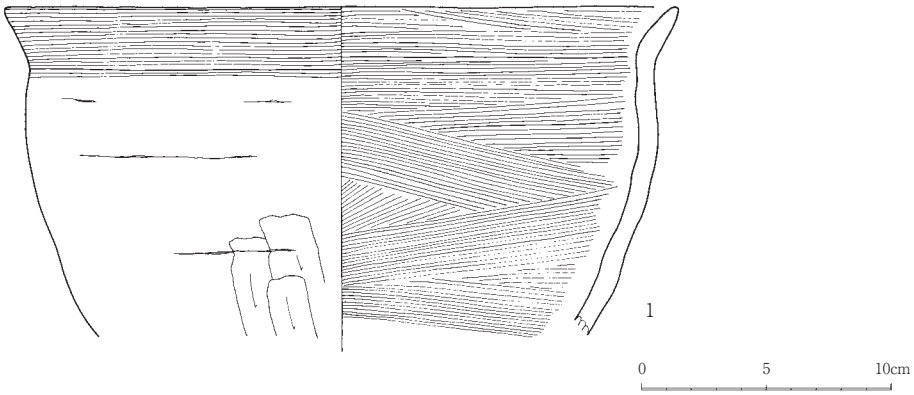
SI509竪穴住居跡（第35図）

［概要］調査区の北東隅に位置し、東側丘陵の頂部にある。遺構の南東部の大部分は撹乱により失われ、検出されたのは住居北西隅の周溝のみである。SD505溝跡と重複しこれよりも新しい。平面形は方形を基調とするものと考えられ、残存部の長さは西辺90cm、北辺120cmである。周溝は幅約20cm、深さ５～10cmで、断面形はU字形を呈する。住居内からは２個のピットが検出されているが、柱痕跡が認められないことや位置的に柱穴とは断定できない。土師器坏・甕、須恵器坏・甕が堆積土中から出土しているが、いずれも小片である上に磨滅が著しく図示できるものはない。この中で須恵器坏は回転糸切りによるものである。



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山礫片を多く含む。
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土や炭化物を含む。
3	10YR4/4 褐色	シルト	地山礫や焼土を含む。
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	SI－510b周溝堆積土。
5	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	SI－510b周溝堆積土。
6	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	SI－510a周溝堆積土。
7	10YR3/4 暗褐色	シルト	

第17図　SI510a･b住居跡



番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　　整
1	3	土師器　鉢	27.0			内：ヘラナデ　外：ヘラケズリ　口：ヨコナデ　510－1

第18図　SI510住居跡出土遺物

SI510竪穴住居跡

［位置・重複］調査区中央の東寄りに位置する。同位置で２軒の住居（SI510a=旧、SI510b=新）が重複している。

SI510b竪穴住居跡（第17・18図）

［平面形・規模］住居の南東部や南西半は撹乱や削平のため失われているが、残存部から平面形は隅の丸い方形を基調としたものと考えられる。規模は南北約5.9m、東西は残存する部分で3.8mである。

［壁］地山の岩盤をそのまま壁としている。周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は比較的残存状況のよい北東隅付近で周溝底面から約15cmである。

［床面］残存する部分では地山面をそのまま床としている。ほぼ平坦で、若干西側に傾斜している。

［柱穴］住居内から合計４個のピットが検出されている。いずれのピットからも柱痕跡は検出されていないが、位置的にP1は主柱穴の可能性がある。

［カマド］北壁西よりで焼土や炭化物を多く含む楕円形の浅い落ち込みが検出されており、カマド燃焼部から煙道部にかけての痕跡と考えられる。

［周溝］壁直下から検出されている。幅約20cm、深さ８cmで、断面形はＵ字形を呈する。堆積土は褐色の粘土質シルトである。

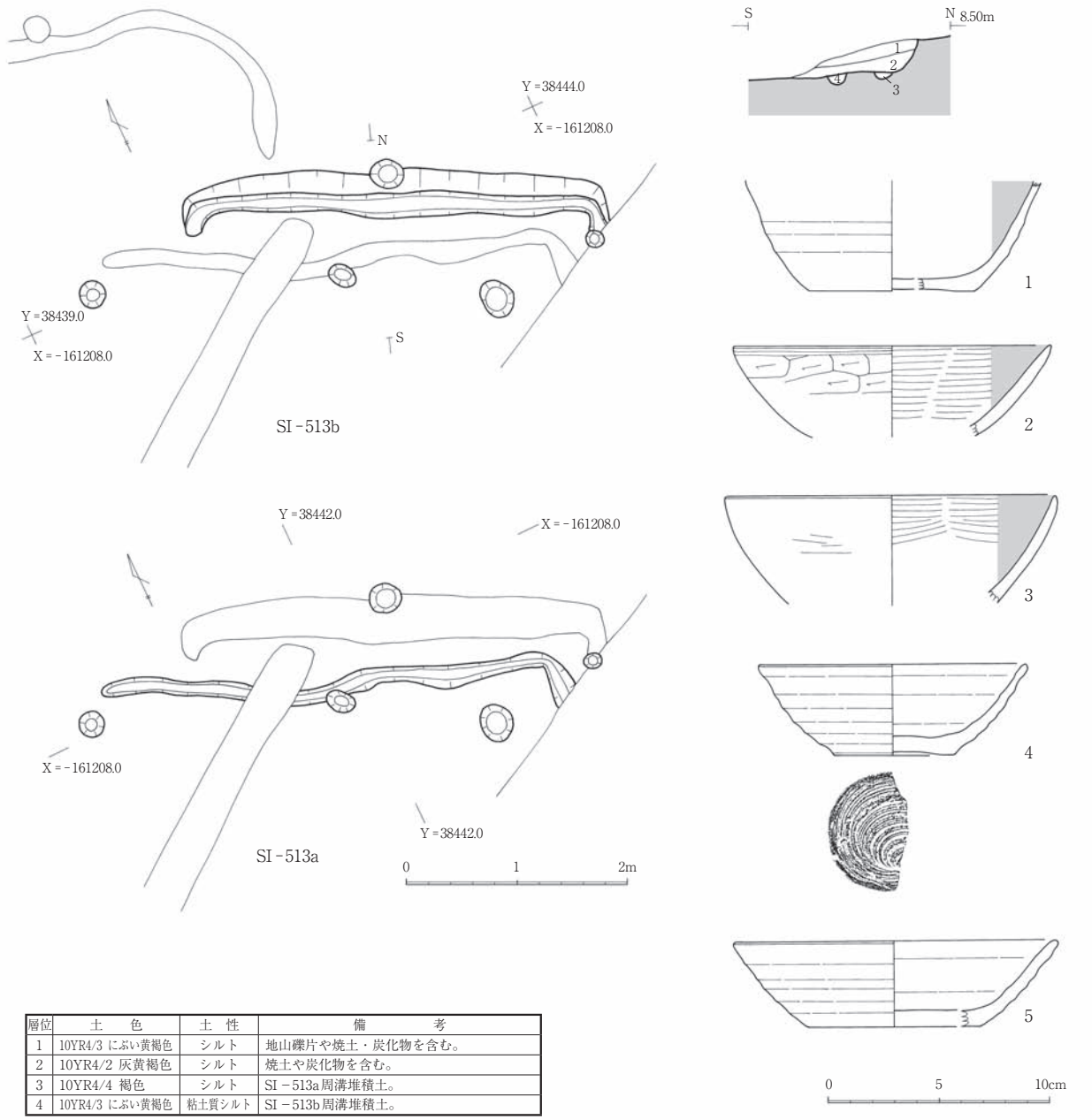
［その他の施設］住居の範囲内から東西に延びる溝が検出されている。検出されたのは削平によりすでに床面が失われている部分であり、この溝が住居に伴うものであるかどうかは不明である。規模は長さ約3.3m、幅30～60cm、深さ５cmあり、断面形は皿状を呈している。

［堆積土］残存状況は良くなく壁際から１層検出されたのみである。暗褐色のシルトで、地山の岩片や焼土、炭化物を多く含んでいる。自然流入土と考えられる。

［出土遺物］堆積土中から土師器坏・甕・鉢、須恵器坏が出土しているが、図示できるものは土師器鉢のみである。これ以外のものはいずれも小片で磨滅がいちじるしい。土師器の中でロクロを使用したものはない。

SI510a竪穴住居跡（第17・18図）

［平面形・規模］SI510bの床面で検出され、西側を除く三辺の周溝が検出された。住居の南半やコーナー部分は削平や重複により失われているが、残存部から平面形は方形を基調としたものと考えられる。規模は南北約2.4m、東西は残存する部分で2.2mである。



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	地山礫片や焼土・炭化物を含む。
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	焼土や炭化物を含む。
3	10YR4/4 褐色	シルト	SI－513a周溝堆積土。
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	SI－513b周溝堆積土。

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	土師器　坏		7.4		外：ロクロナデ　内：ミガキ＋黒色処理　513－3
2	1	土師器　坏	14.4			外：ヘラケズリ　内：ミガキ＋黒色処理　513－4
3	1	土師器　坏	15.1			外：ヘラミガキ　内：ミガキ＋黒色処理　513－5
4	1	須恵器　坏	12.2	5.4	4.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　513－1
5	1	須恵器　坏	14.8	7.8	4.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　513－2

第19図　SI513a･b住居跡と出土遺物

［カマド］北辺西よりで小ピットを取り囲むように焼面が検出されており、カマド燃焼部の底面と考えられる。焼面の範囲は40×50cmあり、小ピットは位置的に支脚を据えるための施設と考えられる。

［周溝］わずかに痕跡程度認められるにすぎない。幅20～25cm、深さは深い所でも数cmである。

SI513竪穴住居跡

［位置・重複］調査区南東部に位置する。同位置で２軒の住居（SI513a=旧、SI513b=新）が重複している。

SI513b竪穴住居跡（第19図）

［位置・重複］調査区南東部に位置する。SB536掘立柱建物跡と重複しこれよりも古い。

［平面形・規模］住居の南側の大部分は削平のため失われており、検出されたのは北壁と北東隅と北西隅の部分である。平面形は、残存する部分から方形を基調とするものと考えられ、規模は東西3.9m、南北は1.0mである。

［壁］地山をそのまま壁としており、周溝底面から緩やかに立ち上がる。壁高は残りの良い北壁の中央で床面から約30cmである。

［床面］地山面をそのまま床面としている。ほぼ平坦で南側に向かって緩やかに傾斜している。

［柱穴］北壁中央と東壁北東隅付近から円形のピットが検出されている。柱痕跡は認められていないが位置的に壁柱穴の可能性がある。

［カマド］残存部からは検出されなかった。

［周溝］幅15～25cm、深さ５～10cmで、断面形はＵ字形を呈する。堆積土は褐色のシルトで地山粒や焼土・炭化物を多く含んでいる。

［堆積土］２層に分けられ、いずれも自然流入土と考えられる。にぶい黄褐色もしくは灰黄褐色のシルトで地山粒や焼土・炭化物を多く含んでいる。

［出土遺物］堆積土中や床面から土師器坏・甕、須恵器坏が出土している。図示できたものは土師器坏（1）、須恵器坏（4.5）である。１はロクロを使用した土師器坏である。磨滅のため切り離し技法は不明である。

SI513a竪穴住居跡（第19図）

［位置・重複］SI513bとほぼ同位置にある。同住居の床面を掘り下げている段階で検出したもので、これよりも古い。

［平面形・規模］検出されたのは北東隅から北辺にかけての周溝のみであるが、残存部から平面形は方形を基調としたものと考えられる。規模は東西約4.3mである。

［床面］北東隅付近は掘り方を黄褐色の粘土質シルトで埋め戻して、それ以外では地山面をそのまま床面としている。ほぼ平坦で、南側に向かって緩やかに傾斜している。

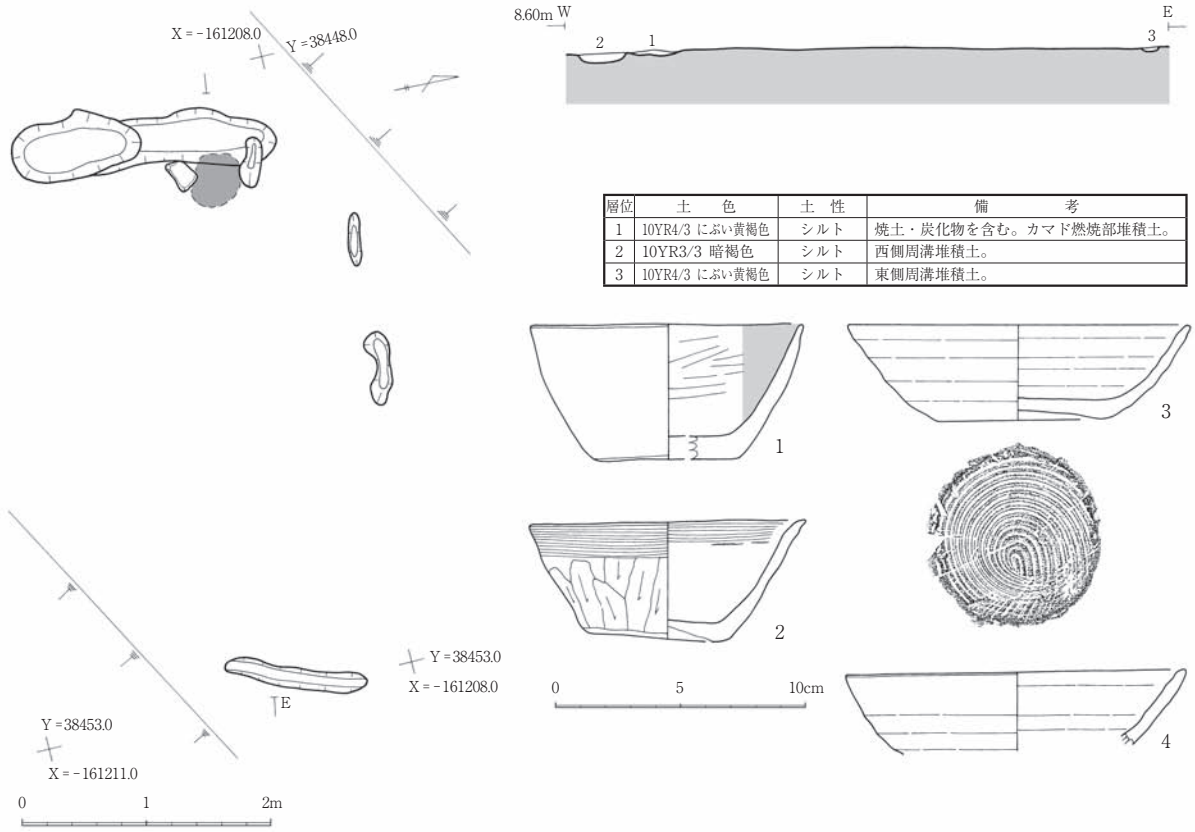
［柱穴］住居内から３個のピットが検出されているが。柱痕跡が認められないことや位置的に若干偏っていることから主柱穴や壁柱穴とは断定はできない。

［周溝］北東隅から北辺にかけて検出された。幅12～20cm、深さ約５cmで、断面形は皿状を呈している。

［出土遺物］床面から土師器坏・甕があり、図示できた物は土師器坏２点（2.3）である。２は体部外面にヘラケズリを、３はミガキを施したもので、内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されている。

SI525竪穴住居跡（第20図）

［位置・重複］調査区南東隅に位置する。旧道により削平を受けており、遺構の残存状況は悪い。位



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	焼土・炭化物を含む。カマド燃焼部堆積土。
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	西側周溝堆積土。
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	東側周溝堆積土。

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	土師器　坏	11.0	5.7	5.3	外：調整不明　内：ミガキ＋黒色処理　525－4
2	1	土師器　坏	11.0	5.5	4.8	外：ヘラケズリ　口：ヨコナデ　525－3
3	1	須恵器　坏	13.7	6.8	3.9	内外面：ロクロナデ　　底：回転糸切り　525－1
4	1	須恵器　坏	13.6			内外面：ロクロナデ　525－2

第20図　SI525住居跡と出土遺物

置的にSI530竪穴住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

［平面形・規模］北辺・東辺・南辺の周溝が断片的に検出されたのみであるが、残存部から方形を基調としていたと考えられる。規模は東西4.4m、南北が残存部で3.8mである。

［壁］周溝が検出されたのみで壁の立ち上がりは認められない。

［床面］北西隅付近は掘り方を黄橙色のシルトで埋め戻して、それ以外の部分は地山をそのまま床面としている。ほぼ平坦である。

［柱穴］住居内からピットは検出されておらず、柱穴については不明である。

［カマド］西辺北寄りに付設されていたと考えられる。この部分からは直径40cmの焼け面とそれに隣接した細長い落ち込みと焼けた角礫が検出されており、それぞれカマドの燃焼部底面と側壁の芯材を据えるための据え方と考えられる。その他の部分は検出されなかった。

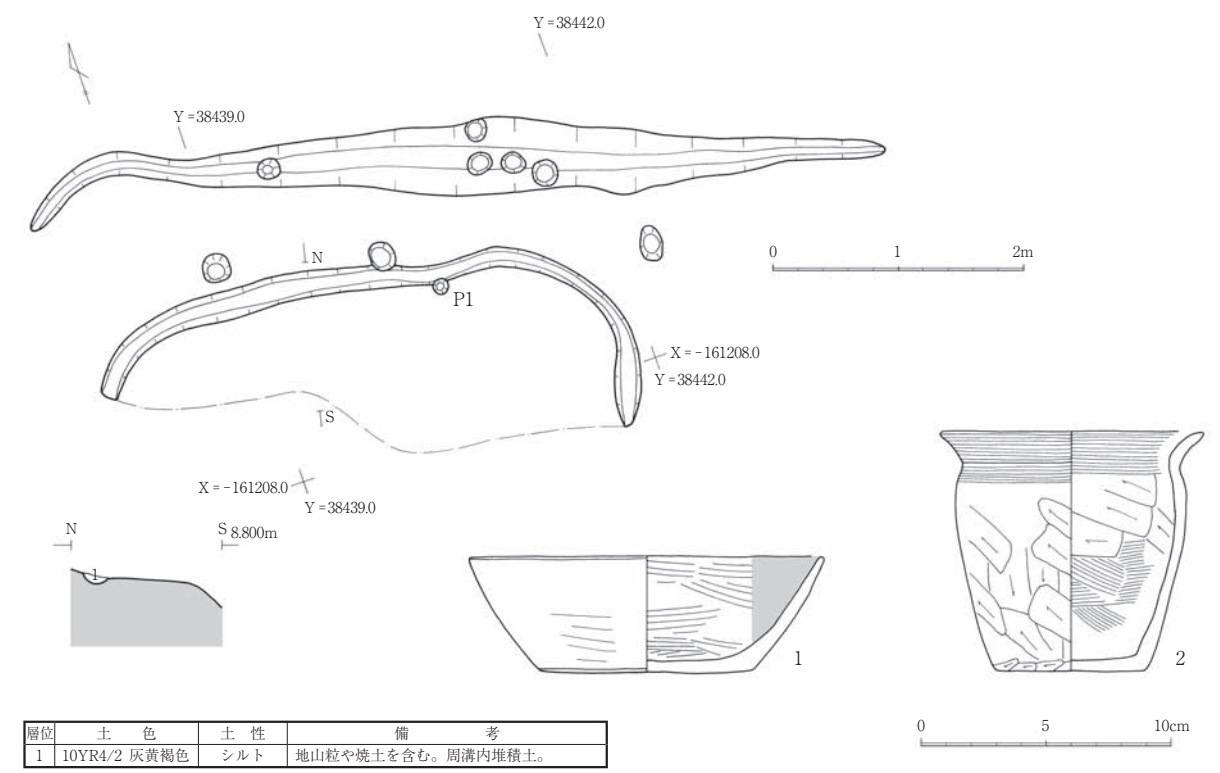
［周溝］断片的に検出されている。幅10～40cm、深さ５～15cmで、断面形はＵ字形を呈する。

［堆積土］カマド周辺に若干分布する。にぶい黄褐色のシルトで、焼土や炭化物を多く含む。

［出土遺物］カマド燃焼部や周溝底面から土師器坏・甕、須恵器坏が出土している。図示できたものは土師器坏（1.2）と須恵器坏（3.4）各２点である。

SI528竪穴住居跡（第21図）

［位置・重複］調査区南東に位置する。SB536掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	地山粒や焼土を含む。周溝内堆積土。

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	土師器　坏	14.1	8.5	4.6	外：ヘラミガキ　内：ミガキ＋黒色処理　513－2
2	1	土師器　甕	10.5	6.0	9.6	内：ヘラナデ　外：ヘラケズリ　口：ヨコナデロクロナデ　513－1

第21図　SI528住居跡と出土遺物

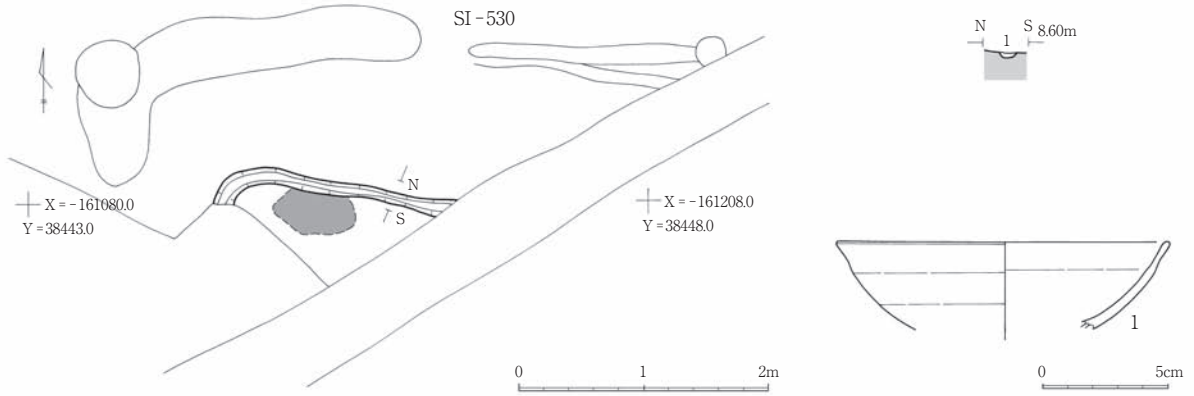
［平面形・規模］検出されたのは北側の部分で、南側の大部分は削平のため失われている。平面形は残存する部分から隅の丸い方形を基調とするものと考えられ、規模は東西約4.0m、南北が残存する部分で1.7mである。

［壁］周溝が検出されたのみで、壁の立ち上がりは認められなかった。

［床面］地山面をそのまま床面としている。ほぼ平坦で、南側に向かって緩やかに傾斜している。

［柱穴］北辺からピットが１個検出されている。柱痕跡が認められないことや位置的に東側に偏していることから壁柱穴とは確定できない。

［周溝］北辺から東辺の一部を検出した。幅12～25cm、深さは深い所で約10cmである。断面形は皿状を呈している。



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	小礫を含む。周溝内堆積土。

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	赤焼土器　坏	13.4			内外面：ロクロナデ　529－1

第22図　SI529住居跡と出土遺物

［出土遺物］周溝埋土などから土師器・須恵器の小片が出土している。図示できるものとしては住居付近から土師器坏（1）・甕（2）が出土している。

SI529竪穴住居跡（第22図）

［位置・重複］調査区南東隅付近に位置する。SI530･SI535竪穴住居跡、SB536掘立柱建物跡と重複し、SB536より古く、SI535よりも新しい。また、SI530との新旧関係は不明である。

［平面形・規模］北西隅付近の周溝が検出されたのみで、住居の大部分は撹乱や削平のため失われている。平面形は残存部から方形を基調としていると考えられる。規模は検出された部分で東西約1.8mである。

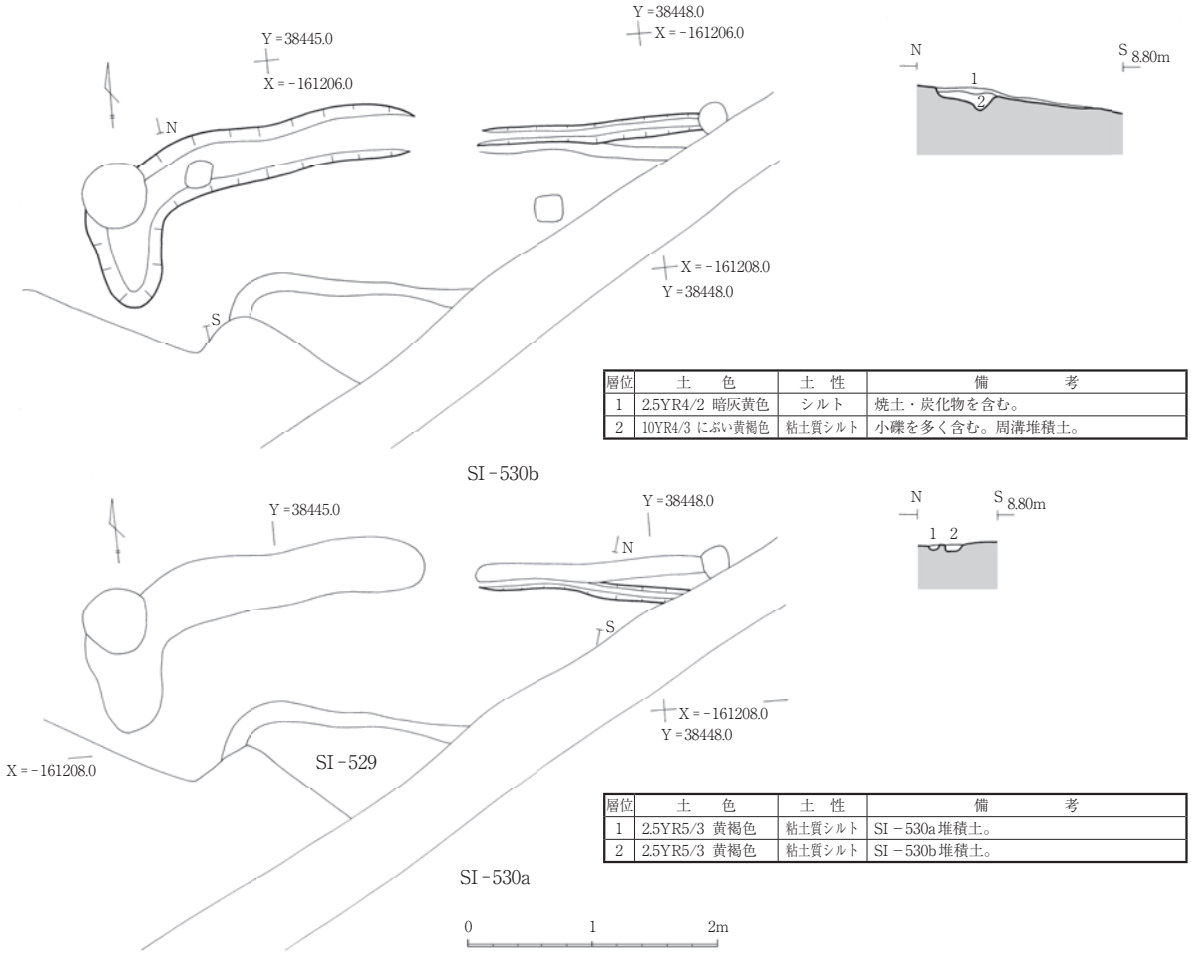
［床面］地山をそのまま床面としており、ほぼ平坦である。

［柱穴］床面からピットなどは検出されておらず、柱穴については不明である。

［カマド］北辺の壁際で70×40cmの楕円形の焼け面が検出されており、位置的にカマド燃焼部底面の痕跡と考えられる。側壁や煙道部は検出されなかった。

［周溝］残存状況は悪い。幅10～15cm、深さは２～４cmで、断面形は皿状を呈している。

［出土遺物］周溝内堆積土などから土師器坏、赤焼土器坏が出土している。図示できたものは赤焼土器坏１点である。



層位	土　色	土　性	備　考
1	2.5YR4/2 暗灰黄色	シルト	焼土・炭化物を含む。
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	小礫を多く含む。周溝堆積土。

層位	土　色	土　性	備　考
1	2.5YR5/3 黄褐色	粘土質シルト	SI－530a堆積土。
2	2.5YR5/3 黄褐色	粘土質シルト	SI－530b堆積土。

第23図　SI530a･b住居跡と出土遺物

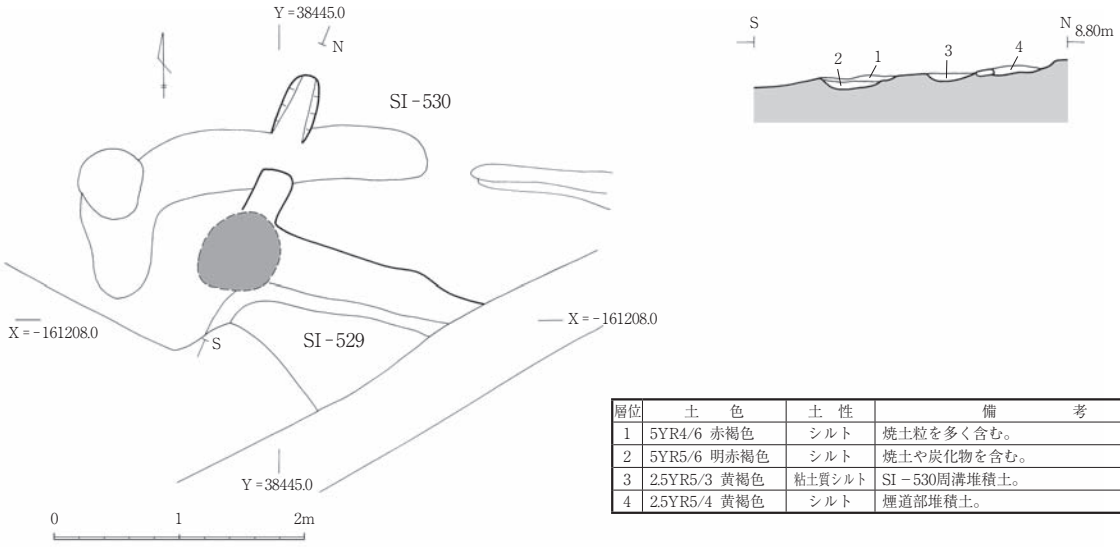
SI530竪穴住居跡（第23図）

［位置・重複］調査区の南東部に位置する。SI525・SI529・SI535竪穴住居跡、SB536掘立柱建物跡と重複し、SB536より古く SI535より新しい。SI529・SI529との新旧関係は不明である。

［平面形・規模］住居の北西隅から北辺にかけて検出されたのみで、南側の大部分は削平のため失われている。平面形は残存部から方形を基調としていると考えられる。残存する部分の規模は東西4.7m、南北1.4mである。

［周溝］北西隅から北辺にかけて残存する。周溝の東側は幅が15～20cm、深さ数cmであるのに対して、西側は幅40～60cm、深さ20cm程度と様相が異なる。これは周溝と住居掘方部分を完全に分離せずに掘りあげたことによると考えられ、本来の規模は幅が15～20cm、深さ数cmと推定される。また、東側部分では新旧２時期の溝が検出されており、新しいものは若干外側に拡張して掘られている。

［出土遺物］図示できるものはないが、周溝堆積土からロクロを使用した土師器甕が出土している。



層位	土　色	土　性	備　考
1	5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土粒を多く含む。
2	5YR5/6 明赤褐色	シルト	焼土や炭化物を含む。
3	2.5YR5/3 黄褐色	粘土質シルト	SI－530周溝堆積土。
4	2.5YR5/4 黄褐色	シルト	煙道部堆積土。

第24図　SI535住居跡

SI535竪穴住居跡（第24図）

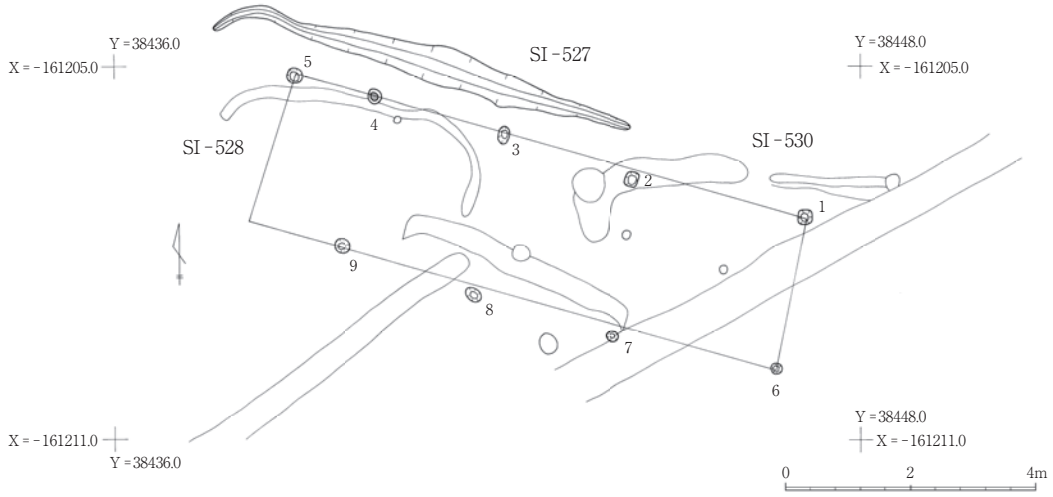
［位置・重複］調査区の南東隅に位置する。遺構の大半が削平され、カマドの一部が検出されたのみであり、全体形状や規模については不明である。SI529・SI530竪穴住居跡、SB536掘立柱建物跡と重複し、これらよりも古い。

［カマド］燃焼部の底面（焼面）と煙道部が検出された。燃焼部の側壁部分は削平により失われている。焼面の範囲は55×70cmで楕円形を呈する。この焼け面の奥壁に近い所からは角礫が据えられた状態で検出されており支脚であったと考えられる。煙道は長さ1.2mあり、底面は先端に向かって緩やかに上がる。

②掘立柱建物跡

SB536掘立柱建物跡（第25図）

調査区南東隅で検出された。SI513ab・SI525・SI528・SI529・SI530・SI535竪穴住居跡と重複し、



第25図　SB536掘立柱建物跡

これらよりも新しい。１間×４間の東西棟である。桁行は北側柱列が総長8.5mで、柱間寸法は東から2.8m、2.2m、2.15m、1.35mである。梁行は東側柱列で2.55mである。建物の方向は北側柱列でＮ－73°－Ｗである。柱穴は隅丸の方形もしくは楕円形を呈し一辺20～30cm、深さは深いもので約45cmである。P4からは柱痕跡が検出されており、それによれば柱は円形で直径は20cmある。

また、北側柱列から80cmほど北側からは柱列を取り囲むようにＬ字形に巡るSD527が検出されており、SB536の雨落ち溝として機能したと考えられる。

③調査区南西隅検出遺構（第26図）

［近世以降の遺構］

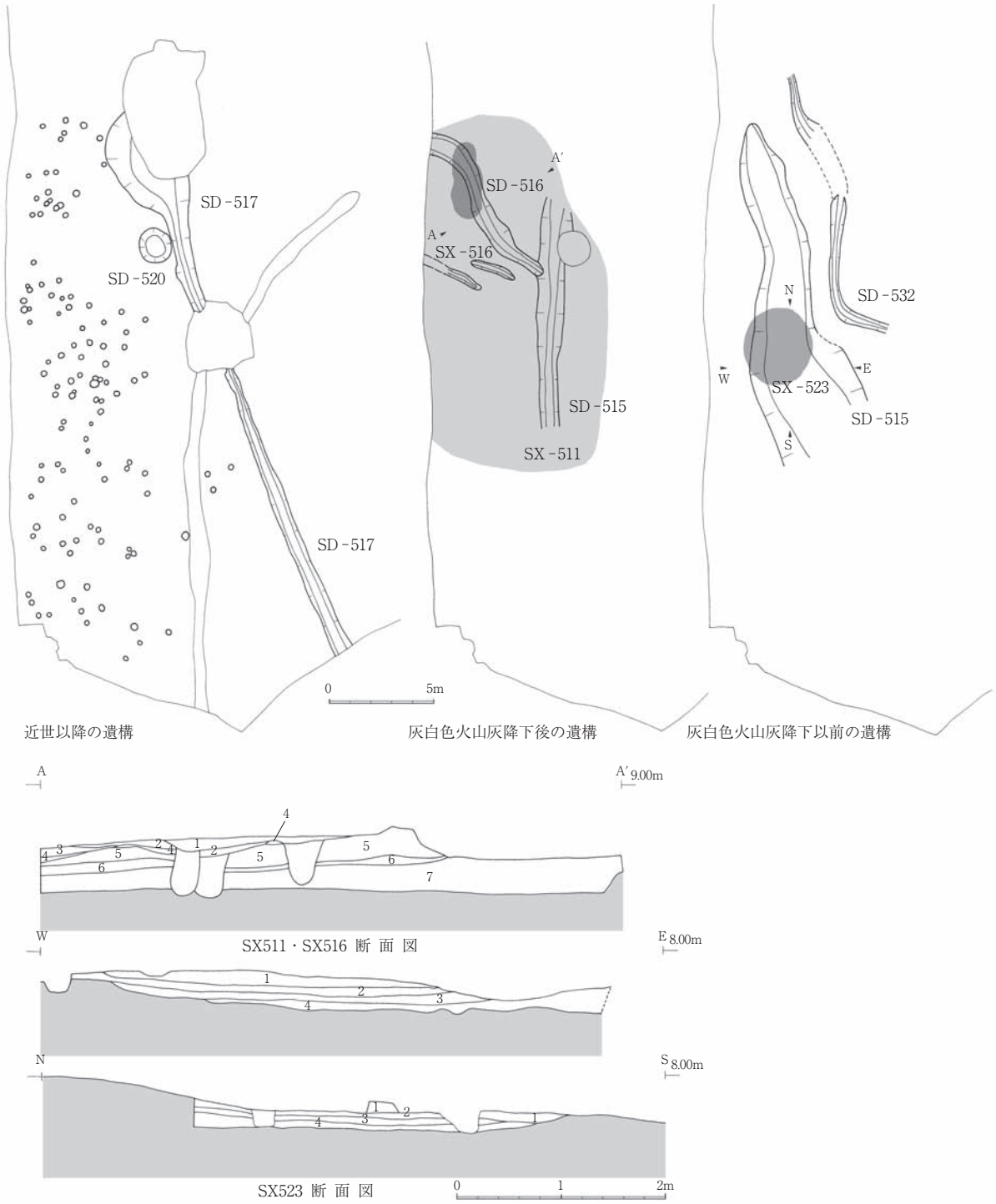
耕作土直下の暗褐色土（Ⅰ層）で確認されたもので、重複関係からも最も新しい遺構群である。SD517溝跡・ピット群・SE520があり、ピット群は建物跡、SE520は井戸跡と考えられる。ピット群は西側に集中しSD517を越えて東側には分布しないことから、この溝はこれらの区画と考えられる。遺物などは出土していないが、伝承によれば近世以降の屋敷跡と考えられる。

［灰白色火山灰降下後の遺構］（第26図）

灰白色火山灰降下後に堆積した暗褐色土層（Ⅰ層）上面から検出された遺構群で、灰白色火山灰層を切り、堆積土中にこの火山灰を二次堆積物として含んでいる。SD516溝跡・SX516遺物集中地点・SD515溝跡などがある。また、この暗褐色土層中からは東西10m×南北22mの範囲で土器類が集中して出土しており、これについてはSX511（１層）として扱った。（第27～30図）

［SD516溝跡・SX516遺物集中地点］（第31・32図）

北西方向から延びる谷地形と同一方向に延びる溝で、北から延びるSD515溝跡と合流する。幅は約１mを計るが輪郭は明確ではない。検出された部分の長さは８mである。深さは10cm程度で断面形は浅い皿状を呈している。堆積土中に砂をラミナ状に含んでおり、流路の跡であったと考えられる。この溝跡の西端Ｂ－4.5区付近で東西約２m、南北約４mの範囲に土器が著しく集中している部分があり、SX516遺物集中地点とした。これらの土器は、溝の窪地の部分の一定の範囲の中に集中すること、



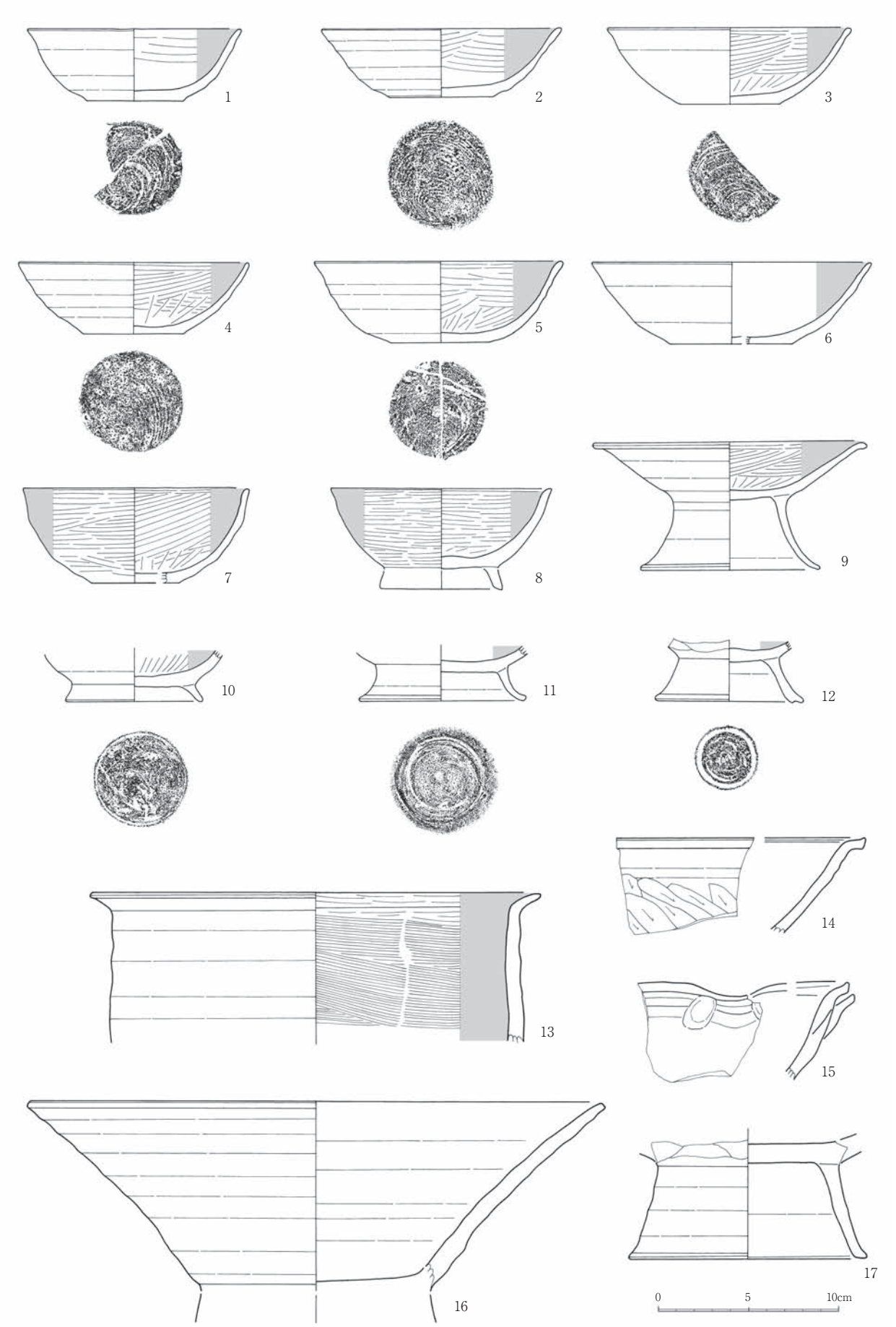
層位	土　色	土　性	備　考
1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	灰白色火山灰の２次堆積含む。SX516の1a層
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	SX516の1b層。遺物を多量に含む。
3	7.5Y4/3 オリーブ褐色	シルト	灰白色火山灰の２次堆積含む。SX516の2層。
4	7.5Y5/2 暗灰黄色	シルト	灰白色火山灰（１次堆積）SX516の2層。
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	遺物や焼土を含む。SX516の3層。
6	10YR2/2 黒褐色	シルト	遺物や焼土を多く含む。SX516の3層。
7	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山粒や焼土、遺物を少量含む。SX516の3層。

SX511・SX516 堆 積 土

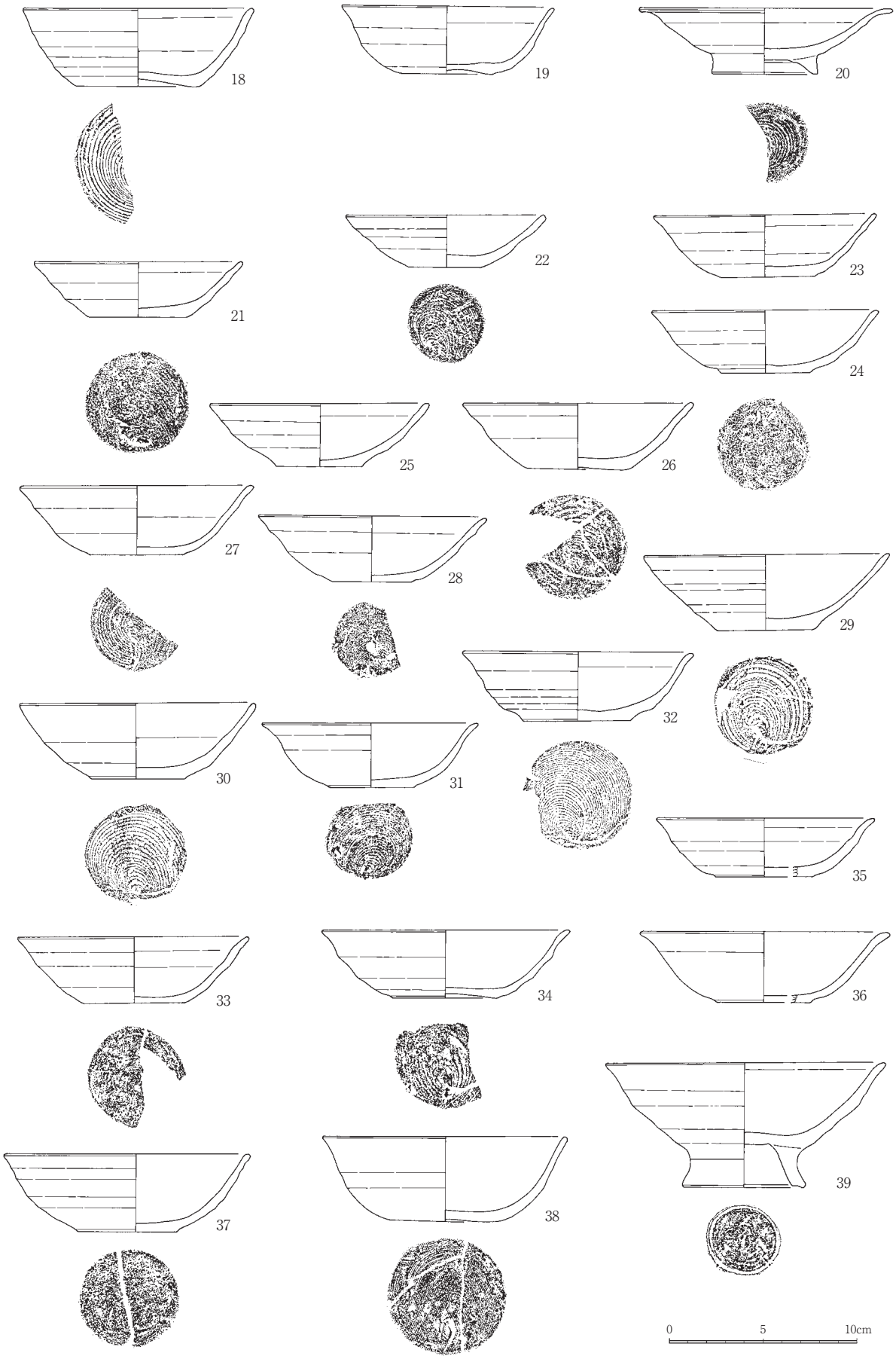
層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR8/1 灰白色		灰白色火山灰（１次堆積）。
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山や砂粒を多く含む。
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	遺物や炭化物を非常に多く含む。
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	部分的に酸化鉄の集積。遺物は含まない。

SX523 堆 積 土

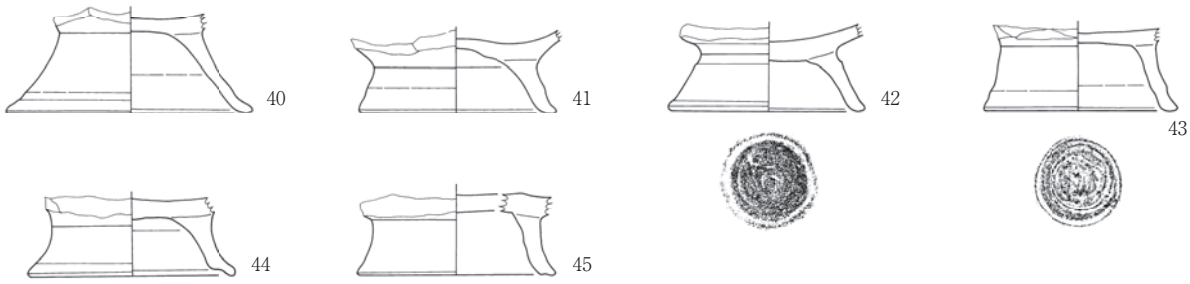
第26図　調査区南西隅検出遺構



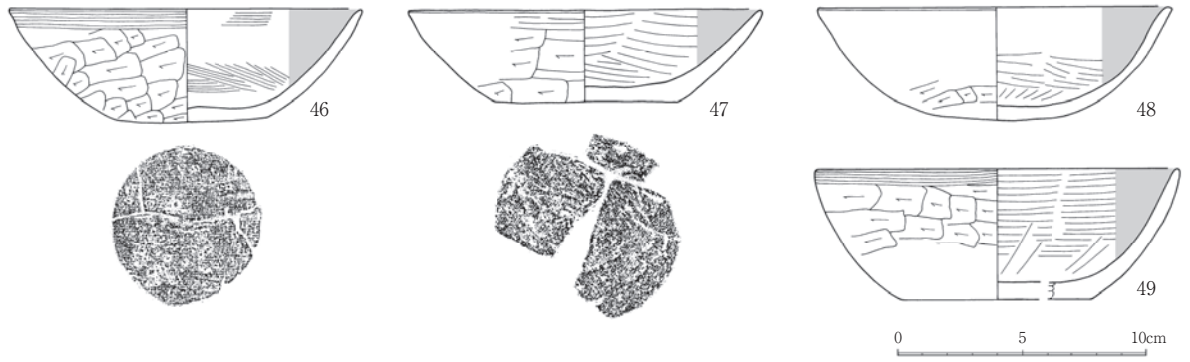
第27図　SX511　1層出土遺物（1）



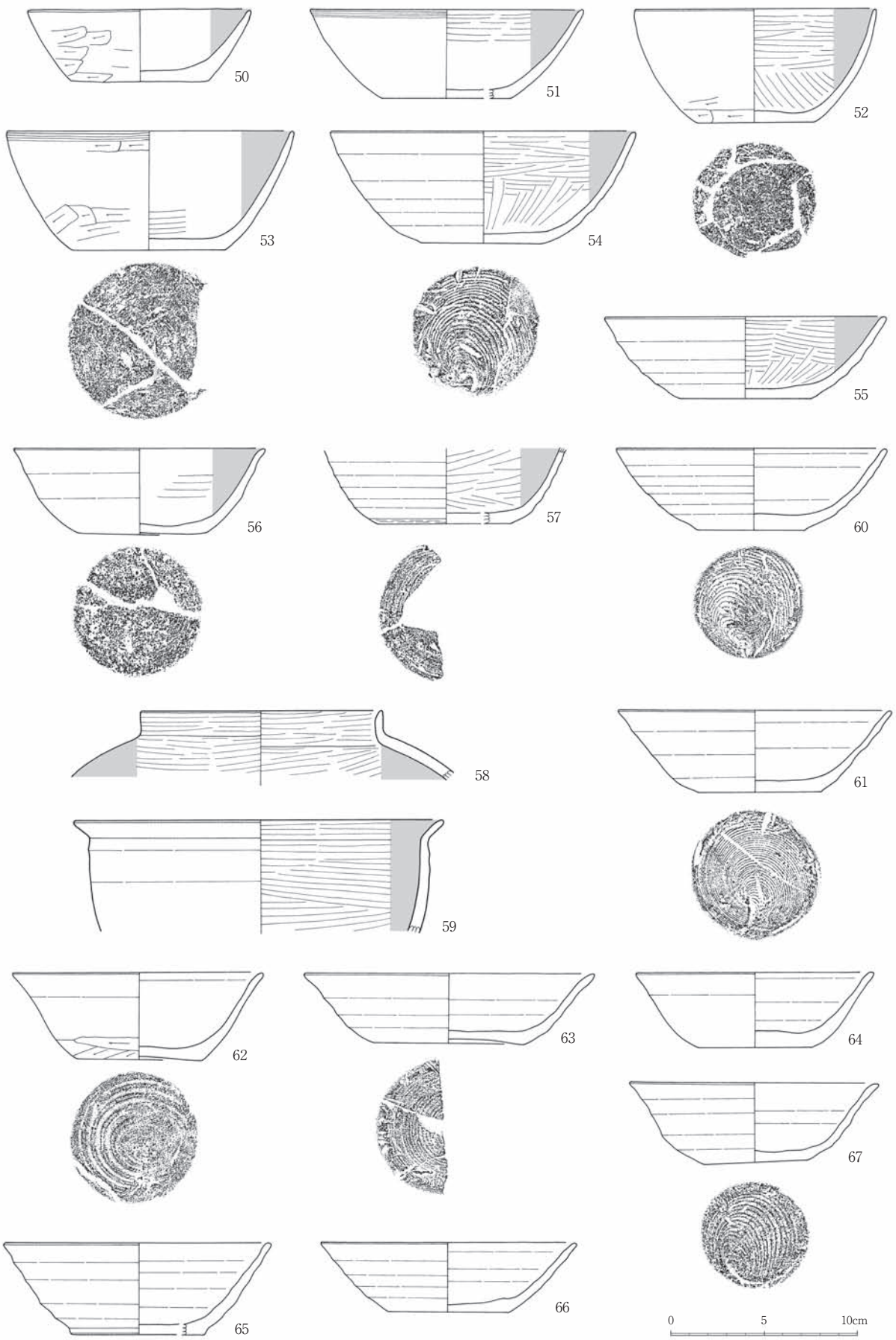
第28図　SX511　1層出土遺物（2）



番	区	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	C8	1	土師器　坏	11.8	5.4	4.0	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－2
2	B9	1	土師器　坏	13.0	5.8	3.8	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－3
3	D8	1	土師器　坏	13.6	5.5	4.1	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－13
4	C10	1	土師器　坏	12.8	5.7	4.0	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－14
5	C8	1	土師器　坏	13.6	6.0	3.6	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　511－56
6	C5	1	土師器　坏	15.4	6.9	4.5	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－20
7	B9	1	土師器　坏	12.5	5.0	5.2	内外面：ヘラミガキ＋黒色処理　511－28
8	C8	1	土師器　高台坏	12.2			内外面：ミガキ＋黒色処理　511－22
9	C7	1	土師器　高坏	15.2	10.0	7.1	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－15
10	B10	1	土師器　高台坏		7.6		坏部内面：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　511－63
11	C6	1	土師器　高台坏		9.3		坏部内面：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　511－64
12	B8	1	土師器　高台坏		8.3		坏部内面：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　511－62
13	C3	3	土師器　甕	25.0			内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　511－44
14	C9	1	土師器　鉢	(35.0)			外面：ロクロナデ+ヘラケズリ　内面：ロクロナデ　511－66
15	C6	1	土師器　鉢				内外面：ロクロナデ　片口部　511－68
16	C8	1	土師器　台付鉢	32.0			内外面：ロクロナデ　511－65
17	C6	1	土師器　台付鉢		13.3		内外面：ロクロナデ　511－67
18		1	須恵器　坏	13.4	6.8	4.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－53
19	C8	1	須恵器　坏	11.2	5.0	3.5	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－18
20	D5	1	須恵器　高台坏	13.6	5.7	3.5	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－21
21	A10		赤焼土器　坏	11.1	5.3	2.9	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－1
22	C7	1	赤焼土器　坏	10.7	3.8	2.8	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－10
23	C5	1	赤焼土器　坏	12.0	5.0	3.3	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－23
24	C7	1	赤焼土器　坏	12.1	4.8	3.3	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－5
25	B10	1	赤焼土器　坏	11.7	4.7	3.4	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－25
26	C7	1	赤焼土器　坏	11.9	5.5	3.5	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－6
27	C6	1	赤焼土器　坏	12.5	5.0	3.7	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－11
28		1	赤焼土器　坏	12.2	4.2	3.5	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－54
29	C10	1	赤焼土器　坏	13.1	5.3	4.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－27
30	C10	1	赤焼土器　坏	12.6	5.0	4.0	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－26
31	C7	1	赤焼土器　坏	11.7	4.5	3.3	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－9
32	C9	1	赤焼土器　坏	12.3	5.8	3.7	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－24
33	C5	1	赤焼土器　坏	12.4	5.2	3.5	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－12
34	C9	1	赤焼土器　坏	13.2	5.6	3.6	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－4
35		1	赤焼土器　坏	12.6	5.0	3.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－52
36	C5	1	赤焼土器　坏	13.3	5.0	3.7	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－19
37	C5	1	赤焼土器　坏	13.2	5.3	4.2	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－16
38	C7	1	赤焼土器　坏	13.0	6.0	4.5	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－8
39	C8	1	赤焼土器高台坏	15.0	6.6	6.6	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－7
40	C7	1	赤焼土器高台坏		10.0		内外面：ロクロナデ　511－59
41	C8	1	赤焼土器高台坏		7.9		内外面：ロクロナデ　511－57
42	B10	1	赤焼土器高台坏		7.9		内外面：ロクロナデ　511－58
43	C8	1	赤焼土器高台坏		7.8		内外面：ロクロナデ　511－60
44	C8	1	赤焼土器高台坏		8.1		内外面：ロクロナデ　511－61
45	B10	1	赤焼土器高台坏		7.8		内外面：ロクロナデ　511－55



第29図　SX511　1・3層出土遺物



第30図　SX511　３層出土遺物（2）

番	区	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
46	B4	3	土師器　坏	14.1	6.0	4.6	内：ヘラナデ+黒色処理　外面：ヘラケズリ+ナデ　511－36
47	C5	3	土師器　坏	14.2	7.3	3.7	内：ミガキ+黒色処理　外面：ヘラケズリ　511－48
48	B4	3	土師器　坏	14.2	丸底	4.6	内：ミガキ+黒色処理　外面：ヘラケズリ511－35
49	D6	3	土師器　坏	14.7	7.7	5.2	内：ミガキ+黒色処理　外：ヘラケズリ　底：調整不明　511－40
50	B3	3	土師器　坏	12.0	7.4	3.9	内：調整不明+黒色処理　外面：ヘラケズリ　511－43
51		3	土師器　坏	14.6	7.0	4.7	内：ミガキ+黒色処理　外面：ヘラケズリ　底部：ヘラケズリ　511－51
52	B4	3	土師器　坏	13.0	6.2	6.0	内：ミガキ+黒色処理　外面：ヘラケズリ　511－50
53	C4	3	土師器　坏	15.4	8.4	6.3	内：ミガキ+黒色処理　外面：ヘラケズリ　511－47
54	B4	3	土師器　坏	16.4	6.5	6.0	内：ミガキ+黒色処理　外：ロクロナデ　511－49
55	B2	3	土師器　坏	15.1	7.0	4.4	内：ミガキ+黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－37
56	C4	3	土師器　坏	13.5	6.8	4.7	内：ミガキ+黒色処理　外：ロクロナデ　底：調整不明　511－41
57	B4	3	土師器　坏		7.2		内：ミガキ+黒色処理　外面：ロクロナデ　底：回転ヘラケズリ　511－45
58	B4	3	土師器　壺	13.0			内外面：ミガキ+黒色処理　511－46
59	C3	3	土師器　甕	19.8			内：ミガキ+黒色処理　外：ロクロナデ　511－42
60	C5	3	須恵器　坏	14.6	6.0	4.4	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－31
61	D6	3	須恵器　坏	14.6	6.6	4.4	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－32
62	B4	3	須恵器　坏	13.6	7.0	4.6	内外面：ロクロナデ　体部下端：ヘラケズリ　底：回転糸切り　511－30
63	B3	3	須恵器　坏	15.5	8.0	3.7	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－38
64	C5	3	須恵器　坏	12.8	6.0	4.0	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－39
65	B2	3	須恵器　坏	14.5	7.3	4.9	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－34
66	B4	3	須恵器　坏	13.7	6.5	3.7	内外面：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り　511－33
67	B4	3	赤焼土器　坏	13.5	4.8	4.5	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　511－29

折り重なるような状態で密集していること、多量の焼土や炭化物とともに出土していることなどから、短期間での一括廃棄によるものと考えられる。

［SD515溝跡］（第26図）

南北方向の溝で、北西方向から流れるSD516溝跡と合流し、さらに南側に延びる。灰白色火山灰層を切り、この火山灰を二次堆積物として含んでいる。幅は１～1.5mを計るが輪郭は明確ではない。検出された部分の長さは約11mである。深さは10cm程度で断面形は浅い皿状を呈している。堆積土中に砂をラミナ状に含んでおり、流路の跡であったと考えられる。

［灰白色火山灰降下以前の遺構］（第26図）

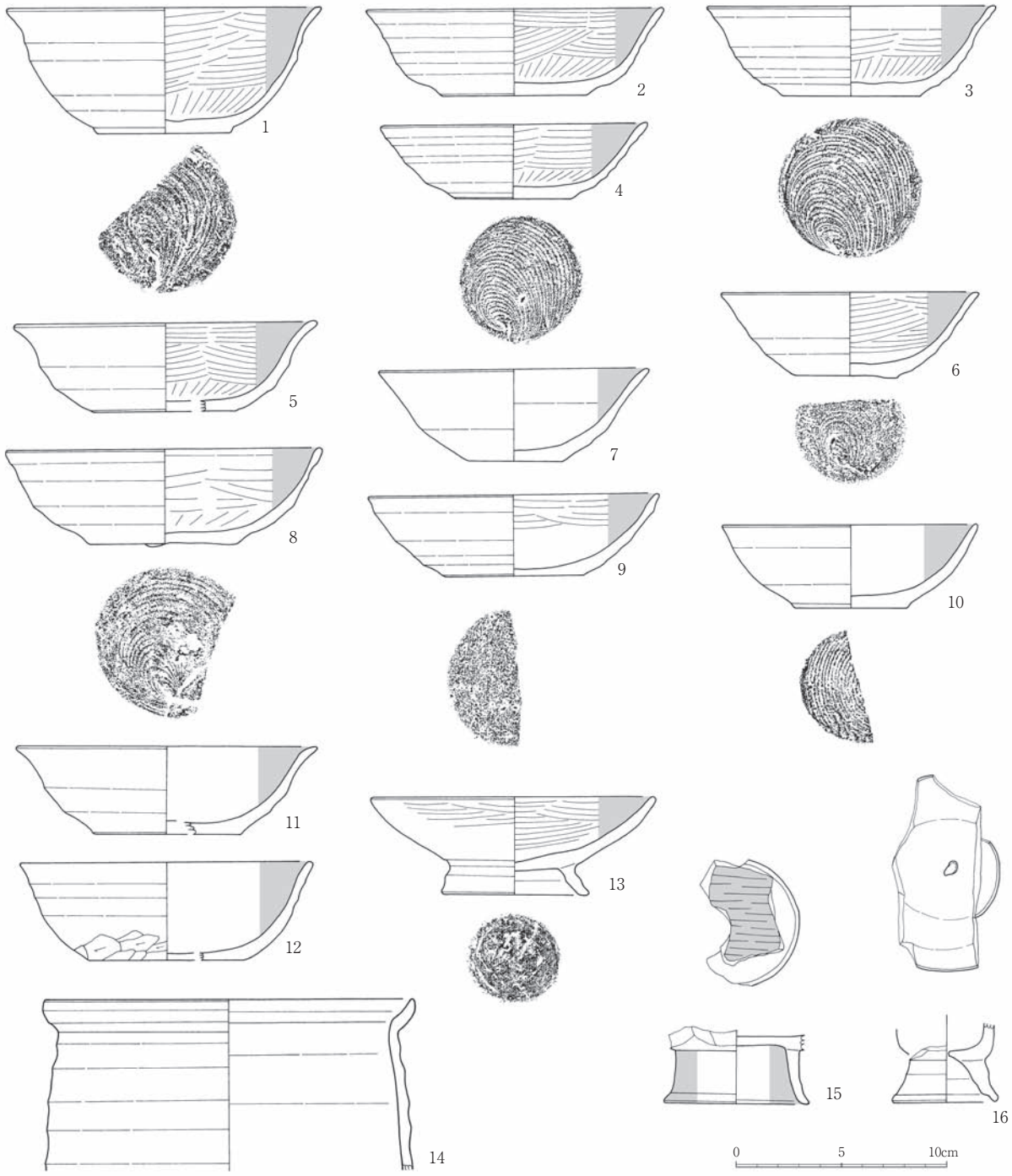
灰白色火山灰を除去後にⅢ層から検出された遺構群で、SD532、SD537がある。また、灰白色火山灰下の黒暗褐色土層中のB.C－４区を中心とした東西８m×南北15mの範囲からは土器類が集中して出土しており、SX511（３層）とした。（第32・33図）

［SD532溝跡］

南北方向の溝で、一部SD515と重複する部分がある。撹乱により失われている部分もあるが、検出された部分の長さは約14m、幅は約１mである。深さは10～20cmで、断面形は開いたU字形を呈している。

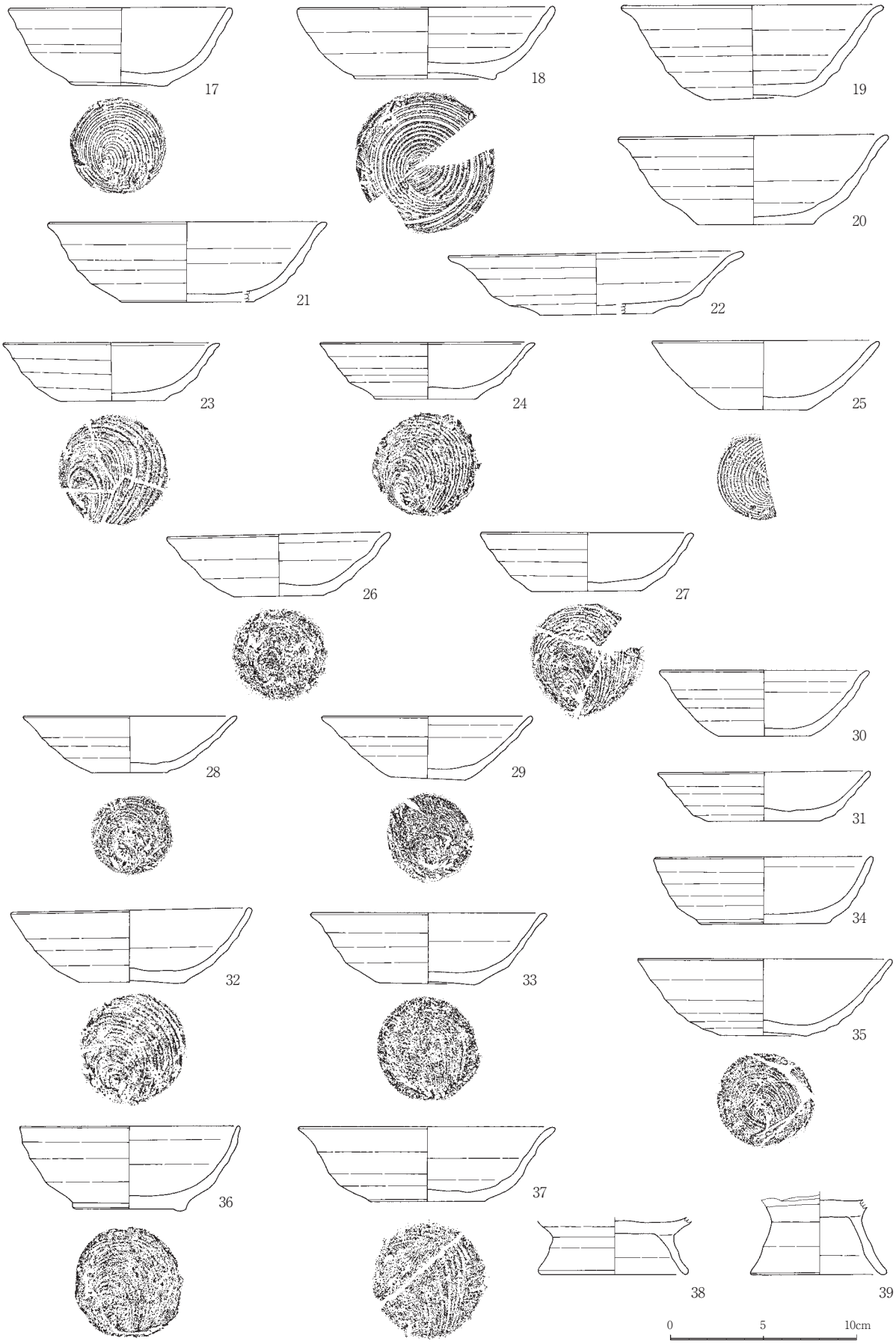
［SD537溝跡・SX523遺物集中地点］（第33図）

北西方向から延びる谷地形と同一方向に延びる溝で、旧地形の落ち込みと考えられる。
約16mにわたって確認された。幅は1.5m～5.0mで、下方に向かって広がる。深さは５～30cmで、断面形は浅い皿状を呈している。この溝跡の南端B.C－８区付近で直径約３mの範囲に土器が比較的まとまって集中している部分があり、SX523遺物集中地点として扱った。



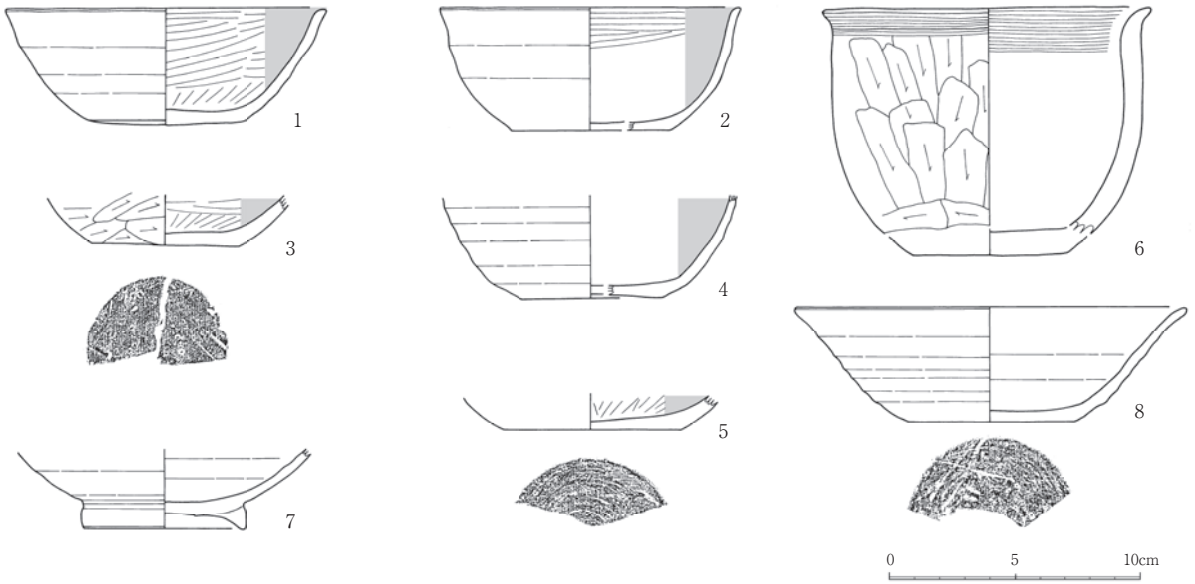
番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	土師器　坏	14.9	6.4	6.0	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－10
2	1	土師器　坏	14.2	6.8	4.1	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－28
3	1	土師器　坏	13.7	6.5	4.3	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－11
4	1	土師器　坏	12.7	5.6	3.7	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－20
5	1	土師器　坏	14.4	6.9	4.2	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－30
6	1	土師器　坏	12.3	4.8	3.9	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－23
7	1	土師器　坏	12.9	4.6	4.3	内：黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－25
8	1	土師器　坏	15.0	4.5	7.0	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－21
9	1	土師器　坏	13.8	6.7	3.8	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－29
10	1	土師器　坏	12.2	5.3	3.9	内：調整不明＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－26
11	1	土師器　坏	14.3	7.0	4.2	内：調整不明＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－27
12	1	土師器　坏	14.0	7.4	4.7	内：調整不明＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－31
13	1	土師器　高台坏	13.5	7.0	4.7	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－22
14	1	土師器　甕	17.5			内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－35
15	1	土師器　耳皿		6.8		内外面：ヘラミガキ＋黒色処理　516－36
16	1	赤焼土器　耳皿		5.0		内外面：ロクロナデ　516－38

第31図　SX516出土遺物（1）



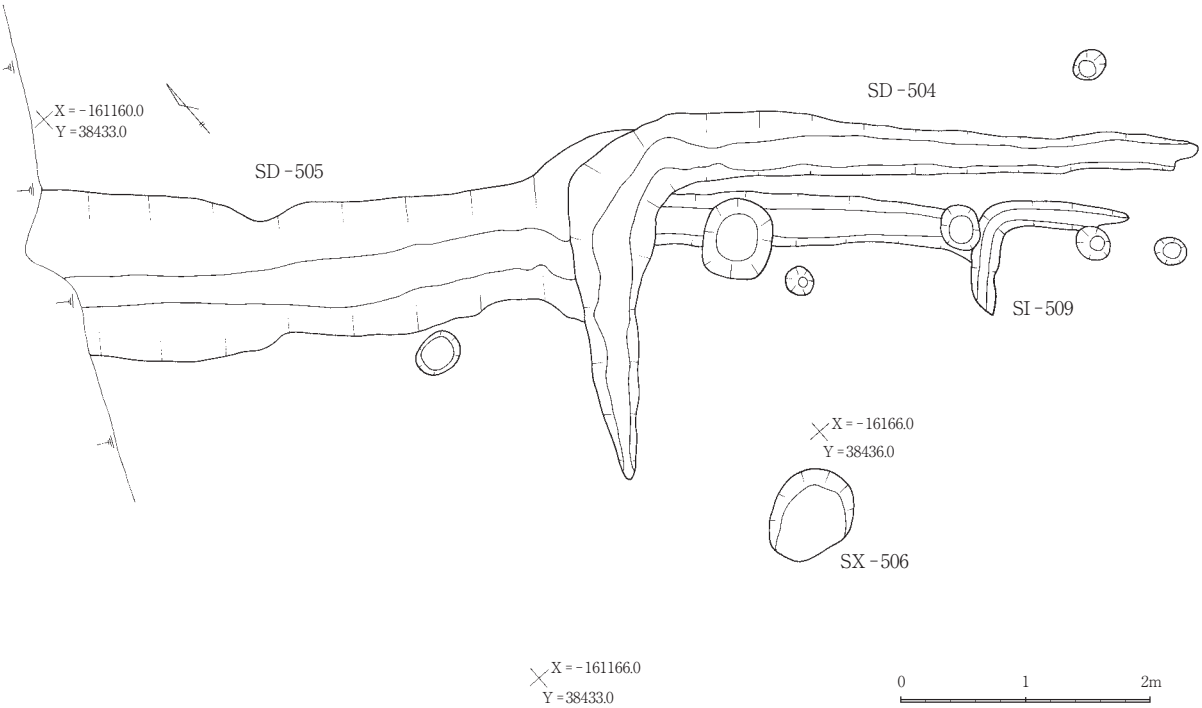
第32図　SX516出土遺物（2）

番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
17	1	須恵器　坏	12.0	5.0	4.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－12
18	1	須恵器　坏	13.9	7.6	3.8	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－15
19	1	須恵器　坏	14.1	4.7	5.0	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－16
20	1	須恵器　坏	14.5	6.2	4.7	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－14
21	1	須恵器　坏	15.0	7.2	4.3	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－34
22	1	須恵器　坏	16.0	6.0	3.3	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－33
23	1	赤焼土器　坏	11.7	5.6	3.2	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－1
24	1	赤焼土器　坏	11.6	5.3	3.0	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－4
25	1	赤焼土器　坏	12.2	4.5	3.7	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－2
26	1	赤焼土器　坏	12.0	4.8	3.3	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－8
27	1	赤焼土器　坏	11.4	6.0	3.1	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－19
28	1	赤焼土器　坏	11.6	4.2	3.0	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－6
29	1	赤焼土器　坏	11.4	4.2	3.4	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－7
30	1	赤焼土器　坏	11.3	4.9	3.5	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－32
31	1	赤焼土器　坏	11.4	6.0	2.8	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－3
32	1	赤焼土器　坏	13.0	5.7	3.9	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－24
33	1	赤焼土器　坏	12.2	5.0	3.8	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－13
34	1	赤焼土器　坏	11.8	7.0	3.6	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－18
35	1	赤焼土器　坏	13.9	4.8	4.2	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－5
36	1	赤焼土器　坏	11.8	6.1	4.4	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－17
37	1	赤焼土器　坏	13.8	6.0	4.0	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－9
38	1	赤焼土器高台坏		8.1		内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　516－37
39	1	赤焼土器高台坏		7.4		内外面：ロクロナデ　516－39



番	区	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	C8	3	土師器　坏	12.8	6.2	4.6	外：ロクロナデ　内：ミガキ＋黒色処理　底：ヘラケズリ　523－6
2	B8	3	土師器　坏	12.0	6.4	4.9	内：ミガキ＋黒色処理　外：ロクロナデ 底：回転糸切り　523－3
3	C8	3	土師器　坏		5.8		外：ヘラケズリ　内：ミガキ＋黒色処理　底：ヘラケズリ　523－7
4	C8	3	土師器　坏		5.6		外：ロクロナデ　内：調整不明＋黒色処理　底：回転糸切り　523－4
5	C8	3	土師器　坏		7.0		外：ロクロナデ　内：ミガキ＋黒色処理　底：糸切り＋回転ケズリ　523－5
6	C8	3	土師器　甕	13.0			内：不明　外：ヘラケズリ　口：ヨコナデ　523－8
7	B7	3	須恵器　高台坏		6.4		内外面：ロクロナデ　523－2
8	B8	3	須恵器　坏	14.7	6.6	4.6	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　523－1

第33図　SX523出土遺物



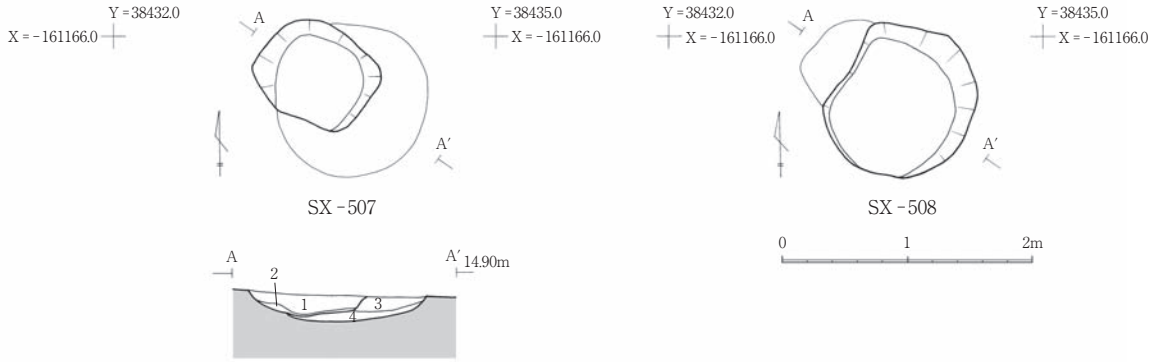
第34図　調査区北東隅検出遺構

④調査区北東隅検出遺構

調査区の北東隅からはSI509竪穴住居跡（前述）、SD504.505の２条の溝跡、SX506～508の３基の焼土遺構が検出されている。

［SD504溝跡］（第34図）

SD505溝跡と重複し、これよりも新しい。南西方向からＬ字形に曲がり、南東方向に延びる溝であるが、両端は削平のため失われており、全体形は不明である。検出された部分の長さは7.6mで、幅は最も広い屈曲部で70cmある。深さは10～35cmで、断面形はコ字形を呈している。溝がSI509竪穴住居跡の周溝と並行して掘られていること、住居の外側の標高の高い部分に巡ることなどから、この住居を取りまく雨避け溝の可能性がある。



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	SX －507堆積土。
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物や焼土を多量に含む。SX －507堆積土。
3	10YR4/4 褐色	シルト	SX －508堆積土
4	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物や焼土を多量に含む。SX －508堆積土。

第35図　SX507･508焼土遺構

［SD505溝跡］（第34図）

SD504溝跡SI509竪穴住居跡と重複し、これらよりも古い。北西から南東に延びる溝で、両端は重複や撹乱により失われている。検出された部分の長さは7.４ｍで、幅は最も広い北西側で1.4mある。深さは８～30cmで、断面形はコ字形を呈している。

［SX506焼土遺構］（第34図）

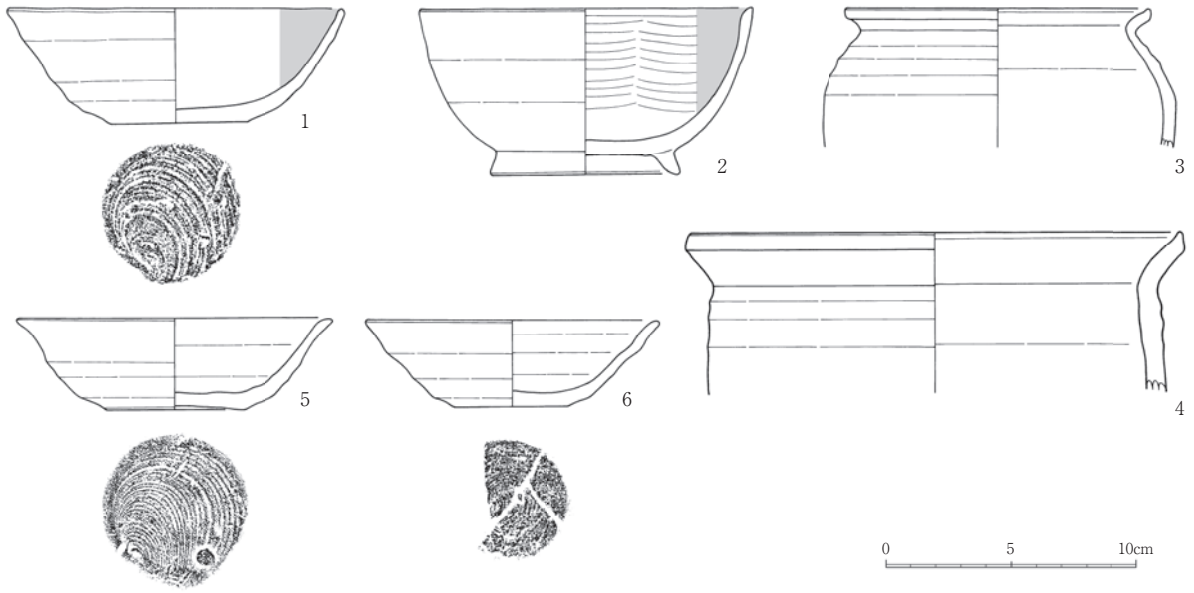
丘陵斜面にあり、遺構の南半は削平されている。平面形は楕円形を呈し、長軸76cm、短軸63cm、深さ32cmである。断面形は逆台形を呈する。床面は平坦で、壁はそこから開いて立ち上がる。底面から壁面にかけては火熱を受けており、底面近くを覆う堆積土には炭や焼土が多く含まれている。

［SX507焼土遺構］（第35図）

丘陵頂部斜面にある。SX508と重複し、これよりも新しい。平面形は不整な楕円形を呈し、長軸92cm、短軸80cm、深さ19cmである。断面形は皿形を呈し、壁は床面から緩やかに立ち上がる。底面は火熱を受けており、底面近くを覆う堆積土には炭や焼土が多く含まれている。

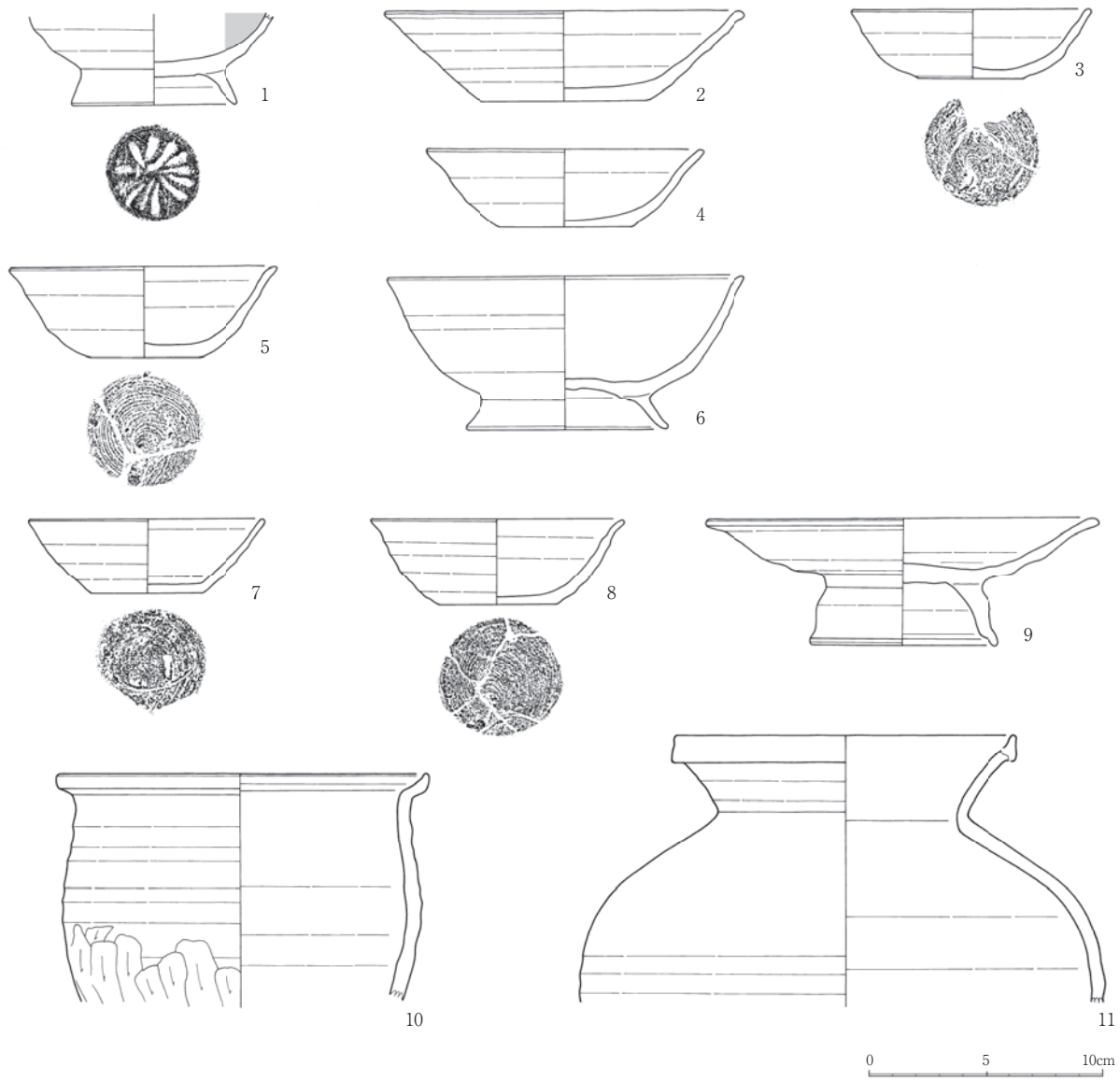
［SX508焼土遺構］（第35図）

丘陵頂部斜面にある。SX507と重複し、これよりも古しい。平面形は円形を呈し、直径127cm、深さ21cmである。断面形は皿形を呈し、壁は床面から緩やかに立ち上がる。底面から壁面にかけては火熱を受けており、底面近くを覆う堆積土には炭や焼土が多く含まれている。



番	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1	1	土師器　坏	13.5	5.6	4.5	内：黒色処理　外：ロクロナデ　底：回転糸切り　524－3
2	1	土師器　高台坏	13.4	7.6	4.7	外：ロクロナデ　内：ミガキ＋黒色処理　524－6
3	1	土師器　甕	12.0			内外面：ロクロナデ　524－4
4	1	土師器　甕	19.7			内外面：ロクロナデ　524－5
5	1	須恵器　坏	12.7	5.6	3.7	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　524－1
6	1	赤焼土器　坏	11.8	4.6	3.5	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　524－2

第36図　調査区南東部出土遺物



番	区	層位	種　類	口　径	底　径	器　高	調　整
1		1	赤焼土器高台坏		7.2		内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　515－6
2	C6	1	須恵器　坏	15.4	7.0	3.9	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　515－1
3		1	赤焼土器　坏	10.3	4.6	3.0	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　515－3
4		1	赤焼土器　坏	11.8	6.0	3.4	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　515－2
5		1	赤焼土器　坏	11.5	4.8	3.9	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　515－4
6		1	赤焼土器高台坏	15.3	8.6	6.6	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り　515－5
7		1	赤焼土器　坏	10.2	4.8	3.2	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り
8		1	赤焼土器　坏	10.9	5.0	3.6	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り
9		1	赤焼土器高台坏	16.9	8.1	5.4	坏部：内外面ロクロナデ　台部：内外面ロクロナデ
10		1	土師器甕	16.1			内：ロクロナデ　外：ロクロ＋ヘラケズリ
11		1	須恵器　壺				内外面：ロクロナデ

第37図　その他の遺物

V　考　　察

これまで、本遺跡の発掘調査の概要についてまとめてきたが、これらの調査結果をふまえて、あらためて遺物と遺構について検討し、遺構の年代や変遷・遺跡の性格などについて考察を加えることとする。

以下、調査区毎にそれぞれ検討を加える。

１．Ⅰ区

（1）遺物について

Ⅰ区から出土した遺物には、土師器（坏・甕・鉢）、須恵器（坏・鉢）、鉄製品（小片）などがあり、整理用コンテナで合計５箱ある。これらの多くは磨滅が著しく、その中で図示できたものは住居跡から出土した19点（土師器坏７点・甕３点・鉢２点、須恵器坏６点・鉢１点）にすぎない。さらにこれらの中で、まとまって遺物が出土したのはSI303のみであることから、ここでは同住居跡の出土遺物を中心に検討する。

［SI303出土遺物］

SI303竪穴住居跡はほぼ同位置で二時期の変遷が認められ、遺物はSI303b掘方埋土中、SI303bのカマド燃焼部や床面、堆積土中などから出土している。

これらの遺物は、SI303b掘方埋土出土のものはSI303b構築時に、カマド燃焼部や床面から出土した遺物はSI303bの廃絶時期に、堆積土から出土したものはSI303b廃絶後埋まりきらない状態でそれぞれ廃棄された物であり、SI303bの機能年代とは大きく異ならないと考えられる。こうしたことからここではすべての遺物を多少の時間差を含んだものと考慮しながら一まとまりとして扱うこととする。

遺物には土師器坏６点・甕１点・鉢１点、須恵器坏４点・鉢１点がある。

土師器坏は、非ロクロ調整で底部が平らで、体部が底部から内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至り、外面がヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理されているもの（1～3）、非ロクロ調整で底部が平らで外端が張り出し、体部は内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至り、外面の全面がヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理されているもの（4）、ロクロ調整で、底部切り離し後に底部全体から体部下端にかけて回転ヘラケズリの再調整を加えたもの（5）、回転糸切りで無調整のもの（6）がある。

土師器甕は長胴形を呈し、ロクロを使用せず、体部外面がヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラナデである。

土師器鉢は、ロクロを使用せず、体部外面がヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラナデである。

須恵器坏は、体部が底部から直線的に立ち上がるものや内湾気味に立ち上がるものがあり、いずれも口径に対して底径が比較的大きい。底部の底部切り離しは回転ヘラ切りによるもの１点と、回転糸切りによるもの３点がある。

SI303の出土土器についてまとめれば、土師器坏は非ロクロ調整で平底を呈し外面全体にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理したものと、ロクロ調整で底部切り離し後に底部や体部下端に回転ヘラケズリの再調整を加えたものと糸切り無調整のもので構成され、それにロクロを使用しない長胴形の土師器甕が伴い、須恵器坏は回転糸切りもしくは回転ヘラ切りの両者がみられる土器群と捉えることができる。

こうした土器群を出土する例は、栗原市（瀬峰町）大境山遺跡29号住居跡（瀬峰町教育委員会：1983)、栗原市（築館町）伊治城SI173竪穴住居跡（築館町教育委員会：1991)、利府町郷楽遺跡105a竪穴住居跡（宮城県教育委員会：1990)、大崎市（古川市）高幌遺跡SI34竪穴住居跡（古川市教育委員会：2001）があげられる。

大境山遺跡29号住居跡では、土師器坏は非ロクロ調整で平底を呈し外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理したものと、ロクロ調整で底部切り離し後に手持ちもしくは回転ケズリの再調整をもつものによって構成され、ロクロを使用しない土師器甕が伴い、須恵器坏は回転糸切りもしくは回転ヘラ切りの両者が見られ、これらの土器は東北地方の土師器の編年の中で「表杉の入式」の初頭のものとして捉えている。

伊治城SI173竪穴住居跡では、土師器坏はロクロ調整で底部切り離し後に回転ヘラケズリの再調整をもつものが主体を占め、非ロクロ調整で外面にヘラミガキの施されたものを伴っている。土師器甕にはロクロ使用と非使用の両者があり、須恵器坏はすべてヘラ切りによるものである。８世紀末頃と想定している。

郷楽遺跡105a竪穴住居跡では、土師器坏は非ロクロ調整で平底を呈し外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理したものとロクロ調整で切り離し後に回転ヘラケズリの再調整をもつものからなり、土師器甕は非ロクロ非成形の長胴形のものが伴い、須恵器坏はいずれも回転ヘラ切りである。８世紀末頃と考えられている。

高幌遺跡SI34竪穴住居跡では、土師器坏は非ロクロ調整で平底を呈し外面にヘラミガキを施したものと丸底で底部にヘラケズリ、口縁部にヘラミガキを施したもの、ロクロ調整で底部切り離し後に回転ケズリの調整が加えられたものからなり、土師器甕はロクロ成形の長胴形のものが伴い、須恵器坏はいずれも回転糸切りである。９世紀初頭頃と考えられている。

本遺跡のものとこれらを比較すると、土師器坏は非ロクロ調整で平底を呈し外面全面ケズリを施されている点で大境山遺跡29号住居跡・郷楽遺跡105a竪穴住居跡・高幌遺跡SI34竪穴住居跡に類似し、高幌には丸底のものが含まれる点で若干の相違がみられる。また、伊治城SI173竪穴住居跡ではロクロ調整のものが主体を占める点でそれぞれ違いがみられる。

須恵器坏では、底部の切り離しが回転糸切りと回転ヘラ切りの両者で構成されている郷楽遺跡105a竪穴住居跡や大境山遺跡29号住居跡には類似するが、ヘラ切りのみで構成される伊治城SI173竪穴住居跡とは異なる。

こうした要素を検討するとSI303は大境山遺跡29号住居跡・郷楽遺跡105a竪穴住居跡・高幌遺跡SI34竪穴住居跡に類似し、これらの年代が８世紀末～９世紀初頭頃と捉えられていることから、同住

居跡も同様に８世紀末～９世紀初頭頃と考えられる。

（2）遺構について

○竪穴住居跡

前述したようにSI303竪穴住居跡については出土遺物の検討から、８世紀末～９世紀初頭頃のものであるとの結論が得られた。ここではそれ以外の竪穴住居跡の年代について検討を加える。

竪穴住居跡はSI303以外に３軒ある。これらの住居から出土した遺物は図示できたものがSI302・SI304は各１点 SI305は４点と図示できた遺物は少ないが、それらをSI303と比較すると共通する要素はそれぞれに伺われ、大きく異なる点は見られない。このことからこれら３軒の住居の年代についてもSI303と大きく変わらない８世紀末～９世紀初頭頃と考えられる。

○掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区の中央から南側にかけて合計９棟検出された。

他遺構との重複関係から最も新しい遺構群と考えられるが、柱穴や遺構の周辺からこの建物群に伴う遺物が一切出土しておらず、直接的に時期を推定することはできない。

しかし、一般的に古代以前の掘立柱建物の柱穴は方形で比較的規模も大きく、底面も平らにしっかり掘られているものが多いという特徴を示すのに対して、今回検出された建物の柱穴は円形や不整の長方形を呈するものが多く、しかも底面の掘り方も雑である。こうしたことから、これらの掘立柱建物跡は古代まで遡るものではなく、中世以降のものと考えられる。

これらの建物の性格については、それぞれの建物に重複関係が認められることから、個々に独立して存在したとは考えられない。建物の配置や重複の状況をみると、大きく３つの位置（SB307ab、SB309～ SB312、SB313～ SB315）で建て替えが行われ、その中で建物の規模や構造をみるとSB307aとSB307b、SB309とSB310、SB311とSB312はそれぞれ同規模・同位置に存在することや建物の基準となる方向がほぼ同一のものであることから、個々の建物は基本的な構造や配置を変えずに同じ場所で建て替えが行われたものと考えられる。さらに、各建物の大きさや柱穴の規模を比較すると、SB307abは桁行総長14m、梁行総長６m（床面積84㎡）と大形なのに対して、他の建物は床面積が15㎡程度と非常に小形である。またSB307abは柱穴も長方形を基調とし60×130cm程度であるのに対して、他の建物は円形や隅丸の方形を呈し一辺（もしくは径）30～40cmと小形である。こうしたことを考慮すれば、SB307abは中心的な建物であり、SB309～ SB315はそれに伴う雑舎と考えられ、全体は主屋１棟と雑舎２棟で構成されていた屋敷地と推定される。

２．Ⅱ区

（1）遺物について

Ⅱ区から出土した遺物には土師器（坏・甕・鉢・高台坏・高台鉢・壺・耳皿）、須恵器（坏・甕・鉢・高台坏・高台皿・壺）、赤焼土器（坏・高台坏）、石製品（砥石・管玉）、鉄製品、瓦などがあり、整理用コンテナで30箱ある。この中で主体を占めるのは土師器・須恵器・赤焼土器で、そのほとんどは

調査区南西部の谷地（SX511・SX516・SX523）や南東部の包含層（SX524）から出土している。

住居跡などの遺構から出土したものは量的に少なく、ここでは遺物がまとまって出土したSX511・SX516・SX523を中心に検討する。

［SX511出土遺物］

調査区南西部の谷地の堆積層から出土した遺物で、灰白色火山灰を挟んで上下の２枚に分けられる。なお、後述するSX516はSX511の１層の窪みに一括廃棄されたものであり、大きくはSX511－１層の一時期を示すものと捉えることができる。

○１層出土遺物（第27～29図）

10世紀初頭とされる灰白色火山灰の降下後に堆積した暗褐色土層中の遺物で、グリッドのC－7.8区付近を中心とした東西10m×南北22mの範囲で土器類が集中して出土している。土器の出土状況は層中からまんべんなく出土しているもので、二次的な堆積によると考えられる。

遺物には図示できたものには土師器坏７点（1～7）・高台坏５点（8～12）・甕１点（13）・鉢２点（14.15）・台付鉢２点（16.17）、須恵器坏２点（18.19）・高台皿１点（20）、赤焼土器坏18点（21～38）、高台坏７点（39～45）があり、その他に須恵器（甕・壺）、瓦がある。

この中で坏の構成比率をみると、赤焼土器が圧倒的に多く土師器は全体の四分の１程度、須恵器は１割にも満たない。

土師器はすべてロクロ調整である。

土師器坏は内外面ともヘラミガキ・黒色処理された１点を除き７点中６点が回転糸切り無調整で、内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されている。ミガキの密度は比較的粗く、口縁部付近など部分的に加えられたものも見られる。

高台坏は内外面ともヘラミガキ・黒色処理されているもの(8)と外面ロクロ調整、内面ヘラミガキ・黒色処理のもの（9～12）があり、後者には高台部が短く開くもの（10）や比較的背が高く端部が反るもの（11.12）、高台部が非常に高く身部よりも高いもの（9）などもある。

鉢は破片資料で全体的器形は不明であるが、いずれも口縁部が外反し、片口が付くもの（15）もある。台付鉢は底部から口縁部にかけて直線的に外傾し高台が付く。高台は、端部に向かって「ハ」の字形に開いている。

須恵器坏はすべて回転糸切り無調整で、丸みをもって立ち上がり口縁部が外反気味のものが多く見られる。

高台皿は口縁端部が大きく外反している。付高台で高さは低く断面形は三角を呈している。

須恵器高台坏は全体形の分かるものは１点のみであるが、身部は赤焼土器坏と比べ法量的に大きい。高台は付け高台で、比較的背が高く、端部にむかって「ハ」の字形に開いている。

赤焼土器坏は土師器坏と比べると小形のものが多く、口径12cm程度のものが主体を占め、14cmを越えるものはみられない。器形は体部から体部にかけての立ち上がりが丸みを持っているものや直線的なもの、口縁部が外反気味に開くものや直線的に外傾するものなど多様であるが、いずれも口径に比して底部は小さい。

○SX516出土遺物（第31.32図）

自然流路SD516の付近から検出された土器集中箇所で、２×４ｍの窪地から多量の土器が出土している。これらの土器は、多量の炭化物とともに出土していること、折り重なった状態で検出されていること、一定の範囲内に収まることなどから一括の廃棄によるものと考えられ、ある一定の時期の土器構成を示す資料と捉えることができる。

SX516から出土した遺物で図示できたものには土師器坏12点（1～12）・高台坏１点（13）・甕１点（14）・耳皿１点（15）、須恵器坏６点（17～22）、赤焼土器坏15点（23～37）・高台坏２点（38.39）・耳皿１点（16）があり、この他に土師器鉢、須恵器甕などがある。この中で土師器はすべてロクロ調整である。

土師器坏は、12点中11点が回転糸切り無調整のもので、１点（12）のみ底部の周縁に手持ちヘラケズリの再調整が加えられている。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されているが、ミガキの密度は比較的粗く、見込み付近などに部分的に加えられているものやほとんど施されないものも見られる。

土師器高台坏は内外面ともヘラミガキが施され、内面は黒色処理されている。高台は付高台で比較的背が高く、端部に向かって「ハ」の字形に開いている。

須恵器坏はすべて回転糸切り無調整で、丸みをもって立ち上がり口縁部が外反気味のものが多く見られる。

赤焼土器坏は土師器坏や須恵器坏と比べると小形のものが多く、口径12cm程度のものが主体を占めている。器形は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がるものや直線的なもの、口縁部が外反気味に開くものや直線的に外傾するものなど多様であるが、いずれも口径に比して底部の小さいものが多い。

赤焼土器高台坏は２点のみでいずれも脚部の破片である。薄くて高めの付け高台で、「ハ」の字形を呈し端部で外側に開く。

○SX511－１層・SX516出土遺物の年代

SX511－１層・SX516出土遺物と類似する土器群を出土した遺跡としては多賀城跡第61次調査７層出土土器（宮多研：1991）や仙台市鹿島遺跡４号土壙（宮教委：1984）がある。

多賀城跡第61次調査７層出土土器は須恵器・土師器・須恵系土器（註１）・灰釉陶器からなり、食膳具である「坏」は須恵系土器が主体を占める。土師器坏はすべてロクロ調整で底部は回転糸切り無調整、内面はヘラミガキ・黒色処理である。土師器高台坏は坏に比べ量的に多く（二倍程度）みられる。調整には外面がロクロ調整のものとヘラミガキ・黒色処理されたものがあり、内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されている。高台はすべて断面が三角形を呈して背の低いものである（三角高台）。須恵系土器坏は口径が10cm程度のものと13cm程度のものとがあり、すべて糸切り無調整である。高台坏には体部の立ち上がりが内湾気味のものと直線的に外傾するものとがある。高台は断面が三角形を呈して背の低いもの（三角高台）と端部に向かって「ハ」の字形に開き背の高いもの（高高台）とがあり、量的には前者が主体を占めている。これらの土器は須恵系土器に台付皿がみられることや10cm程度の小形坏が含まれる事などから多賀城跡の土器分類の「Ｆ群土器」に位置づけられており、

年代については遺物の出土した７層と灰白色火山灰との間に間層として８層を挟むことから灰白色火山灰の降下から８層が形成されるまでの時間を考慮し10世紀中頃以降のものとしている。

鹿島遺跡４号土壙出土土器は須恵器・土師器・赤焼土器からなり、構成比は赤焼土器が量的に土師器・須恵器を圧倒し、なかでも口径９cmほどの赤焼土器小皿と分類される小形坏が他器種よりも極めて高率である。土師器坏はすべて糸切り無調整で、外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理されているが、内面のミガキは雑で部分的にしか施されないものもある。土師器高台坏は坏と同数程度みられる。外面はロクロ調整、内面ヘラミガキ・黒色処理されている。高台はすべて三角高台である。赤焼土器坏は口径10cm以下で背の低い小皿とされるものと口径13cm程度のものの二種があり、前者が圧倒的に多い。器形は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がるものや直線的に立ち上がるものなど様々あるが、どれも回転糸切り無調整である。赤焼土器高台坏は直線的に開くものと内湾気味に立ち上がるものがあり、量的には前者が多い。高台は三角高台と高高台があり、数は同程度である。11世紀前半頃に位置づけられている。

これらとSX511－１層・SX516出土遺物について比較すると、土器組成では本遺跡は遺跡の性格の違いから多賀城跡にみられる灰釉陶器が含まれないものの､基本的には土師器・須恵器・赤焼土器（須恵系土器）からなり、いずれも赤焼土器が主体となっている点で共通する。この中で坏についてみると、多賀城跡第61次調査７層では須恵器が壺・甕類に限定され須恵器坏が認められない事や鹿島遺跡４号土壙では須恵器坏は破片程度しか出土していないなど、須恵器坏がほとんどみられないのに対してSX511－１層・SX516出土遺物では少量ではあるが、１割程度認められている。

土師器坏は３遺跡とも底部が糸切り無調整で、外面がロクロ調整、内面がヘラミガキ・黒色処理されているもので、とくに鹿島遺跡のものとは内面のミガキは雑に仕上げられているなど共通する特徴がみられる。一方、土師器高台坏は坏との比率と高台の形状の点で遺跡間に相違がみられた。すなわち、高台坏と坏の比率をみると多賀城跡・鹿島遺跡では半数以上高台坏が占めるのに対して太田窯跡では量的に少なく（二割程度)、しかも高台の形状は多賀城跡・鹿島遺跡ではすべて三角高台なのに対し、太田窯跡ではすべて高高台である。さらに、この高台の形状の特徴は赤焼土器の高台坏でも同様で、多賀城跡・鹿島遺跡では三角高台と高高台からなり、三角高台が半数以上占めるのに対して太田窯跡ではすべて高高台である。

このように３遺跡間では土器組成や土師器坏・赤焼土器の特徴などで類似する点がみられるものの、土師器の坏と高台坏の比率や高台の作りなどの仔細な面では相違する点も認められる。こうした相違点の中でSX511－１層・SX516出土土器にみられる特徴はいずれも他二者よりも古い要素と指摘されるものであり、時期的に多賀城跡・鹿島遺跡に先行し、SX511－１層・SX516出土土器→多賀城跡第61次調査７層出土土器→鹿島遺跡４号土壙出土土器と変遷すると考えられる。

これらの土器の実年代については、SX511－１層が灰白色火山灰を直接覆うことから降下時期（10世紀初頭＝915年）と大きく隔たるものではなく、しかも出土土器の対比から10世紀中頃以降とされる多賀城跡第61次調査７層出土土器に先行することから、灰白色火山灰降下以降（10世紀初頭を除く）の10世紀前半頃と考えられる。

○３層出土遺物（第29～30図）

灰白色火山灰下の黒暗褐色土層中から出土した遺物である。土器類はグリッドのB.C－４区を中心とした東西８ｍ×南北15mの範囲の層中から出土している。一箇所に集中して出土したものや重なり合った状態で出土しているものはなく、二次的な堆積によるものと考えられる。

図示したものには土師器坏12点（46～57）・壺１点（58）・鉢１点（59）、須恵器坏７点（60～66）、赤焼土器坏１点（67）があり、それ以外に土師器（甕・高台坏）、須恵器（甕）、赤焼土器（高台坏）がある。この中で坏類は土師器が半数以上を占め、須恵器はその半数程度、赤焼土器は１割にも満たない。

土師器坏は非ロクロ調整で平底を呈し外面全体にヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理したもの（46～50）、ロクロ調整で外面全体にヘラケズリを加え、内面はヘラミガキ・黒色処理したもの（51～53）、ロクロ調整で内面はヘラミガキ・黒色処理し、底部は回転糸切り無調整であるもの（54～56）、ロクロ調整で内面はヘラミガキ・黒色処理し、底部は切り離し後に回転ヘラケズリを加えているもの（57）がある。

須恵器坏はすべて回転糸切りによるもので、６個中１個に切り離し後再調整（手持ちヘラケズリ）が加えられている。体部の立ち上がりは直線的に外傾するものが多く、いずれも口径に比して底部が大きい。

赤焼土器坏は図示できたものは一点のみであるが、他遺構出土の赤焼土器坏と比べると法量的に大きめである。底部から丸みを持って立ち上がり口縁部にかけては直線的に外傾している。

これらの土器は、前述したとおり出土状態から検討すれば短期間に廃棄された一括遺物とは考え難くさまざまの時期のものが混在する時間幅をもった遺物と捉えることができる。

個々の遺物の年代を検討すれば、46～50の土師器坏は概ね８世紀後半から末頃に見られるものであり、54～56のようなロクロ調整で回転糸切り無調整のものは９世紀以降に増加する。また、須恵器坏の切り離し技法がすべて回転糸切りであるなどの特徴は９世紀以降に見られるものである。さらに少量ではあるが一緒に出土している赤焼土器は一般的には９世紀の後半以降に出現するものとされている。上記のように、Ⅲ層には、８世紀後半から灰白色火山灰の降下の10世紀初頭まで広い時間幅の遺物が混在しており、谷地形の部分に継続的に堆積したものと考えられる。

（2）遺構の年代

上記のように出土土器には、８世紀後半から10世紀前半頃までのものがあり、この地区が長い間「生活の場」として利用されていた事は明らかとなったが、住居からの土器の出土は少なく年代を決定する資料は乏しい。図示したものだけでなく破片資料なども含めそれぞれの住居の年代を推定すれば、非ロクロ調整の土師器のみ出土しているSI503・510・525・528は８世紀後半、非ロクロ調整とロクロ調整の土師器坏と回転糸切り無調整の須恵器坏からなるSI513は８世紀末～９世紀初頭頃、ロクロ調整の土師器坏・甕と回転糸切り無調整の須恵器坏からなるSI501・502は９世紀代、赤焼土器のみ出土しているSI529は10世紀前半頃と考えられる。

註１　ここで報告されている「須恵系土器」と太田窯跡から出土している「赤焼土器」は製作技法や焼成方法・色調から同じものと考える。

Ⅵ　ま　と　め

１．太田窯跡は遺構の分布状態などから、南北二箇所の調査区を設け、平成15年に北調査区（Ⅰ区）の、平成17年に南調査区（Ⅱ区）の調査を行なった。

２．Ⅰ区から発見された遺構には、竪穴住居跡５軒、掘立柱建物跡８棟、溝３条があり、竪穴住居跡は８世紀末から９世紀初頭頃、掘立柱建物跡は中世以降のものと考えられる。この中で掘立柱建物跡は一群のもので屋敷跡であった考えられる。

３．Ⅱ区から発見された遺構には、竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡１棟、土壙３基、溝７条、遺物集中地点４箇所があり、竪穴住居跡と遺物集中地点は８世紀後半から10世紀前半頃のものである。

　遺物集中地点は調査区南西部の沢地に形成されており、継続的に遺物が廃棄されていたと考えられる。また、この中でSX516出土遺物は915年降下とされる灰白色火山灰の堆積直後に一括廃棄されたもので、この時期の土器様相を知る上で注目される。

４．出土した遺物には土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、帯金具、管玉、鉄滓などがあり、前三者が主体を占める。

５．本遺跡は「太田窯跡」として遺跡登録されているものの、今回の調査では窯に起因すると考えられる融着した須恵器が出土しているのみで、窯本体は検出されなかった。

【引用・参考文献】

氏家和典：1957　「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14号　東北史学会

白鳥良一：1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『多賀城跡調査研究所　研究紀要Ⅶ』

瀬峰町教育委員会：1983　「大境山遺跡」瀬峰町文化財調査報告書　第４集

築館町教育委員会：1991　「伊治城跡」築館町文化財調査報告書　第４集

宮城県教育委員会：2006　「角山遺跡・山居遺跡」宮城県文化財調査報告書　第206集

宮城県教育委員会：2005　「角山遺跡」宮城県文化財調査報告書　第200集

宮城県教育委員会：1990　「利府町郷楽遺跡Ⅱ」宮城県文化財調査報告書　第134集

宮城県教育委員会：1984　「鹿島遺跡・竹之内遺跡」宮城県文化財調査報告書　第101集

古川市教育委員会：2001　「高幌遺跡」宮城県古川市文化財調査報告書　第29集

宮城県多賀城跡調査研究所：1991　「多賀城跡」宮城県多賀城跡調査研究所年報1991

写　真　図　版

遺跡遠景
（Ⅱ区）

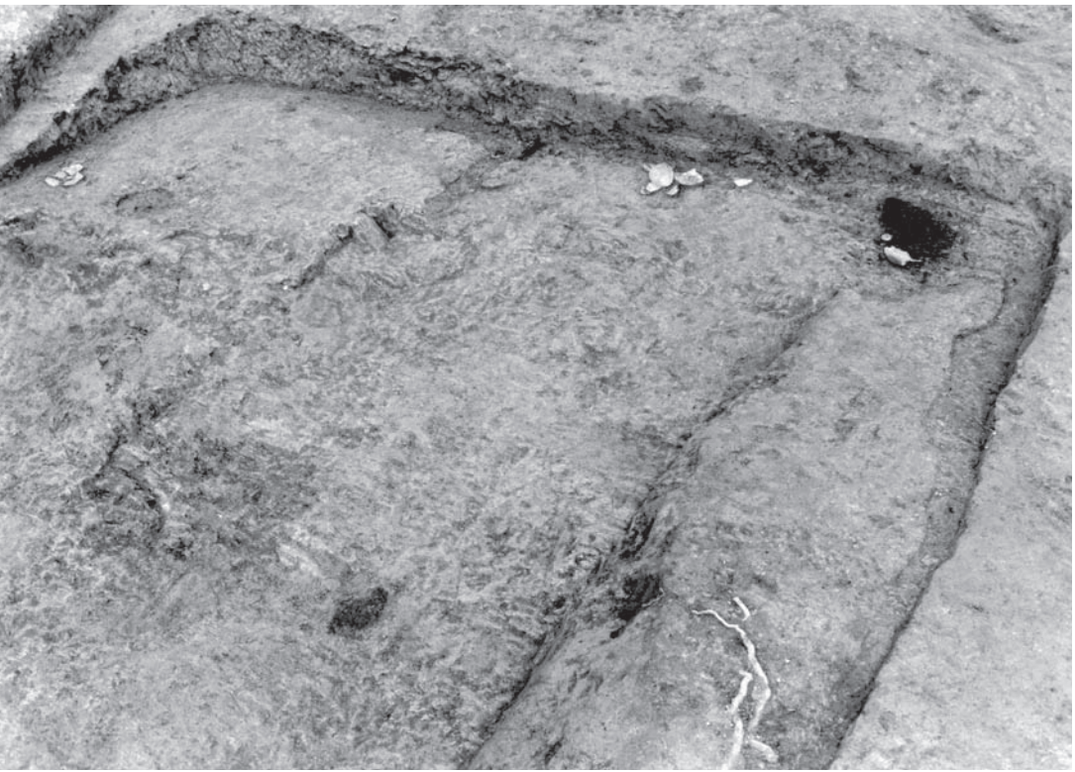
SI302竪穴住居跡

SI302竪穴住居跡
カマド

図版 1

SI303竪穴住居跡

SI303竪穴住居跡
カマド



SI304竪穴住居跡

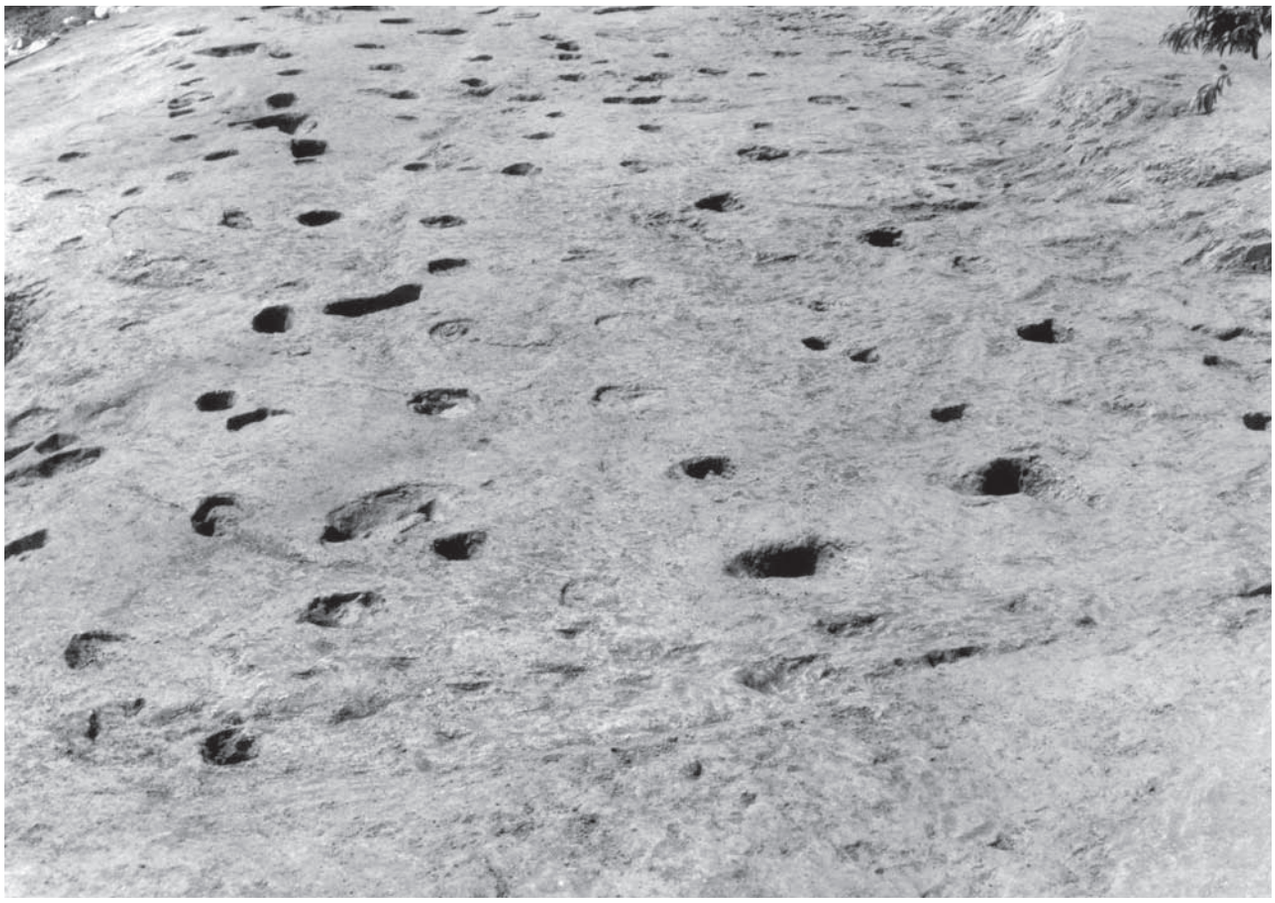
図版２

SI305竪穴住居跡

SI305竪穴住居跡
カマド

SB307掘立柱建物跡

図版３



上：SI303竪穴住居跡と掘立柱建物跡群

下：SB313掘立柱建物跡周辺

図版４

上：SI502竪穴住居跡

中左：同カマド下暗渠

中右：同カマド

下：SI503竪穴住居跡

図版５

上：SI503竪穴住居跡カマド

中上左：SI510竪穴住居跡

中上右：SI513竪穴住居跡

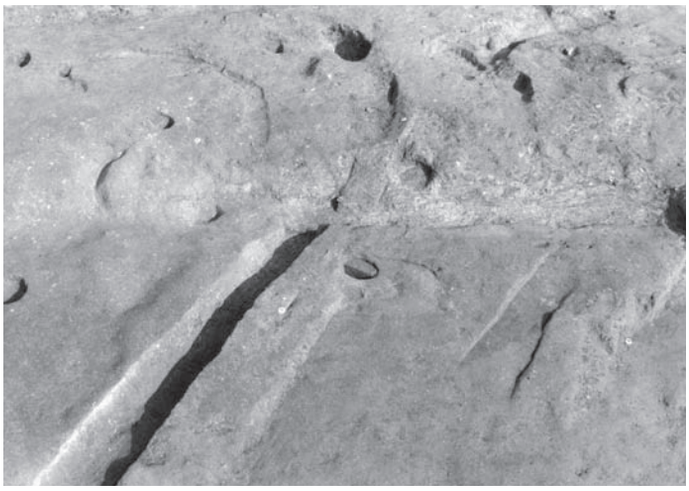
中下左：SI525竪穴住居跡

中下右：SI528竪穴住居跡

下左：SI530竪穴住居跡

下右：SB536掘立柱建物跡周辺

図版６



上：SX511遺物出土状況

下：SX516遺物出土状況

図版７

SI303－2

SI303－3

SI303－4

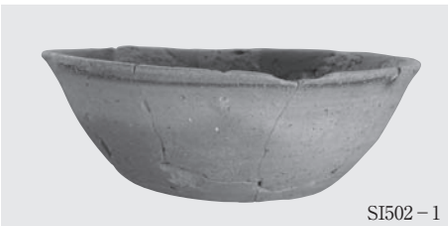
SI303－8

SI303－9

SI305－1

SI303－11

SI303－12


SI502－1

SI513－4

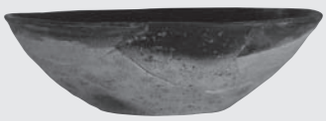
SI525－2

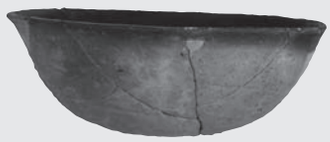
SI304－01

SI525－3

出土遺物（１）　図版８

SX511－1


SX511－4


SX511－5

SX511－9

SX511－20

SX511－22

SX511－24

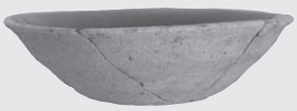
SX511－26

SX511－29

SX511－30

SX511－31

SX511－32


SX511－33

SX511－38

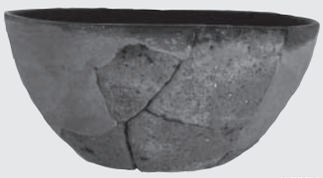
SX511－39

SX511－46

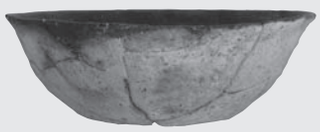
SX511－47

SX511－48

SX511－51


SX511－52

SX511－53


SX511－56

SX511－60

SX511－62

出土遺物（２）　図版９

SX511－67

SX516－1

SX516－3

SX516－4

SX516－13

SX516－17

SX516－18

SX516－19

SX516－23

SX516－24

SX516－26

SX511－28

SX516－29

SX516－33

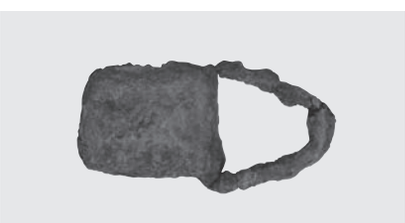
SX516－37

SX524－1

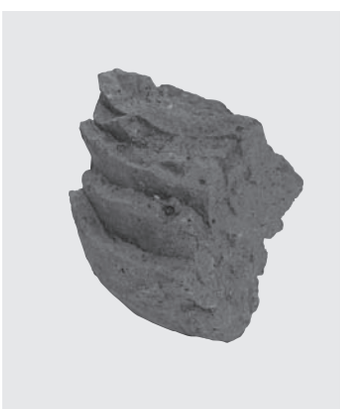
SI515－4

SX515－5

SI503


SX511－１層

SX511－１層


SX511－３層

出土遺物（３）　図版10

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおたかまあと
書名	太田窯跡
副書名	三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅶ
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第210集
編著者名	菊地逸夫
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980－8423　宮城県仙台市青葉区本町三丁目８－１　TEL 022－211－3682
発行年月日	西暦　2007年３月９日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
おおたかまあと 太田窯跡	みやぎけんいしのまきしものう 宮城県石巻市桃生 ちょうおおたあざじっかん 町 太田字拾貫	042021	77027	38° 32′ 50″	141° 16′ 27″	2002.10.15 ～10.25 2003.4.30 ～8.1 2005.5.9 ～11.30	約3,900㎡	道路建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田窯跡	窯跡・散布地	奈良・平安	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・遺物包含層	土師器・須恵器・赤焼土器・帯金具・瓦	

宮城県文化財調査報告書第210集

太　田　窯　跡

－三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅶ－

平成19年３月５日印刷
平成19年３月９日発行

発　行　宮　城　県　教　育　委　員　会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号

印　刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
仙台市青葉区立町24-24